

水戸市北屋敷古墳

市道常澄 6-0008 号線埋蔵文化財発掘調査報告書

茨城県水戸市

平成七年二月

水戸市北屋敷古墳

題字 水戸市教育委員会教育長 古橋貞夫



円筒埴輪の出土状況

State of a cylindrical *haniwa* (unglazed earthenware funerary figure) when excavated

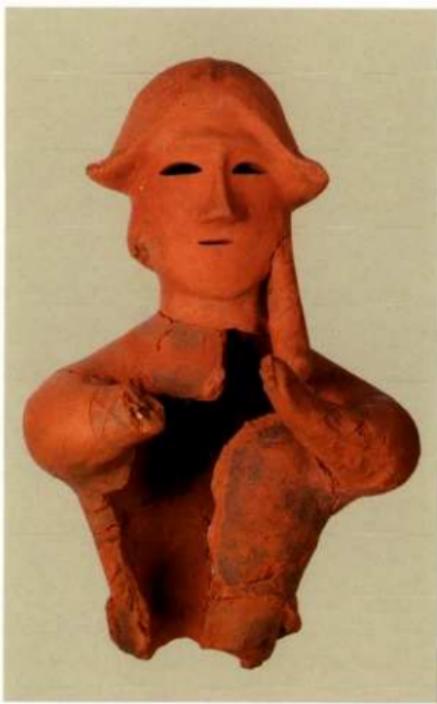


埴輪武装男子の出土状況

State of an armored male *haniwa* figure when excavated



埴輪武装男子
An armored male *haniwa* figure



埴輪男子
A male *hanjisa* figure



埴輪男子
A male *hanjisa* figure



埴輪女子
A female *hanjisa* figure

序

北屋敷古墳は那珂川右岸の東南台地上に位置し、本市東部の大串町に所在する遺跡で、古墳の周辺には北屋敷遺跡をはじめ数多くの集落跡や古墳群が分布するなど、古くから様々な時代の生活が営まれていた地域であります。

しかし、近年の急増する開発等によって、埋蔵文化財の現状保存を図ることは非常に困難を呈しております。本市ではその意義や重要性をふまえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき保護・保存に努めております。

のことから、市道常澄6-0008号線道路改良工事に伴う北屋敷古墳の発掘調査は、文化財保護の観点にたって十分に事前協議を重ね、記録保存を構すべく実施したものであります。

しかし、これまでに出土例の数少ない人物埴輪数点が出土するなど、出土遺物の重要性を鑑み、また、将来における未調査部分の保存についても自然的・人的破壊の危機を懸念し、学術的見地から古墳の全容解明が不可欠であると判断したことから学術調査を実施したものであり、古墳の主体部である埋葬施設の粘土櫛が検出され、この地方の高位な人物の墳墓であったことがうかがえるなど、本調査の実施により古墳の全体的状況の記録保存を図るうえで極めて貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行いたします本書が、今後の埋蔵文化財の保護・保存はもとより、掛け替えのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いに存じます。

終わりに、本調査並びに本書の刊行にあたり御尽力いただきました調査主任井上義安先生をはじめ調査関係者の皆様、御指導・御助言をいただきました茨城県教育府文化課並びに水戸教育事務所の皆様に心から感謝申し上げます。

平成7年2月

水戸市教育長 古橋 貞夫

FOREWARD

The no. 2 Kitanoyashiki mounded tomb (*kofun*), is an archaeological site situated on the southeastern plateau that lies along the right bank of the Naka River in Ōkushi-chō, in Mito City's eastern district. Numerous other communal habitation sites and mounded tomb groups are also to be found scattered around the immediate vicinity of the Kitanoyashiki *kofun*, including the Kitanoyashiki habitation site, in a district which has seen the passage of human activity through many ages, since ancient times.

With the rapid increase in development in recent years, however, we are presented with very considerable difficulties in trying to preserve buried cultural properties intact, and Mito City is therefore endeavouring to protect and preserve these cultural properties, with due regard for their significance and importance, in accordance with the Cultural Properties Protection Act and other relevant legislation.

Accordingly, the excavation of the Kitanoyashiki *kofun* which attended road improvement works on Tsunezumi municipal road no. 6-0008 was carried out with due consideration for the protection of cultural properties so as to ensure both adequate prior consultation and preservation of the archaeological record.

However, in light of the importance of the artifacts unearthed, which included several human *haniwa* (unglazed earthenware funerary) figures, only a relatively small number of which have been excavated throughout the country to date, and because of fears of possible natural or human destruction of the unexcavated portion of the site in future, a full examination of the tomb site was deemed necessary from an academic point of view, and was carried out accordingly. As a result, a ceramic coffin was found in the tomb's burial chamber, from which it could be inferred that the tomb was that of a high-ranking personage in the region and thus, as a consequence of the effort made in this excavation to preserve the archaeological record of the tomb in full, some highly valuable data was obtained.

I sincerely hope that this publication will be widely utilized as an academic research source and in raising consciousness concerning precious and irreplaceable cultural properties, and,

of course, the protection and preservation of buried cultural properties in future.

In conclusion, I would like to express sincere thanks to all those involved in the Kitanoya-shiki *kofun* excavation and in the publication of this report for their dedicated efforts, beginning with Mr Inoue Yoshiyasu, who led the excavation, and to the officers of both the Cultural Affairs Division of the Ibaraki Prefectural Office of Education and Mito Local Education Office for their valuable guidance and advice.

FURUHASHI SADAO

Superintendent

Mito City Board of Education

February 1995

例　　言

- 1 北屋敷古墳は、茨城県水戸市大串町に所在する。
- 2 発掘調査は、市道常澄6ー0008号線の改良工事に伴うもので、「北屋敷古墳発掘調査委託契約書」に基づいて実施した。
- 3 発掘調査は、平成6年3月15日に開始し、同年4月27日に終了した。
- 4 発掘調査の面積は約400m²である。
- 5 発掘調査は、水戸市（市長　岡田　広）の委託により、井上義安（日本考古学協会会員）が担当者、大芦あさ、飛田信雄が補佐員となって実施した。
- 6 本書に掲載した写真は、井上義安と内藤　彰が撮影したものである。
- 7 出土品の整理と図面の作成は、発掘終了後、大串貝塚ふれあい公園L・E・Cセンターおよび担当者（井上）、補佐員（大芦）宅において行った。
- 8 原稿の執筆は、第一～三号住居址の出土遺物を千葉隆司が協力し、それ以外は井上義安が担当した。
- 9 出土遺物は、水戸市教育委員会（水戸市中央1丁目4番1号）が一括保管している。

本文目次

原色図版

序

水戸市教育長 古橋貞夫

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

第一章 北屋敷古墳の位置と現状.....	1
第二章 大串古墳群の概要.....	3
第三章 発掘調査の概要.....	8
第四章 弥生時代遺構の調査.....	10
1 第一号円形竪穴状遺構.....	10
第五章 古墳時代遺構の調査.....	14
1 第一号住居址.....	14
2 第二号住居址.....	19
3 第三号住居址.....	22
第六章 北屋敷第二号古墳の調査.....	27
1 遺存状態.....	27
2 墳丘の測量調査.....	27
3 周溝の確認調査.....	29
4 墓輪の出土状態.....	29
第七章 出土埴輪の概要.....	36
1 円筒埴輪.....	38
2 形象埴輪.....	43
第八章 溝状遺構の調査.....	56
1 第一号溝状遺構.....	56
2 第二号溝状遺構.....	56
3 第三号溝状遺構.....	58
4 出土遺物.....	58
第九章 墳丘および墳丘外出土の遺物.....	59
1 縄文時代の遺物.....	59

2 弥生時代の遺物	59
3 古墳時代の遺物	62
4 歴史時代の遺物	62
あとがき	64
余白欄 「乳飲み児を抱く埴輪」発見の顛末	7
確認調査関係者	

挿 図 目 次

第一図 遺跡付近地形図（○北屋敷古墳）	2
第二図 「東茨城郡誌」の大串古墳出土品図	4
第三図 大串古墳群分布図	6
第四図 墳丘と遺構分布図	9
第五図 第一号円形竪穴状遺構実測図	11
第六図 第一号円形竪穴状遺構出土遺物実測図	12
第七図 第一号住居址・貯蔵穴実測図	15
第八図 第一号住居址出土遺物実測図(1)	16
第九図 第一号住居址出土遺物実測図(2)	17
第一〇図 第二号住居址・炉址・柱穴実測図	20
第十一図 第二号住居址出土遺物実測図	21
第十二図 第三号住居址・炉址・柱穴実測図	23
第十三図 第三号住居址出土遺物実測図(1)	24
第十四図 第三号住居址出土遺物実測図(2)	25
第十五図 第二号古墳測量図	28
第十六図 墓輪および溝状遺構図	31
第十七図 A ブロック埴輪出土状態図	32
第十八図 B ブロック埴輪出土状態図	33
第十九図 C ブロック埴輪出土状態図	34
第二〇図 D ブロック埴輪出土状態図	35
第二十一図 円筒埴輪実測図(1)	39
第二十二図 円筒埴輪実測図(2)	40
第二十三図 円筒埴輪実測図（口縁部）	41
第二十四図 円筒埴輪実測図（体部）	42
第二十五図 円筒埴輪実測図（底部）	43
第二六図 形象埴輪（人物）実測図(1)	45
第二七図 形象埴輪（人物）実測図(2)	46
第二八図 形象埴輪（武人）実測図(3)	47・48
第二九図 形象埴輪（人物）実測図(4)	50

第三〇図 形象埴輪（人物）実測図(5).....	51
第三一図 形象埴輪基部実測図.....	53・54
第三二図 形象埴輪（馬）実測図.....	55
第三三図 溝状遺構断面図.....	56
第三四図 溝状遺物実測図.....	57
第三五図 墳丘・墳丘外出土遺物実測図(1).....	60
第三六図 墳丘・墳丘外出土遺物実測図(2).....	61
第三七図 墳丘断面実測図.....	63

図 版 目 次

- 図版第一 1 遺跡の遠景（東から）
2 遺跡の遠景（東南から）
- 図版第二 1 古墳の現状（西から）
2 古墳の現状（西南から）
- 図版第三 1 墳丘裾部北側の状態（西から）
2 墳丘裾部南側の状態（西から）
- 図版第四 墳丘の築成状態（西から）
- 図版第五 墳丘下・墳丘外の遺構分布状態（南から）
- 図版第六 1 第一号円形竪穴状遺構の全景（南から）
2 第一号円形竪穴状遺構の遺物出土状態（西から）
- 図版第七 1 第一号住居址の全景（北から）
2 第一号住居址の遺物出土状態（西から）
- 図版第八 1 第二号住居址の全景（南から）
2 第二号住居址の遺物出土状態（南西から）
- 図版第九 1 第二号住居址の炉址全景（南から）
2 第二号住居址柱穴P2（左）P3（右）の土層断面
- 図版第一〇 1 第三号住居址の全景（南から）
2 第三号住居址の遺物出土状態（北東から）
- 図版第一一 1 第三号住居址の遺物出土状態（東から）
2 第三号住居址柱穴内の遺物出土状態
- 図版第一二 1 墳丘北側の埴輪出土状態（東から）
2 墳丘北側の埴輪出土状態（西から）
- 図版第一三 1 Aブロックの埴輪出土状態（北東から）
2 Aブロックの埴輪出土状態（東から）
- 図版第一四 1 人物埴輪（男子・腕）の出土状態
2 人物埴輪（腕・腰）の出土状態
- 図版第一五 1 人物埴輪（武人）の出土状態
2 人物埴輪（女子・武人他）の出土状態
- 図版第一六 1 第一号溝状遺構の状態（西・南から）
- 図版第一七 1 第二号溝状遺構の状態（東から）

- 図版第一七 2 第三号溝状遺構の状態（南から）
- 図版第一八 第一号円形竪穴状遺構（上）第一号住居址（下）出土遺物
- 図版第一九 第一号住居址出土遺物
- 図版第二〇 第一・三号住居址出土遺物
- 図版第二一 第三号住居址出土遺物
- 図版第二二 円筒埴輪
- 図版第二三 円筒埴輪（底部）
- 図版第二四 円筒埴輪（口辺部）
- 図版第二五 円筒埴輪（体部）
- 図版第二六 円筒埴輪（底部）
- 図版第二七 人物埴輪（破片一括）
- 図版第二八 人物埴輪（武人）
- 図版第二九 人物埴輪（人物）
- 図版第三〇 人物埴輪（基部）
- 図版第三一 動物埴輪（馬）
- 図版第三二 墳丘・墳丘外出土遺物

第一 章 北屋敷古墳の位置と現状

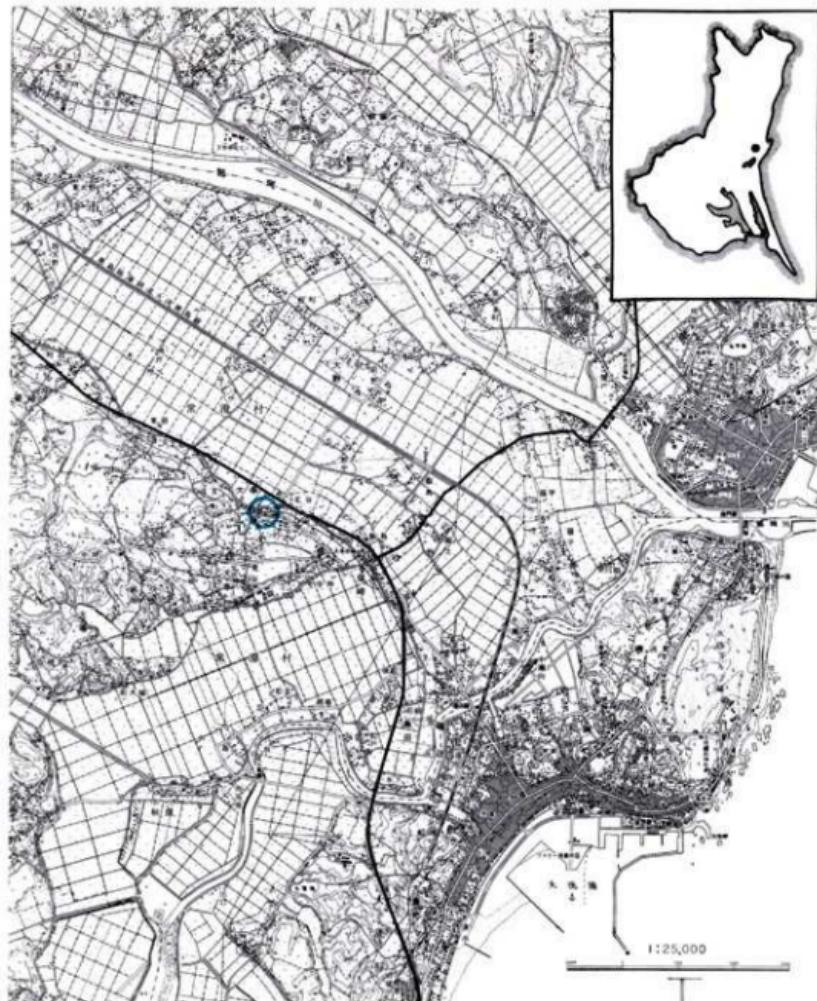
茨城県のほぼ中央部を東に蛇行して鹿島灘に流入する那珂川（一級河川）の右岸には、水戸市下市方面から発達した台地があり、酒沼川との合流地点に向って張りだしている。この台地は、一般に水戸東南台地と呼び、先端部は塙崎町に達するが、この間には幾多の支谷が台地を刻み、先人たちの生活を跡づける貝塚、住居址、古墳その他の遺跡が散在している。塙崎の地は、あらためて説明するまでもなく、奈良時代の和銅6年（713）、官名によって編さんされた『常陸國風土記』で著名な大串貝塚群が所在する場所である。ここから西方約800mの地点に移行すると、そこに小さな支谷が台地に進入する。この支谷を挟んで東南側が北屋敷^{きたのやしき}、北側台地が向山と呼ぶ小字名となる。

北屋敷の地は、平成3年4月1日から12月31日まで、一般国道六号東水戸道路改良工事に伴う、埋蔵文化財記録保存のために、茨城県教育財団が発掘作業を行った。調査面積は道路建設部分の約2,100m²である。この区域内から古墳時代、奈良・平安時代の遺構があきらかにされた。とりわけ古墳時代に関しては、前～中期の住居址が3軒出土したのに加え、封土を消滅したものの周溝を残す円墳1基が発見され、凝灰岩の切り石を積み重ねた横穴式石室内から直刀3口、小刀3点、鉄鎌約30点などの副葬品が出土した。報告書においては第一号古墳と記載している³⁾。

今回、調査の対象となった古墳（第二号古墳）は、教育財団の調査した第一号古墳より東に約100m離れた標高15m前後の山林中に存在した。古墳発見の経緯は、東水戸道路改良工事とは別に、水戸市建設課が周辺の道路環境を整備することになり、あらたに市道常澄6-0008号線の建設を計画し、予定地内の杉林（樹齡36～50年）を伐採した後に確認された。古墳の墳丘と周囲には、第二次大戦時に旧陸軍の防空壕が数か所に掘られ、土砂の移動によって、墳丘の東南側が著しく変形している。このために古墳の発見が遅れたのはやむをえないことであろう。市教育委員会が調査した結果、確実に埴輪を伴う古墳であることが判明した。

私たちも現地踏査でこの事實を再確認し、南側の畠地で後期繩文土器、土師器などの小破片を採集し、墳丘外の平坦な山林内に住居址や土壤などが埋没している可能性を指摘しておいた。

- 1) 常澄村教育委員会「大串貝塚」常澄村文化財調査報告書第4集 平成3年3月
- 2) 教育財団の報告書では「きたやしき」となっているが、「きたのやしき」が正しい地名の呼称である。下記文献参照。
- 3) 水戸市教育委員会「常澄村史」地誌編 平成6年3月
- 3) 茨城県教育財団「一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書I」茨城県教育財団文化財調査報告第79集 平成5年3月



第一図 遺跡付近地形図 (○北星敷古墳)

第二章 大串古墳群の概要

常澄地区（旧常澄村）の古墳は、主として那珂川右岸と濁沼川左岸の台地縁辺部に分布している。『常澄村史』通史編（平成元年8月）によると、その分布を巨視的に観察した場合、①六反田古墳群、②栗崎古墳群、③金山塚古墳群（向山古墳群を含む）、④大串古墳群（長福寺古墳を含む）、⑤高原古墳群、⑥濁沼台古墳群、⑦大場原古墳群、⑧下入野古墳群（下入野西古墳群を含む）、⑨森戸古墳群に大別している。本稿では④の大串古墳群に限定して記述したいと思う。

大串古墳群について、佐藤次男氏は『常澄村史』の中で次のように説明しており、すでに消滅した古墳の所在を確認しておくためにも、参考すべき事項が多いので全文を引用することにしよう。

稻荷神社付近、字山海の台地縁辺の古墳群で、現在一基を残すのみであるが、昭和五十四年までは四基の古墳があった。またこの古墳群は、折居神社辺の大串貝塚の台地縁辺まで分布した一連の古墳群であった。江戸時代からその存在が知られており、「事蹟雜纂」には、「先年大串村ニテ塚ヲヒラキシニ大骨ト觀音像ノ出シ事アリ、骨ハ多クアラス體ノ骨ナドアリシ、其長二尺四寸アリ、推量シ見レハ一丈ヲコヘタル人ト見ヘ不思議ノ事也、予モユキテ見シ事ニタシカナル事也、觀音ノ像ハ立像ニテ長二尺許也、ソノ時ノ説ニカノダイダ法師ガ骨ナルベシト云シトゾ」といった興味のある記述がある。

大正元年十二月十四日、稻荷神社の西南約三三メートルのところからも古墳が発掘されている。『東茨城郡誌』によれば、「此日発掘せられたるものは古剣三口、金環二個、矢の根若干、緒付円鏡一個なり、石櫛は周囲を砂利にて固め、次に木炭を詰め、長七尺、幅四尺、中に石棺あり、岩の厚一尺、附属品は後方にありたり、本県属託栗田勤氏出張取調の結果略一千三百年前のものなるべしと、これは格別の塚もなき所を掘りたるなり、発掘したる長剣は身の長二尺六寸、幅一寸五分、鈞直径二寸、鈞もと二寸六分、金環は径八分、紐付円鏡径三寸六分なり」とある。（引用文のあきらかな誤植4か所は訂正または削除した）

昭和五十四年にも稻荷神社と常澄中学校の中間台地上にあった円墳三基が調査されている。そのうちの一基は、墳形の中央部基盤ローム層に主軸を東西にした長さ一・六五メートル、幅一メートルの細長い土壙で、一部に白色粘土塊や少量の小砂利が認められた。木棺直葬の可能性がある。

以上の三事例のうち、大正元年12月14日云々『東茨城郡誌』所載の稻荷神社境内出土遺物は、翌2年10月1日に、当時の帝室博物館（現東京国立博物館）が、茨城県より引継ぎ収蔵している。昭和55年4月にこの資料は、『東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇』（関東1）の中で公表された。『東茨城郡誌』の不備を補い、副葬品の種類を把握するために解説を再録する。



第二図 『東茨城郡誌』の大串古墳出土品図

- 1 五獸鏡 1
青銅製。約1/3欠失。面径10.2, 2.6×2.4。表裏共に纖維痕多し。
- 2 銅環 2
青銅製。緑锈甚。径2.6×2.4。表面一部剝離。
- 3 直刀 3
鉄製。腐蝕甚。鍔径9.2×7.7。鞘木質痕あり。他に鍔1(径5.7×4.5。鞘木質痕あり)、円頭大刀破片(柄頭長7.7、最大径4.3、鍔径6.9×6.0)あり。
- 4 鉄鎌 一括
鉄製。現存長6.4。茎部に桜皮巻遺存。
- 5 木製壺鎖と兵庫鎖 一括
木製。破片となる。壺鎖上部3片あり。幅1.7。兵庫鎖3連と汎具。
- 6 鞍 一対分
鉄製。鉄の方形座金具遺存。長7.3。

7 帰破片 一括

鉄製、素環鏡板付帰の破片。

【備考】他に土器片、玉石出土。(埋蔵物録による)

以上に引用した内容から、本古墳の埋葬施設と副葬品の種類については大略理解できる。その場所は「稲荷神社の西南約三三メートル」付近と限定されているが、「格別の塚もなき所を掘りたる」ということで、容易には突き止めることができない。しかし、地山のロームを掘り込んで構築した主体部が残っていれば、所在の確認はそれほどむずかしくはないだろう。

さて、大串古墳群は、すでに消滅した前記の2古墳に加えて、昭和54年ごろにも調査後消滅した古墳（3基）があるので、①長福寺古墳の現状確認、②常澄中学校から大串稲荷神社周辺の現存、消滅古墳の所在確認、ならびに調査の経緯など、現時点で確認した内容を記録しておきたい。現地踏査は平成6年10月13・14日の両日、井上義安と整理作業従事者が実施した。

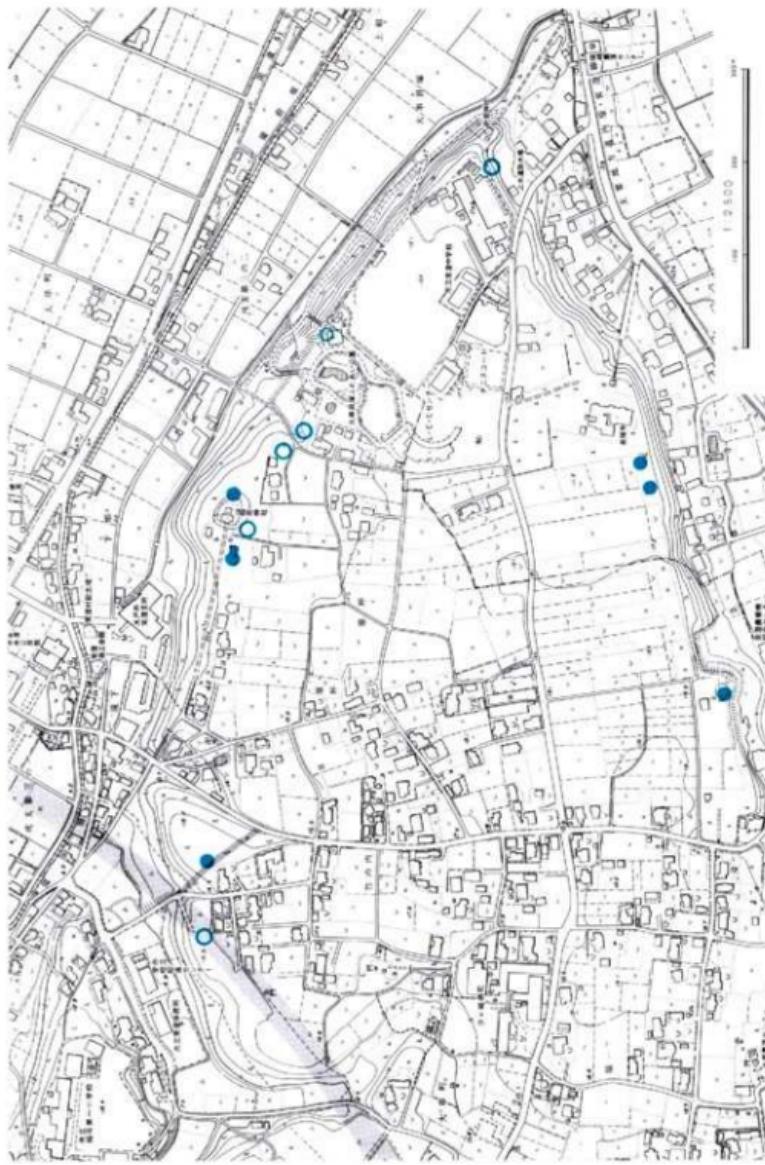
①の塙崎1178・1180番地に所在する2基の円墳は、長福寺南側の竹林中に現存する。第1号墳は、推定直径17m、高さ3m前後、西方に約10m離れて第2号墳が存在する。本古墳は推定直径18m、高さ2.5m前後である。両古墳ともに円墳であるが、墳丘の南側から中央部にかけて発掘（あるいは盗掘かも知れない）した跡が明瞭に残っている。おそらく両古墳の主体部は破壊されているものと考えてよい。埴輪片は発見できなかった。

②については、稲荷神社の境内、社殿の裏山（東南側）に小円墳（推定直径15m、高さ1.5m）が1基現存する。埴輪はみられない。この古墳は地番2162からみて「大串2号墳」に該当するようと思われる（茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』昭和52年3月、常澄村史編さん委員会『常澄村史』平成元年8月）。墳丘のほぼ中央付近には発掘したような跡がある。

また、社殿の西側、手水舎と記念碑の並ぶ裏手にも、長さ約25m、高さ約2～3mの墳丘が存在し、石室の構築材らしい砂岩が数個散在している。形状は、前方後円墳と思われるが、前方部その他に土砂を削りとった跡がみられる。埴輪は存在していない。

一方、消滅した古墳については、前記の「昭和五十四年にも稲荷神社と常澄中学校の中間台地上にあった円墳三基が調査されている」という説明からみて、そのうちの1基は「大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり」事業地内の第三調査区（昭和63年11月～平成元年1月調査）で発掘した周溝（方形に巡る幅3.0～3.5m、深さ約80cm）を伴う方墳（墳丘消滅）が場所的にも該当すると思う（常澄村教育委員会『大串遺跡』平成元年10月）。他の2基はこの近くに存在していたが、現在はほとんど跡形も残っていない。当時古墳の調査に立ちあつたのは、村文化財保護審議委員の諸氏であったらしい（大串貝塚ふれあい公園飛田邦夫所長の教示による）。

第三図 大串古墳群分布図（●現存する古墳 ○消滅した古墳）



現時点において確認した大串古墳群の内容は以上のとおりである。いずれにしても、江戸時代、大正時代に発掘消滅した古墳を加えると5～6基の古墳が失われていることになる。以上をまとめてみると、本古墳群は、今回確認した前方後円墳を中心に円墳や方墳あわせて10基程度で構成され、詳細な年代は不明であるけれども、おそらく6～7世紀代に築造されたものであろう。

「乳飲み児を抱く埴輪」発見の顛末

この女性埴輪は、旧勝田市の大平古墳群（黄金塚）から出土したもので、「茨城県史料」考古資料編古墳時代（昭和49年12月）の口絵に原色写真で紹介され、虎塚古墳の壁画（昭和48年発見）とともにあまりにも有名である。

昨年11月1日、ひたちなか市が誕生し、埋蔵文化財センターにおいて、第1回の文化財保護審議会（平成7年1月28日）が開催された。終了

後に展示室を見学する機会があり、約30年に振り
にこの埴輪と再会した。

埴輪の発見は昭和31年秋であった。当時の勝田市は、各地で北海道の炭礦を離職した人たちの失業対策土木工事が行われていた。太平の周辺では、夏頃から現在の農協西側をホテル・ニュー長寿荘方面に入る道路の建設工事が始まり、ここの大型前方後円墳を人力で破壊していた。

金上方面の遺跡巡回の折、この現場に遭遇した訳である。墳丘にのぼってみると、埴輪片が散乱していたので、かたわらのブレバブで休憩中の作業員に、人物埴輪出土の有無を訪ねたところ、全然発見していないという。破片の部位から確実に人物埴輪が出ていると判断して、雑談すること約1時間、実はということになって、床下の土の中から人物2体と円筒をとりだした。そのひとつがこの女性埴輪で、まさかこんなすばらしい埴輪を隠しているとは思わなかった。

埴輪発見の経緯は、早速帰宅して父に話し、当時埋蔵文化財に理解のあった市福祉事務所の安洋太朗氏、市長の安義男氏（故人・安雄三市議会議員の尊父）などと協力して、保存のための交渉を行ったが、かれらも素人ながら珍しい埴輪なので手離したくなかったであろう。一向に渡す気配をみせなかった。金銭で解決することは容易であるが、今後に悪例を残すので、あらためて清酒3本を持参してお願いすることにした。当時にしてみれば3升というものは貴重であったらしく、私たちの申し入れに応じてくれた。思えば39年前に清酒3升と交換した埴輪は市文化財に指定され、埋蔵センターの展示ケースに収まっている。（平成7年2月）

井上義・井上義安「女性埴輪の新資料」古代 28 昭和33年5月

太平遺跡群調査団「茨城県大平古墳」昭和61年3月



第三章 発掘調査の概要

市道常澄6-0008号線は、大串町をほぼ東西に横断する北関東自動車道の下を貫通する道路である。この道路は、台地縁を数m削平して建設するために、そこに所在する第二号墳の西側墳丘が道路敷内に入り、発掘調査の対象となった。また、周囲の山林と畠地には、住居址や土壌などの埋没が充分に考えられる地形を呈しており、後期縄文土器や土師器片が僅かに散在する。

平成6年2月以降、市建設課、市教育委員会と再三にわたり、本古墳の調査方法について協議を進め、記録保存の立場から、墳丘と周溝だけの調査に限定せず、道路として掘削される部分の表土を除去し樹根（樹齢約50年）を取り払い、全面的に発掘調査を行うことに決定した。

発掘調査は、古墳の調査に主体をおき、墳丘下のローム面における遺構、墳丘周辺（主として西南側）の遺構の有無を確認する調査とに区別される。

古墳の調査については、戦時中の旧陸軍が掘った防空壕の構築工事に伴い、墳丘を含めた周囲の土砂がかなり移動しており、それが円墳なのであるか、それとも前方後円墳としての形状を呈するのか判然としない。この墳形の全容を確認することは、今回の調査目的外で、これは別に考える問題である。

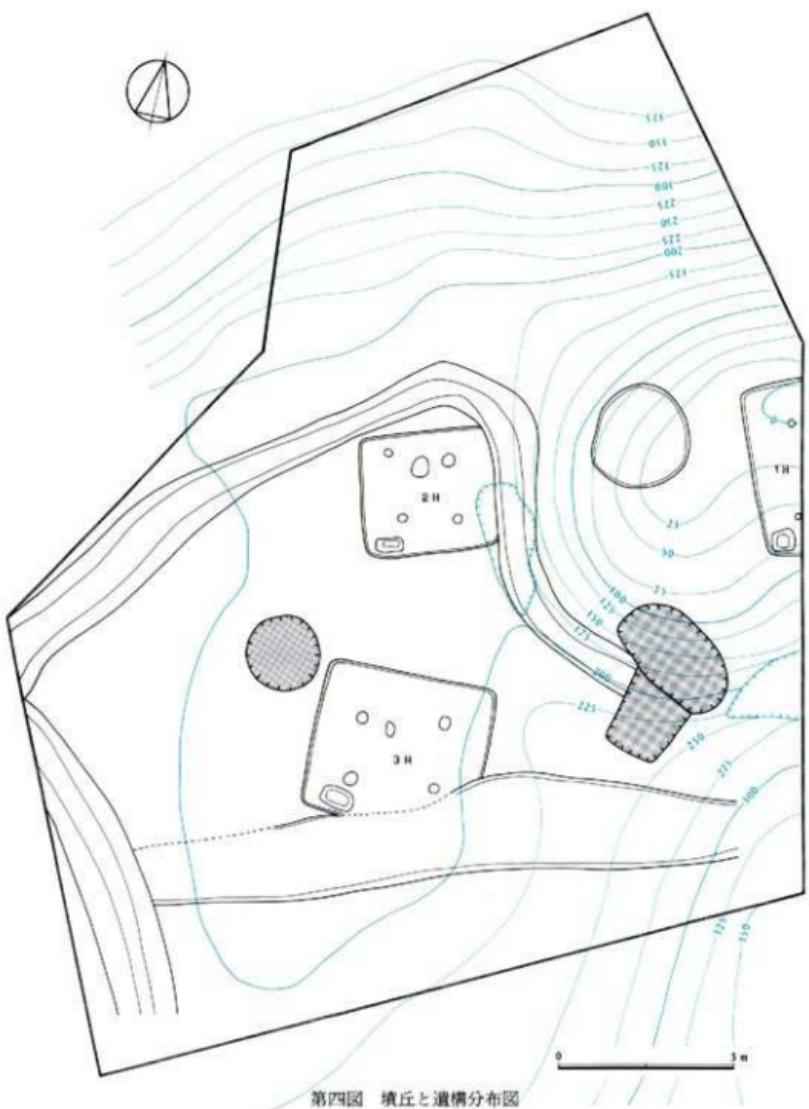
発掘調査にあたっては、墳丘を中心に周囲の測量図を作成した後で、墳丘の発掘と周溝の確認、埴輪列の調査、道路敷地内の表土除去作業を実施し、古墳築成以前の遺構を確認することに努めた。

その結果、墳丘西半部のローム面においては、弥生時代後期の略円形を呈する竪穴状遺構が1基、古墳時代前期の竪穴住居址1軒が出土し、それぞれ有意義な資料を多く発見した。

また、墳丘外の西側ローム面では、本古墳に伴う周溝とは別の溝状遺構が出土した他に、古墳時代前期の竪穴住居址2軒を調査し、あわせて旧陸軍の防空壕2か所を検出した。こうした各遺構の確認作業中に、縄文時代前期の土器破片も散見できたので、この時期に關係する遺構を期待したがついに出土しなかった。

以上に記述したように、今回の調査で発掘した遺構は、下記のような時代と種類にわけられる。

弥生時代後期 竪穴状遺構	1
古墳時代前期 竪穴住居址	3
溝状遺構	3
旧陸軍の防空壕	2
撲乱穴	若干



第四図 墳丘と遺構分布図

第四章 弥生時代遺構の調査

1 第一号円形整穴状遺構

遺構（第五図、図版第六）

本遺構は西側墳丘下のローム面に発見されたものである。平面形は略円形を呈する。大きさは東西約2.7m、南北約3.0mを測る。確認面からの深さは、東壁付近が25cm、西壁付近が23cmである。周壁は斜めに掘り込み、底面はほぼ平坦で、とくに踏みかためたような跡はみられない。

壁の外周や底面には、ピット、炉址などは存在しない。遺構内の土砂は、ローム粒子を僅かに混入した黒色土であるが、中央部の南北方向に、焼土粒子をやや大目に含んだ土がみられた。遺構内の土砂は、自然的に流入したものではなく、あきらかに埋め戻した土砂である。

遺物は、中央より東半部の空間には全く存在せず、主として西半部に出土した。中央付近に土器の破片が集中して存在するが、大部分の破片は実測図に示すような状態で接合し、一固体の壺形土器となった。これは破損した、または破損させた破片を一括的に棄てたものである。南西の壁に近い壺形土器は土圧で破損した状態を示す。北側に単独で存在する土器は、壺形土器の胴部である。本遺構から出土した遺物はすべて弥生土器であった。

出土遺物（第六図、図版第一八）

弥生土器は後期の特徴を備えたものである。1と接合資料1は、破片に若干不足をきたすけれども完形に復元できる。9は口縁部から肩部を欠失する。24は頸部の破片である。以上の4例土器が本遺構の主要な遺物となる。

1は広口の壺形土器である。口径18.0cm、胴部最大径19.0cm、底径8.0cm、器厚0.5cm、高さ33.5cmを測る。器形は、僅かに突出する底部から、胴部がゆるやかに脹らみ収縮して頸部に至り、ふたたび口縁部が外反しながら開く。口径より胴部最大径が、僅かに大きくなり、均整のとれた土器である。

器面の文様は、上部から①文様帶I（口縁部）、②隆起帶A、③文様帶II（頸部～胴部上半）、④文様帶III（胴部下半）に大別される。

文様帶Iは、口唇部に細かい刻目を付し、櫛描波状文は4本の工具を使いdi類（井上義安『十王台式土器分類図譜』II 昭和16年10月）を描出する。

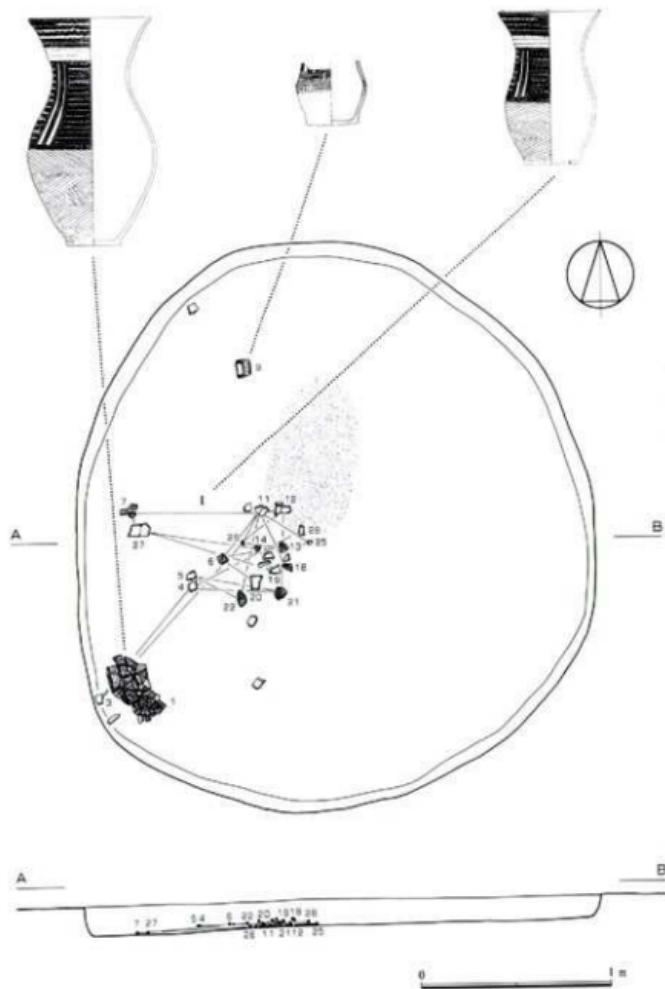
隆起帶Aは、3条の粘土紐を薄く貼付したもので、指頭による押圧は行っていない。類別的には新しい方に入る。

文様帶IIも櫛描文で基本的な構図としては、那珂湊市富士ノ上遺跡のe2類（前掲文献参照）に相当する。

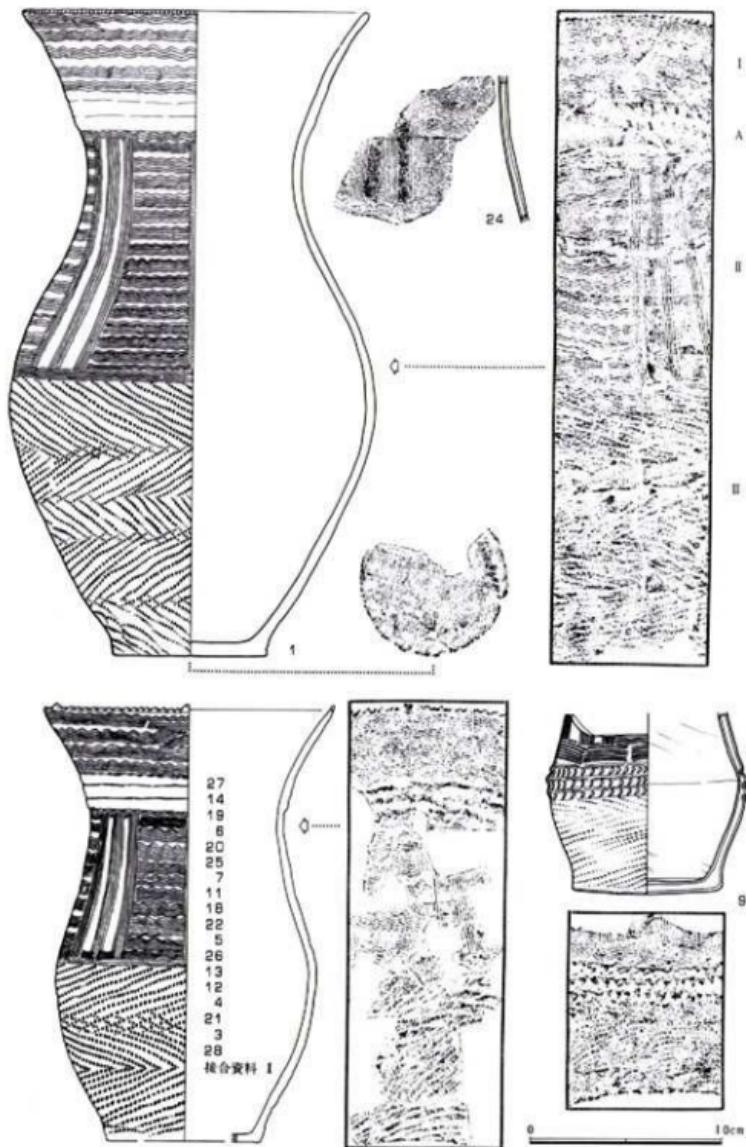
文様帶IIIは、いわゆる付加条繩文第二種（RL×2L・LR×2R）を羽状に押捺している。底面

には布目の圧痕がみられる。

接合資料1も広口の壺形土器である。口径15.0cm、胴部最大径13.5cm、底径9.0cm、器厚0.4cm、高さ22.5cmを測る。器形は、口径より胴部最大径が若干小さく、器高に比較して頸部が大きくなる。



第五図 第一号円形竪穴状遺構実測図



第六圖 第一號圓形整穴狀遺構出土遺物實測圖

文様帶の構成は、1と同様に文様帶I、隆起帶A、文様帶II、文様帶IIIの組合せである。本例では、口唇部の刻目間に、山形状の小突起が数か所に付され、また櫛歯状工具も少し太目のものが使われる。

9は口頭部を欠損した小型の甕形に近い土器であろう。残存する文様帶は、文様帶II b、隆起帶Cと文様帶IIIである。文様帶II bの構図は、縦に3条の直線文で区画した左右の空間を波状文が充填し、下端に連弧文列を描出する。

隆起帶C（3条貼付）には、連続刺突が加飾される。

胸部下段の文様帶IIIは、付加条繩文第二種を羽状に押捺している。

底面は無文である。

24は文様帶IIに相応する破片の拓影である。櫛描文の構成は、縦位直線文と横位波状文を組合せており、1の文様構成と同様になる。この土器の施文には、工具先端の非常に細い多条（7本）のものが使われている。

以上に図示した4例の弥生土器は、あらためて説明するまでもなく、この地方を主要な分布圏にもつ後期後半の十王台式に該当するものである。

この時期の類似遺構は、昭和50年、大洗町ひいがま遺跡（第一次調査）において、胸部に穿孔し口縁部を欠いた大型の土器が埋置された状態で出土し、宮田 賢氏が遺構の性格について論及している（ひいがま遺跡発掘調査団「ひいがま」II～IV 昭和50～52年）。さらには昭和61年にも、大洗町団子内遺跡において、時期は若干さかのぼるが、類似の円形遺構を調査し、内部には底部穿孔の口縁部を欠いた大型土器が破片となって散在していた（井上義安『団子内』昭和62年9月）。大型壺を埋置した当初の状態は、多分前記ひいがま遺跡の事例に近いものであったと思われる。また平成4～5年には、那珂湊市鷹ノ巣遺跡で、古墳時代前期？の類似遺構を1例発掘しているが、大型土器は出土しなかった（井上義安『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』平成6年3月）。

前二者の事例は、遺構の形状、大きさ、出土土器およびその出土する状態などに、かなり類似した点が認められる。本遺構の場合は、大型土器つまり二次埋葬用の土器棺こそ存在しなかったけれども、その他の事象に近似性が強く指摘でき、埋葬に関係した遺構と考えられる。

第五章 古墳時代遺構の調査

1 第一号住居址（第七～九図、図版第七・一八・二〇）

弥生時代の円形堅穴状遺構と同様に、墳丘下約3.0mのローム面に発見され、住居址の約2/3は調査区外に存在する。

規模 未完掘の住居址で、北壁と南壁の長さは不明である。西壁（W-Y間）は約4.7mを測る。第二、三号住居址と同様の形状であれば、南北の両壁は若干長くなるかも知れない。ほぼ垂直に掘り込んだ壁は、良好な状態で残っており、高さは45～47cmを有する。

床面 発掘した部分は、ほぼ外区に相当する空間であるが、硬度は2～3に比定できる。とくにYコーナーの貯蔵穴付近はかたく踏みかためられている。周溝は存在しない。

ピット 西壁から約1.0～1.2m離れた床面にP₁とP₄の2本が発見された。P₁は直径約20cm、深さ46cm。P₄は直径約17cm、深さ53cmを測る。主柱穴の一部と考えられる。Yコーナーの大型ピット（長径70cm、短径60cm、深さ50cm）は貯蔵穴と考えてよいと思う。

埋没土 a・bの2層に区分できる。aは部分的にロームの小ブロックを混入する黒褐色土、bは木炭と焼土粒子を混入する黒色土であり、いずれも埋め戻した土砂である。中央付近に哺乳動物（兔類）があけたと思われる径約35～40cmの擾乱穴が存在する。

遺物の出土状態 床面上からは多くの土器類が出土し、その状態は実測図および図版第七に示すとおりである。完形品と破片を含めた総数は46個になる。大部分は刷毛目を有する土師器であるが、若干の前期縄文時代の遺物も発見されている。

接合資料6例のありかたを観察すると、W-Y壁（西壁）に沿い、一部の資料を除き大略南北を指向する事例が多い。とくに接合資料Zは、多くの破片が南北2mの範囲内に散在し、大小の破片を投棄した状態がうかがわれる。大部分の出土レベルは床面上である。これらの土器類は、住居の廃絶後に、まもなく一括的に廃棄された状態を示している。

接合資料は、壺形土器、壺形土器、高環形土器、異形器台形土器などに6例抽出できた。

接合資料1 <壺形土器> 42△0・47▽1

接合資料2 < 同 > 10▽0・30▽2・21△0・19△0・22▽0・18▽0・8△0・11▽0・12△0・45△0・13△0・12△0

接合資料3 <壺形土器> 5▽0・6△0

接合資料4 < 同 > 27▽1・26▽0・35△0・34▽0

接合資料5 <高環形土器> 33△0・7▽18

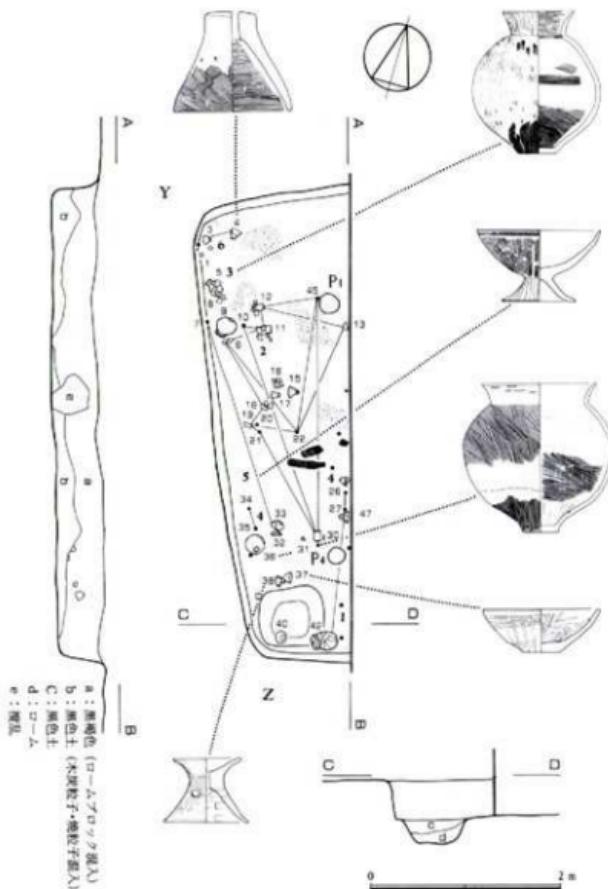
接合資料6 <異形器台形土器> 4▽0・3▽2

遺物の概要 主要な遺物は土師器、球状土製品、軽石製浮子である。覆土中の縄文土器片や石

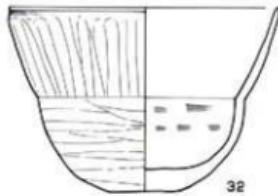
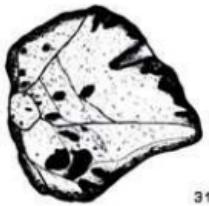
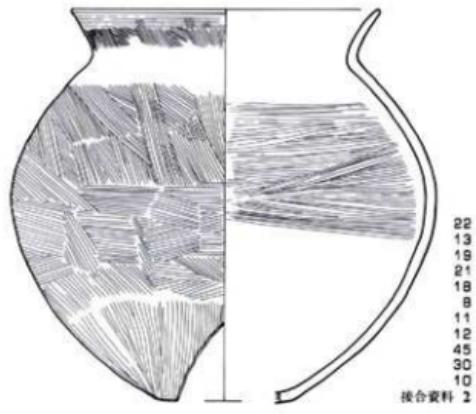
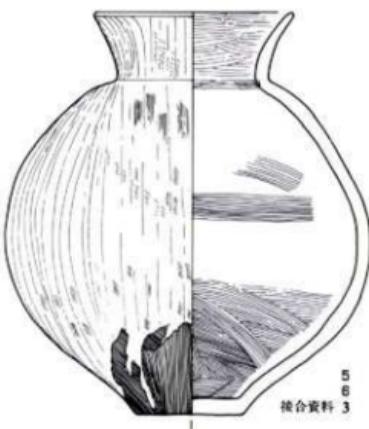
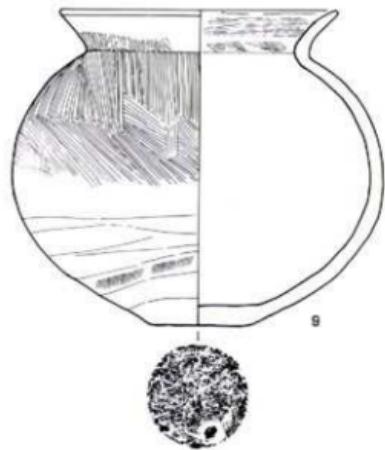
鐵などは混入遺物とみなされる。

土師器の器種は、甕形土器、壺形土器、高壺形土器、壺形土器、器台形土器、異形器台形土器などで構成する。

甕形土器 口縁部は、くの字状に外反、外傾する単純口縁で、胴部は球形を呈する。36の底部は突出している。器壁外面は、ほとんどのものが刷毛目による調整をおこなっている。内面は、刷毛目調整を施した後に、磨きを加える接合資料1や36などもある。これらの甕は、口縁部から胴部下半にかけて、ススが多量に付着し黒色を呈しており、使用頻度が高く日常什器の重要な位

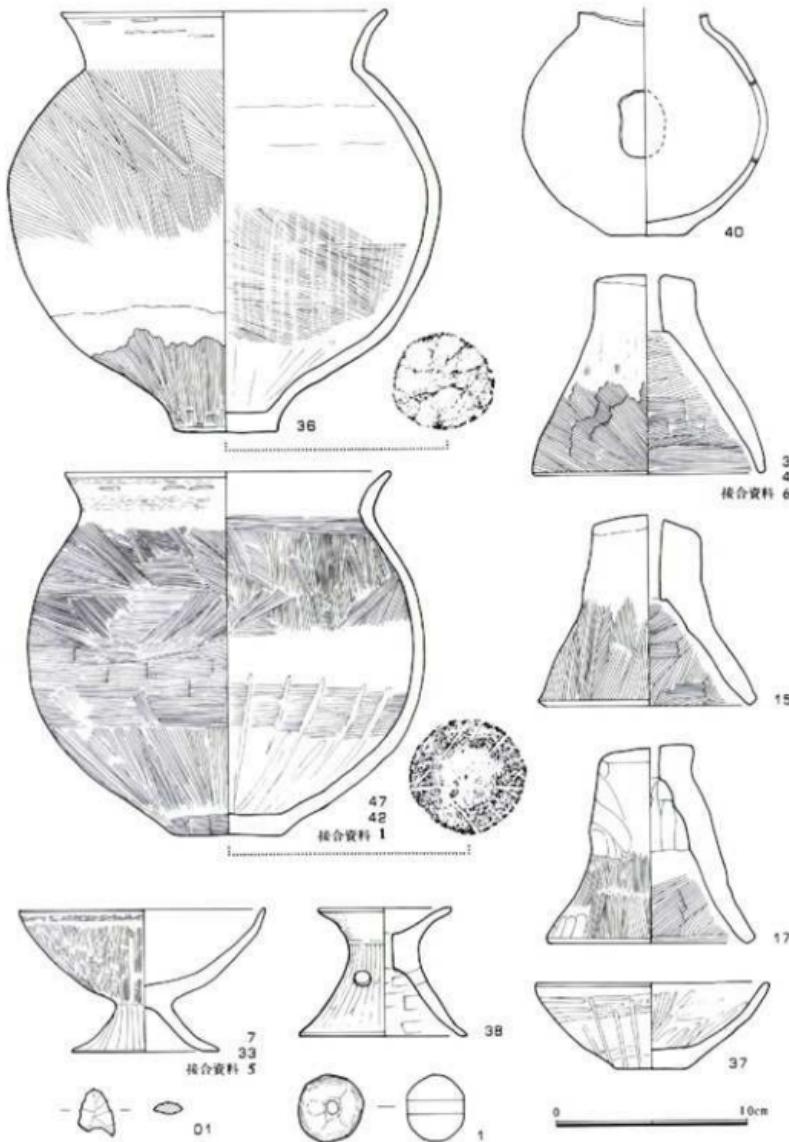


第七図 第一号住居址・貯藏穴実測図



0 10cm

第八圖 第一號住居址出土遺物實測圖(1)



第九圖 第一號住居址出土遺物實測圖(2)

置を占めていたと思われる。

壺形土器 口縁部が弱く外反し、胴部の最大径が中央よりやや下半になる接合資料3である。外面は、刷毛目調整を施した後、丹念な磨きを施す。内面は、口縁部から頸部にかけて外面同様に調整し、胴部は刷毛目だけである。小型の壺40は、胴部中位を縦約5cm×横約3cmの大きさで穿孔しており、器壁は二次焼成を受けている。祭祀的意味合いを強く感じる土器である。

壺形土器 平底の底部からゆるやかに立ち上がる37で、内外面を丹念に磨いている。

高壺形土器 接合資料5は脚部に比べて壺部が大きい。壺部は深い碗状を呈し、脚部は外反しながら開く。外面は壺部、脚部とも刷毛目調整を施した後、入念に磨きをおこなっている。

壺形土器 32は、平底の底部から胴部が内湾して立ち上がり、さらに口縁部が大きく内湾ぎみに開く。内面は口縁部と胴部の境に稜を形成する。器の内外面は、刷毛目調整後に篦による磨きを施す。

器台形土器 38は、器受部と脚部が外反しながら開く器形で、胴部が僅かに大きくなる。円孔は器受部中央と脚部（3か所）に存在する。外面は磨きを施し平滑である。

異形器台形土器 接合資料6、15、17の3点が該当し、形状は3例とも近似する。器受部に相当する上面は、凸レンズ状または平坦で、短い円筒状を呈し、僅かにくびれて外方に開く。円孔は器の中央だけに貫通する。つくりは全体に粗雑で、内外面に凹凸がみられ、上半部外面に粗い篦など、下半部内外面に縦位、横位、斜位の刷毛目調整痕を残す。器全面が二次的火熱を受け、上半部にはススが付着する。

球状土製品 大きさは3.5×3.5mm、厚さ30mm、円孔径7mm、重量39g、完形品。

石 錫 基部に抉り込みを有する凹基式で、長さ27mm、幅20mm、厚さ6mmを測る。欠損品。

軽石製浮子 最大長100mm、最大幅96mm、厚さ80mmを測る。このほかにも小片が數点存在する。この土器は、鶴見貞雄氏が分類した粗製器台のB1a類に対比できる（鶴見貞雄「粗製器台の用途を考える—高崎貝塚出土の器台形土器を例にして—」研究ノート3 平成6年6月）。

（千葉隆司）

2 第二号住居址（第一〇・一一図、図版第八・九）

墳丘西側のローム面上に発見された住居址で、東壁の大部分は溝状遺構、西壁の一部は攪乱によって破壊されている。

規 模 北壁（W-X間）推定約3.9m、南壁（Y-Z間）約3.8m、西壁（W-Y間）約3.4m、東壁（X-Z間）は南側の一部を残し、溝状遺構で破壊を受けている。形状は長方形を呈し、面積約13m²である。壁高は30~35cmを有する。

床 面 内区は細かい凹凸のある硬度3、外区は硬度2に比定できる。

ビット P₃とP₄はコーナーの対角線上に位置しているが、P₁とP₂は若干ずれて存在する。前者の2本は、直径25cm前後、深さ70cmを測る。後者の2本については、埋没土砂を記録するために半截発掘を行った。P₂の断面図を観察すると、bは柱材を固定する目的で周囲に埋めた土砂、cは柱材を抜きとった後に埋め戻した土砂と考えられる。P₃のbも同様に柱材固定用の土砂であるが、柱材を抜きとった後に崩落した状態を示している。P₂：直径35cm、深さ77cm、P₃：直径20cm、深さ80cm。以上4本のビットは主柱穴である。Yコーナーの長方形ビット（長径80cm、短径40cm、深さ20cm）は貯蔵用に掘られたものであろう。

炉 址 床面中央よりやや北側に位置する、大きさは長径約60cm、短径約50cm、深さ約10cm（焼土の厚さ5cm）を測る。地床炉、炉址の西側にある炉石は廃絶時に移動したものと思われる。

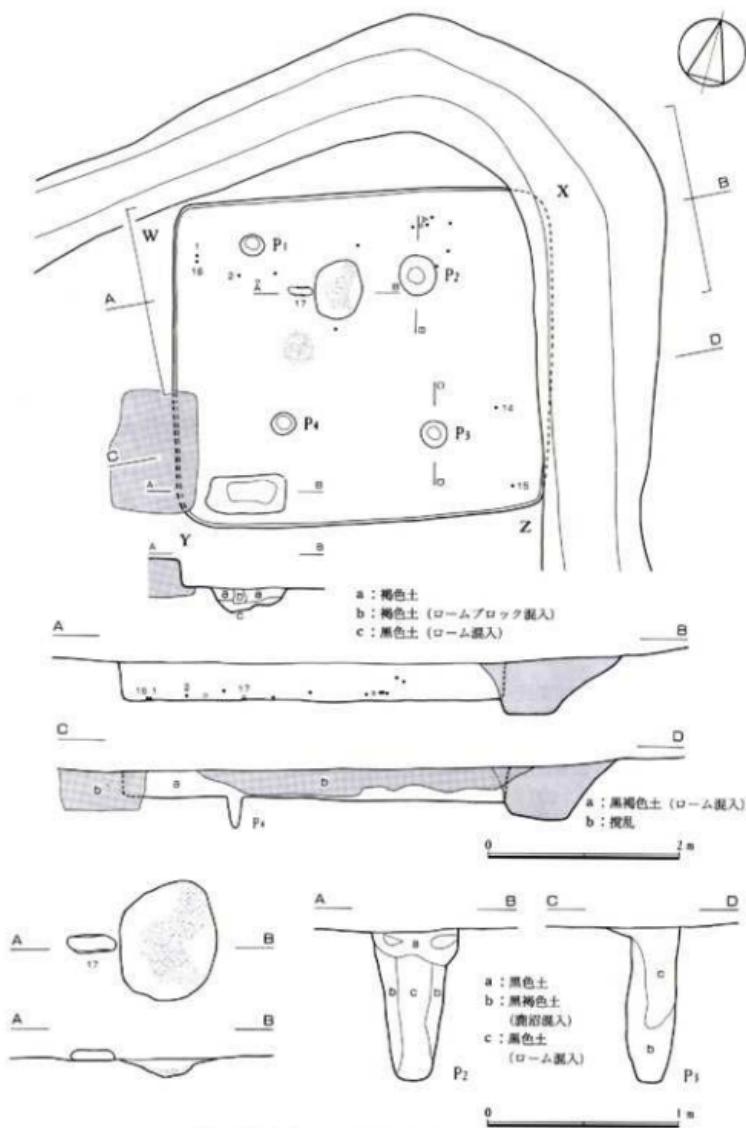
また、炉址の南側床面が、直径約35cmの大きさに焼けている部分がみられた。これは床面上で直接火を焚いた跡である。

埋没土 A-B・C-D両断面によって観察した土砂の性状は、ローム粒子を混入した黒褐色土である。C-D断面（窓穴の南半部）に大きい攪乱が認められる。

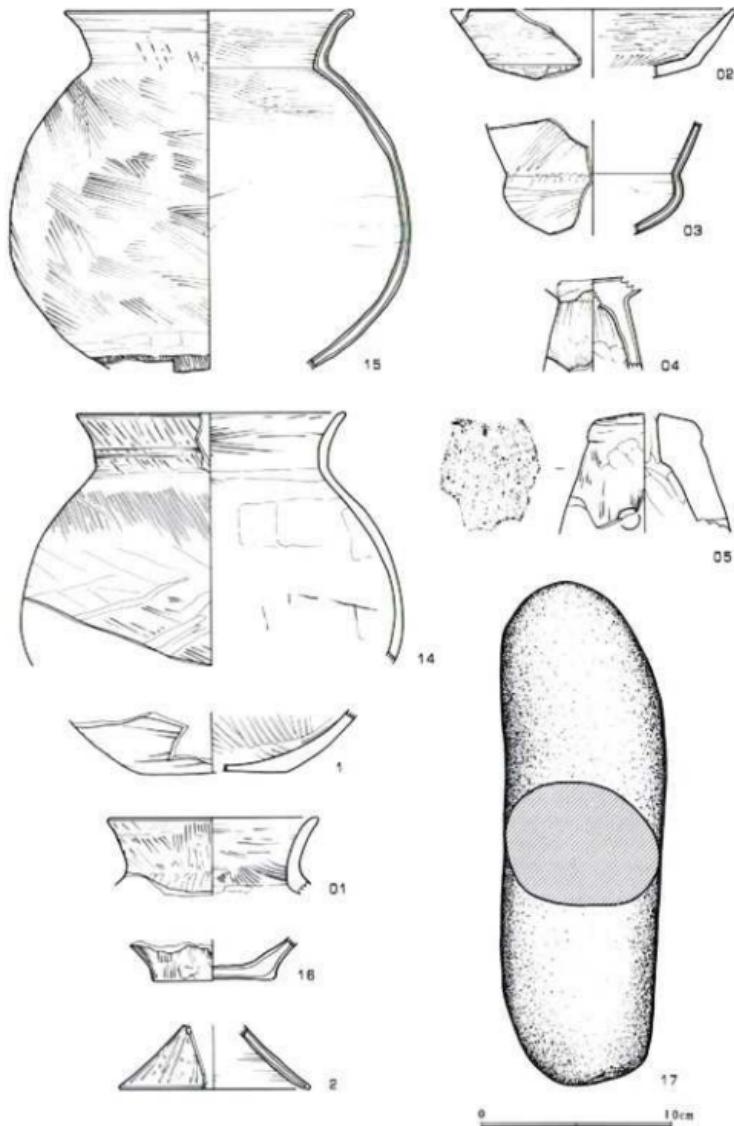
遺物の出土状態 第一・三号住居址に比較して、遺物の出土量が非常に少ない住居址である。これは図示（C-Dセクション）したように、P₃~P₄を含む住居址の南半部が、床面近くまで攪乱を受けた結果によるものと思われる。したがって、遺物の出土状態についての全体像は知りえない。W-X壁（北壁）沿いのドットをA-Bセクションに投影してみると、床面またはその近くから出土していることがわかり、こうした遺物は本址に属するものであろう。確認面付近の遺物のなかには、後述するように环形土器や高环形土器に、新しい要素がみられ、すべての土器を本址に帰属させることはできない。接合関係を有する遺物は皆無であった。

遺物の概要 出土した遺物は、後述する土師器と炉石のほかに、縄文土器および弥生土器片などである。本住居址に属する遺物は、土師器と炉石であり、土師器は、壺形土器、壺形土器、环形土器、高环形土器、培形土器、異形器台形土器などの器種で構成される。縄文土器と弥生土器片は、覆土中出土の混入遺物である。

壺形土器 15・14・1・16は、口縁部をくの字状に外反させた单口縁で、胴部が球形を呈する。



第一〇図 第二号住居址・炉址・柱穴実測図



第一一図 第二号住居址出土遺物実測図

底部は基本的に平底で、単純なものと若干突出したものとの2種類が認められる。技法上の特徴は、外面全体に刷毛目調整を施し、さらに磨きや削りで成形する。内面は、口縁部と底部付近のみ刷毛目調整が施されている。

壺形土器 口頭部の破片01は、口縁部が外反する器形で、おそらく第一号住居址の接合資料3に近似するかも知れない。

壺形土器 02は、丸底ぎみの底部が、体部との間に明瞭な稜をもち、外傾して口縁部に至るものである。内外面ともに寬磨きがおこなわれている。型式的に新しくなる様相を示す。

壺形土器 03は、胴部最大径より口径の方が大きい数値を示す。胴部は算盤玉状を呈し、胴部は若干外傾して立ち上がる。

高壺形土器 壺部と脚部下半を欠損した04は、脚部中程が脹らむ傾向を示し、中期の和泉式的特徴を示すものであろう。

異形器台形土器 05は下半部を欠失しているが、上面は凸レンズ状を呈する。円孔は器の中央と脚部にも認められる。つくりは粗雑であり、二次的な火熱を受けている。

炉 石 最大長26.4cm、最大幅8.5cm、厚さ6.5cmの完形品である。図示した下端には若干の使用痕が認められる。細粒砂岩。

(千葉隆司)

3 第三号住居址 (第一二~一四図、図版第一〇・一一・一二・二一)

第二号住居址の南側約2.5mの地点に発見された住居址である。南壁付近が溝状遺構によって破壊を受けている。

規 模 北壁(W-X間)約4.8m、西壁(W-Y間)約4.2mを測るので、長方形の住居址であろう。面積は20m²と推定される。壁高は20~25cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。

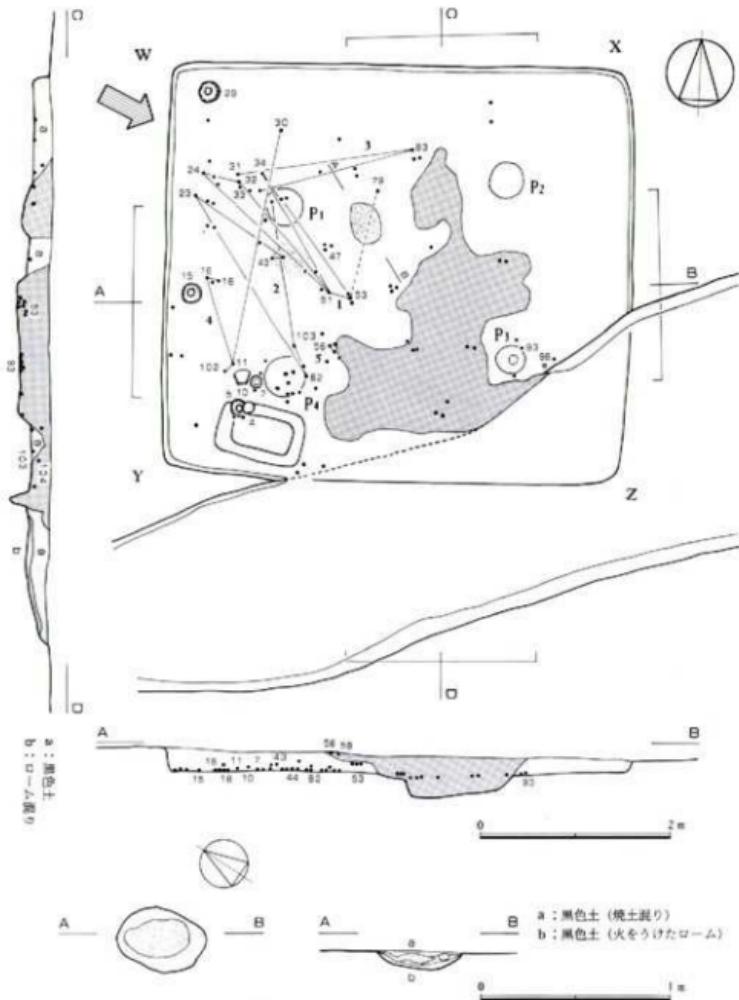
床 面 内区に相当する部分は硬度3、外区は硬度2である。また、内区の南側を中心にひろい範囲の搅乱が存在する。

ビット 主柱穴4本は、多少のずれはあるが各コーナーを結ぶ対角線上に存在する。各柱穴の直径は30~40cm、深さは65cm前後である。Yコーナー近くの大型ビットは、長方形を呈し、長径90cm、短径60cm、深さ30cmを測る。第一・二号住居址と同じところに掘られている。

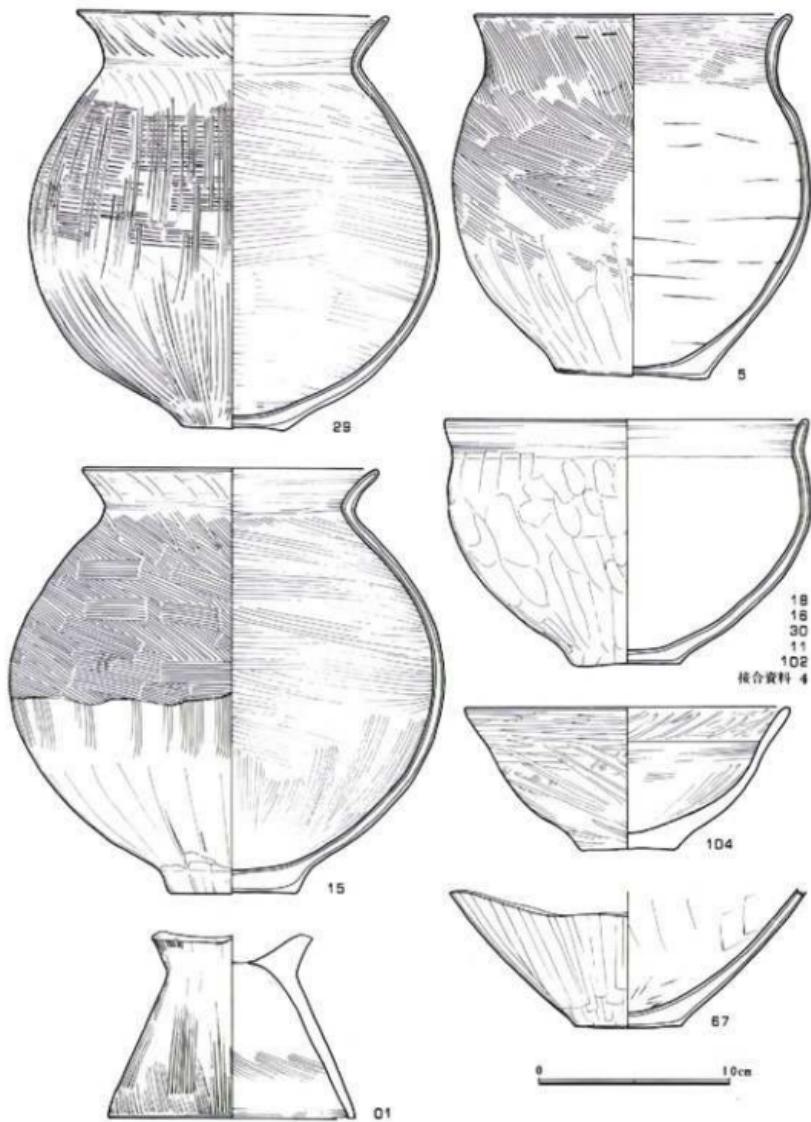
炉 址 床面中央の北側、P₁寄りに位置する。大きさは長径48cm、短径35cm、深さ10cmを測る。焼土は厚さ5cmあり、良好な状態で残っている。地床炉。炉石は存在しない。

埋没土 土砂の性状は、第二号住居址のローム粒子を混入した土砂と同一である。

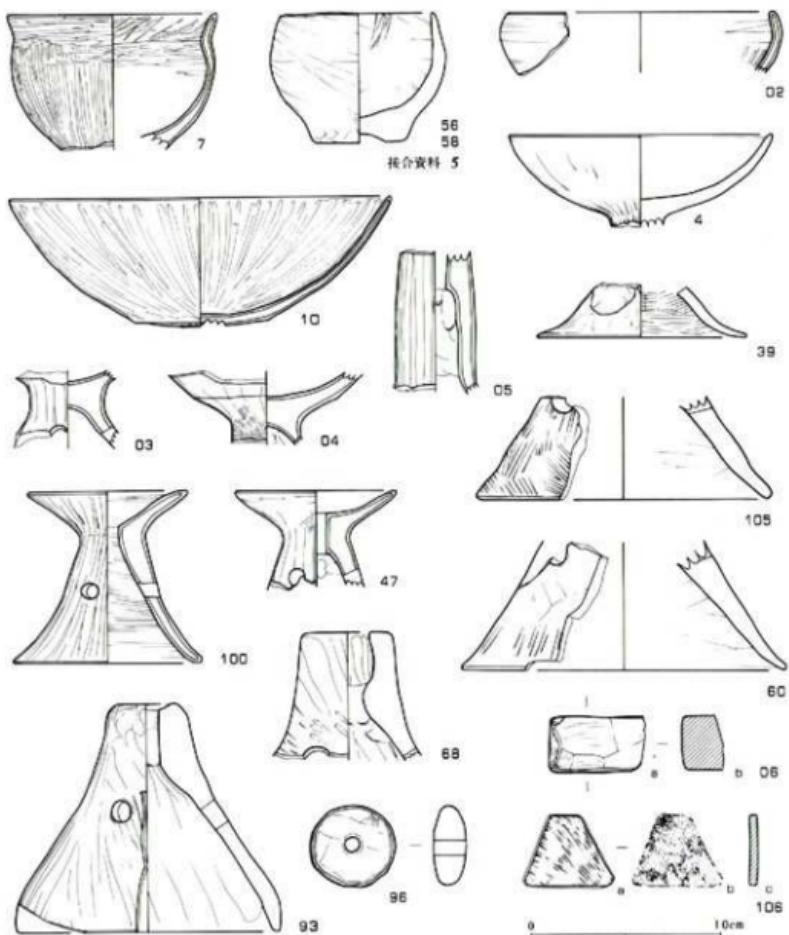
遺物の出土状態 ドットで記録した平面分布をみると、中央から東側の空間が全体に少なく、西半部には完形土器を含む資料が多数散在している。とくにWコーナーとP₁を結ぶ付近、P₄の周辺にまとまりがみられる。搅乱の範囲内にも若干の破片を検出できるが、この付近はもともと破片数が少ないところである。床面上の完形土器は、竪穴廃絶時に遺棄したものと考えられる。



第一二図 第三号居住址・炉址・柱穴実測図



第一三圖 第三號住居址出土遺物實測圖(1)



第一四圖 第三號住居址出土遺物實測圖(2)

一方、接合資料は、壺形土器の胴部破片や鉢形土器などを含めて5例が抽出できた。その接合線の指向するありかたを観察すると、大略東西方向に接合するドットが過半数を占める。この方向性は、Wコーナーの南側から投棄した破片類とみて間違いないであろう。

遺物の概要 本址に属する遺物は、土師器、紡錘車、砥石、不明土製品で、混入遺物として縄文土器や弥生土器片などが数点みられる。土師器は、全体的に残存状況が良好であり、図示可能なものが数多く存在する。器種構成としては、壺形土器、鉢形土器、壺形土器、高壺形土器、器台形土器、異形器台形土器などがある。

壺形土器 平底と台付の2種類が存在する。口縁部がくの字状に外反し、胴部が球形を呈する29・15、口縁部がゆるやかに外反し、口径と胴部最大径にあまり差がない5、台付の01などがある。いずれも内外面に刷毛目調整を施しており、5のように刷毛目の後に磨きを施すものもみられる。これらの壺には外面全体に多量のススが付着している。

鉢形土器 接合資料4・104・7・手づくね製の接合資料5などがある。接合資料4は、外面に竪ナデ、104と7は内外面に丹念な磨きをおこない、接合資料5は、口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、突出する底部中央に浅いくぼみを有する。内外面に竪ナデを施し整形している。

壺形土器 02の口縁部で内面に磨きを施すものである。

高壺形土器 10・4・03・04・05が該当する。10は壺部片で底部に稜をもち、大きく内湾しながら立ち上がる。内外面は丁寧に磨かれる。4は浅い窓状に開く壺部片で、外面に磨きが施されている。05は柱状の脚部片で若干中腰らみになる。

器台形土器 完成品の100と脚部を欠損した47が存在する。前者は、くびれ部から器受部が斜めに開き、脚部はラッパ状に外反する。外面に磨き、内面にナデを施す。器受部中央に貫通孔、脚部中程に円孔（3か所）が穿たれる。後者もほぼ同様の器形であろう。

異形器台形土器 63と93が該当し、後者の93は、器受部から弱く外反し、直線状にのびて開く器形を呈する。器受部は63のように平坦ではなく、若干くぼんでいる。器の中央に貫通孔があり、脚部にも円孔（3か所）がみられる。全体に粗雑なつくりで、外面に粗い磨きを施す。二次焼成痕は本土器にも観察できる。

紡錘車 96は、土製で直径45mm、厚さ17mm、中央孔径8mmである。粗雑なつくりで断面は梢円形を呈する。重量33g。

砥石 06は、実測図の右端を欠損する。大きさは現存長48mm、幅28mm、厚さ21mmを測る。使用痕はa面と側面に認められる。

不明土製品 106は、土器片を再利用したもので、実測図の上辺・下辺・左辺を丁寧に磨り、台形に形を備えたものである。最大長39mm、最大幅48mm、厚さ5mm。これ自体で使用するのか、なにかとセットで使用するのか用途は不明である。

（千葉隆司）

第六章 北屋敷第二号古墳の調査

1 遺存状態（図版第二）

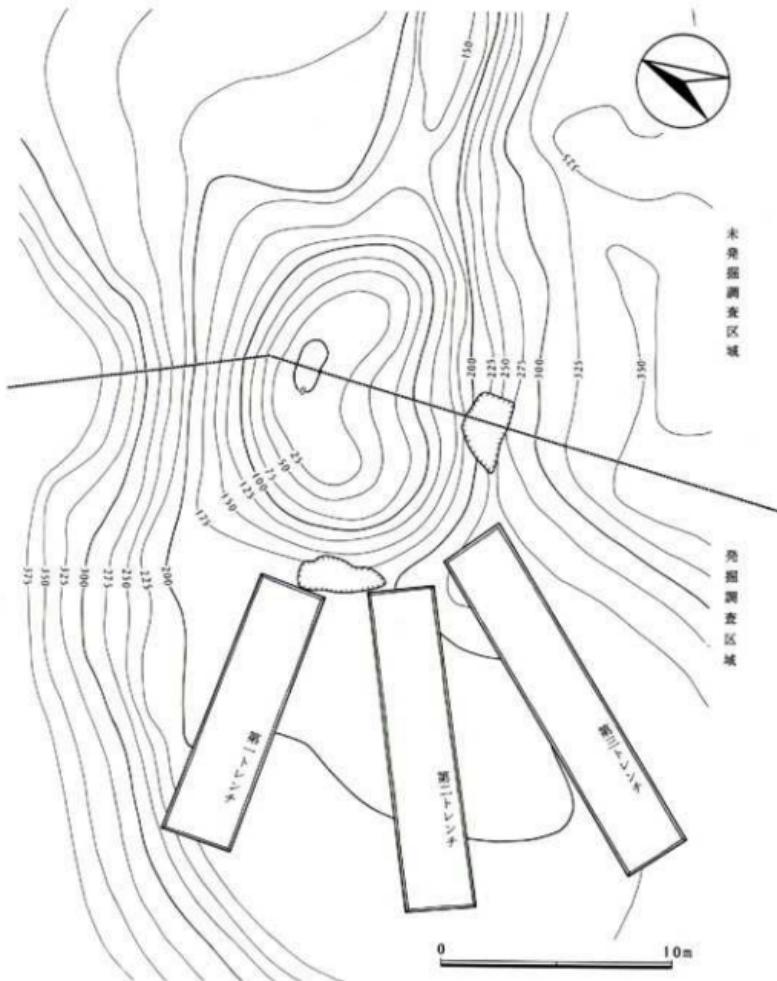
北屋敷第二号古墳の発見の経緯については、すでに述べてきたとおりである。現墳丘の東南側一帯は、第二次大戦中に旧陸軍が構築した防空壕が存在し、そこから掘りだした土砂が積まれたり、あるいは墳丘の一部を削り取ったような跡がみられて、現状は著しく変形しているように思われる。南西側から眺めた墳丘は、円墳の形状を呈するけれども、東南側からみると、東側に土砂が一段低く堆積し、あたかも前方後円墳を思わせる。北西側は支谷に臨む台地縁を形成し、墳丘の状態はおおむね良好に保存されているように見受けられる。なお、防空壕は他にも存在するらしいが、現状からは位置の確認が困難である。

2 墳丘の測量調査（第一五・三七図、図版第四）

測量を開始するに先立ち雑木類の伐採を行い、現状の写真撮影後、25cmセンターで実測図を作成した。現墳頂部から北側および西側の墳丘は、墳頂下50~125cm付近まで、センター線が等間隔に弧状を描いているが、それより下部の旧表土付近（150~175cm）は方形状を呈し円形にはならない。東側は、幅2.5~3.0m、高さ50~60cmに細長く盛り上がった部分が続き防空壕に達する。この部分は、確認調査を実施しないと、前方部に該当するのか、それとも防空壕の掘削土砂であるのか断言できない。南側は、センター線が墳頂部に向って大きくカーブしながら入り込み、墳丘を削りとった状態がうかがわれる。また、裾部には搅乱穴も存在して、周囲一帯は一段と低くなり、土砂が著しく移動しているように思われる。未発掘の区域内に開口している防空壕（測量図の上端右寄り付近）は、土砂崩落の危険を伴うので実測作業は中止した。測量図と現状から把握した本古墳の墳形は、ひとまず以上のように説明しておきたいと思う。

さて、道路に並行しほば南北に設定した断面（A-B）を観察すると、墳丘の土砂はすべて盛土であって、ローム面上に黒色土、黒褐色のローム、茶褐色のローム、鹿沼土のブロックを含んだローム、黒色土ブロックを混入したロームなどを交互に積み重ねて築成している。その層序は墳丘断面図に示すようなありかたであるが、墳丘南半部（実測図右側）の盛土（c+d）をよく観察すると、斜めに大きく削られていることがわかる。したがって、墳丘築成時の墳頂部は、少なくとも2m程度南側に張り出していたとみるべきであろう。墳丘下ローム面の落ち込みは第一号住居址（断面）である。

断面図から計測できる墳丘の規模であるが、高さについては、ローム面から現墳頂部まで2.2mを測る。大きさ（直径）を計測するために裾部のローム面、盛土の堆積状態を調べると、北側は良好な状態を保っているが、南側は裾部のローム上面に堆積する土砂すべてが、埋め戻した軟らかい搅乱土砂である。墳丘下の平坦なローム面が斜めに落ち込む下底部付近は、約80°の傾斜で深



第一五圖 第二號古墳測量圖

き1.3mほどに掘りとった面が続き、周溝の確認は困難である。ローム平坦面の長さは、11.6mまで計測でき、その南端部からは搅乱層が重複する。

3 周溝の確認調査（第一六図、図版第三・五）

周溝の確認は、まず墳丘の西側に第一トレンチ（幅3m、長さ12m）、第二トレンチ（幅3m、長さ14m）、第三トレンチ（幅3m、長さ16m）を設定することから始め、墳丘のA-B断面と合わせて調査することにした。なお、トレンチの長さが予想される周溝の幅以上に長く、道路の幅員全体に延長したのは、すでに述べてきたように、住居址その他の遺構検出を想定し調査する目的からである。

各トレンチは、表面から20~25cm掘り下げたところでローム面に達した。裾部に近い東端部には、当然検出されるはずの周溝が存在せず、第一トレンチ内に第二号住居址と細く浅い溝状遺構、第二トレンチ内に第三号住居址と溝状遺構、第三トレンチ内では東西方向に浅い溝状遺構が発見されただけである。この3本の確認トレンチにおいて、周溝を発見できないということは大変めずらしく、調査区全域を完掘した時点であらためて調査することにした。

墳丘および墳丘外調査区の表土を除去したローム面からは、住居址、竪穴状遺構、溝状遺構、防空壕などが検出された。とりわけ、周溝と関係する遺構は、墳丘に沿って円弧を描く溝状遺構であるが、この溝は北側の台地縁に近づくと、大きくカーブしながら西方にのびてしまう。ローム面での上縁幅は1.15m前後、深さは僅かに36~50cmを測る。この溝はたしかに墳丘の一部を囲繞するような形状を示すけれども、本古墳に伴う周溝の規模としては、あまりにも狭小なのである。裾部付近の表土（厚さ約25cm）を観察しても、土層の切り合い関係は明瞭にできないし、たちに周溝と決めるには躊躇せざるをえない面もある。

4 墓輪の出土状態（第一六~二〇図、図版第一二~一五）

墳丘における墓輪の出土状態を観察すると、まず南側墳丘においては、裾部付近に防空壕があり、封土自体が削りとられた状況を呈し、付近から円筒埴輪の破片が若干出土している。あるいは裾部に埴輪列がめぐっていたかも知れない。

西側は、測量図からも比較的原形をとどめているようにうかがわれるが、埴輪列は発見できず、搅乱穴と第一号溝状遺構内に、破片が落ち込むような状態で出土した。しかしそれは個体としての円筒埴輪が転倒して割れた状態を示すものではない。埴輪の破片（人物・動物）は、このあたりから北側にかけて集中的に散在するようになる。

北側は、裾部付近が台地縁と重なり、20~30°の傾斜をもって支谷に移行する。ここに裾部に多くの破片を含む円筒埴輪や人物・動物埴輪などが出土した訳である。埴輪が存在する状態は、未調査区の墳丘側から大略A・B・C・Dのブロックにわけられ、ほぼ直線状を呈し、約5mの範囲内に集中して発見された。

(1) Aブロック (第一七図)

すべてが円筒埴輪である。上部の破片（下半部と同一個体）をとりのぞいた下部（ローム面上5cmの黒色土中）に、円筒埴輪の下半部4本が10～15cmの間隔を保ち、すべて墳丘の外側に35～50°傾いた状態で出土した。これは本墳における埴輪配列のありかたを示す好事例と思われる。

(2) Bブロック (第一八図)

この範囲は人物埴輪が多く出土したところである。基部（形象埴輪の半身像を乗せる台部）が、約1.2m離れて2か所に存在し、頭部も出土しているので、複数の人物が配列されていたことは確実であろう。その中心となるのは、基部の上端から折れて転倒破損した武人の埴輪で、衝角付冑を被り、挂甲を着けている。このほかにも男子と女子の頭部、胴部、腕部、手部などの破片がみられる。

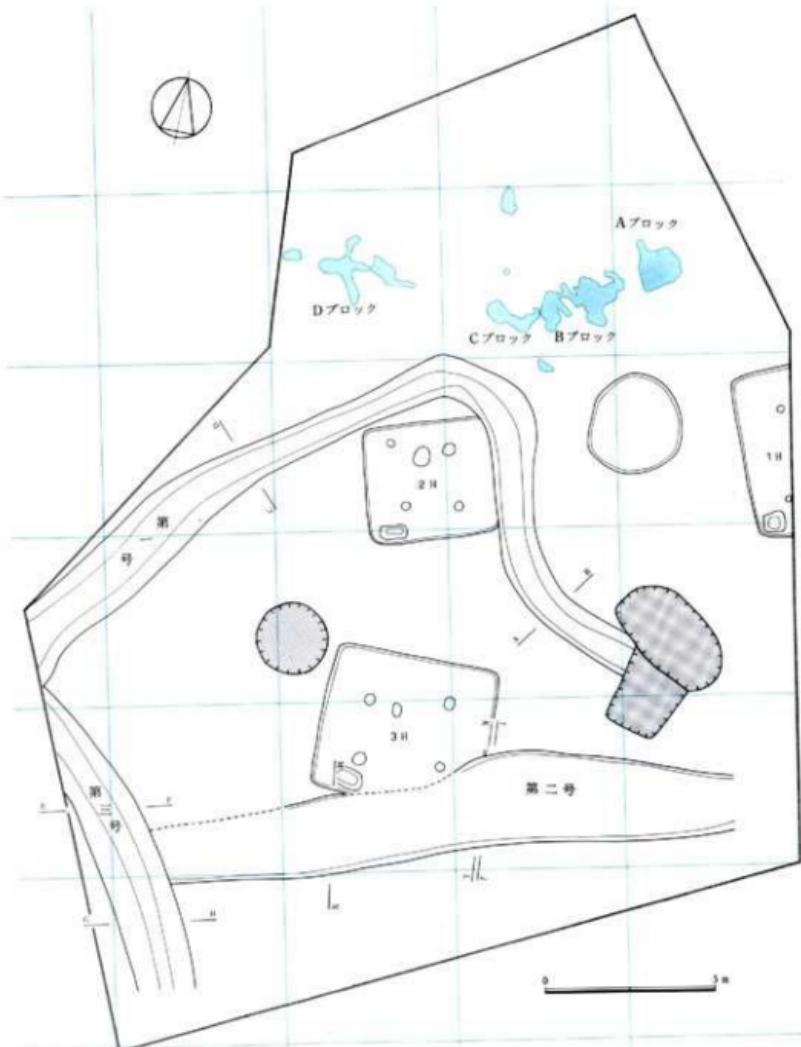
(3) Cブロック (第一九図)

Bブロックの西側近くに人物埴輪の基部、約50cm離れて動物埴輪（馬）の脚部各2本がほぼ並んで出土し、その周囲に人物の胴部、腕部、円筒の破片などが混在して発見されている。ここより約1.0m下方から男子の頭部、さらにそれより下の斜面には、鞍部、鈴、円筒の破片などが約50×80cmの範囲に散在していた。これらはいずれも上方から転落したものである。

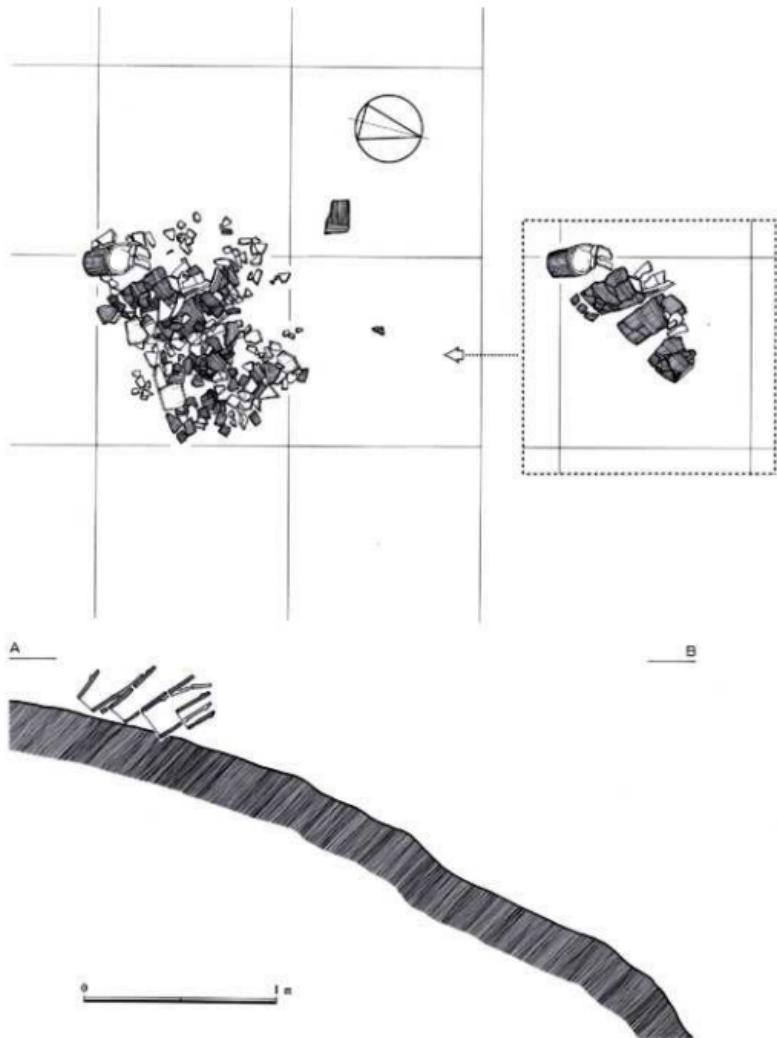
(4) Dブロック (第二〇図)

裾部から約5.0m離れた西側台地縁の緩斜面上に存在する。大部分の埴輪は円筒の破片であるが、馬の脚部（Cブロック出土の脚部とは別個体）破損品1本も検出されている。出土状態は、基底部を残す4本の円筒のうち一部を除き、原位置から移動して破損したように見受けられる。

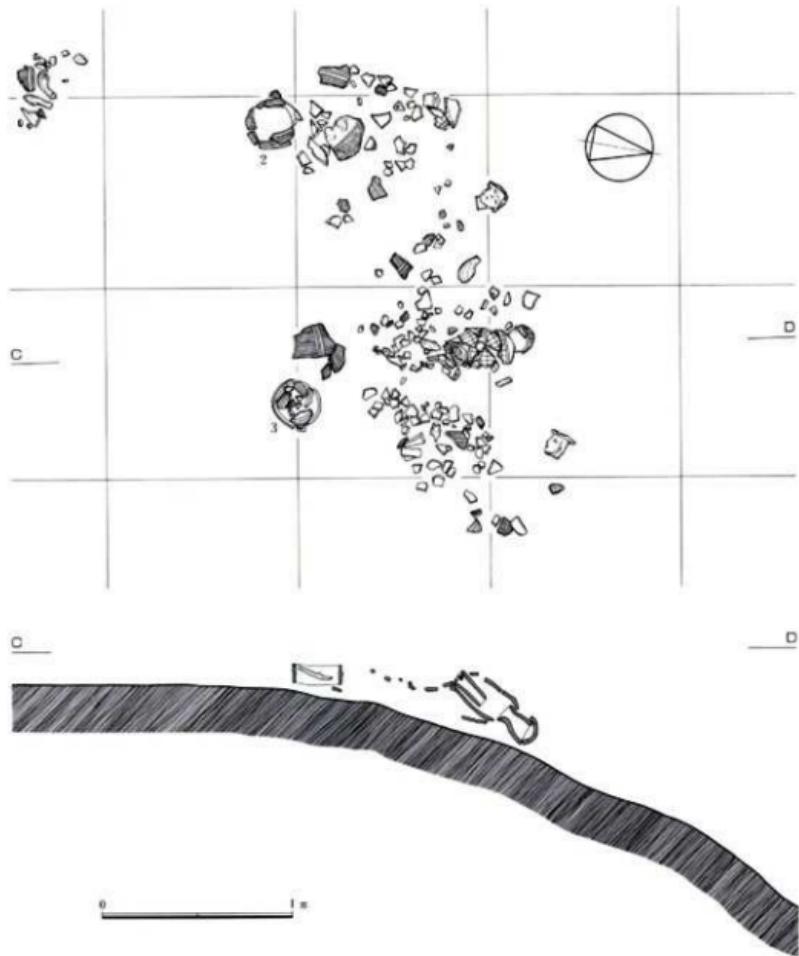
以上の出土状態を基に考えると、明確に断定しえないけれども、ここで埴輪列は、東から円筒（4本）—男子または女子—武人—男子または女子（2体）—馬（2頭？）—円筒（4本？）の順に並んでいたようにうかがわれる。



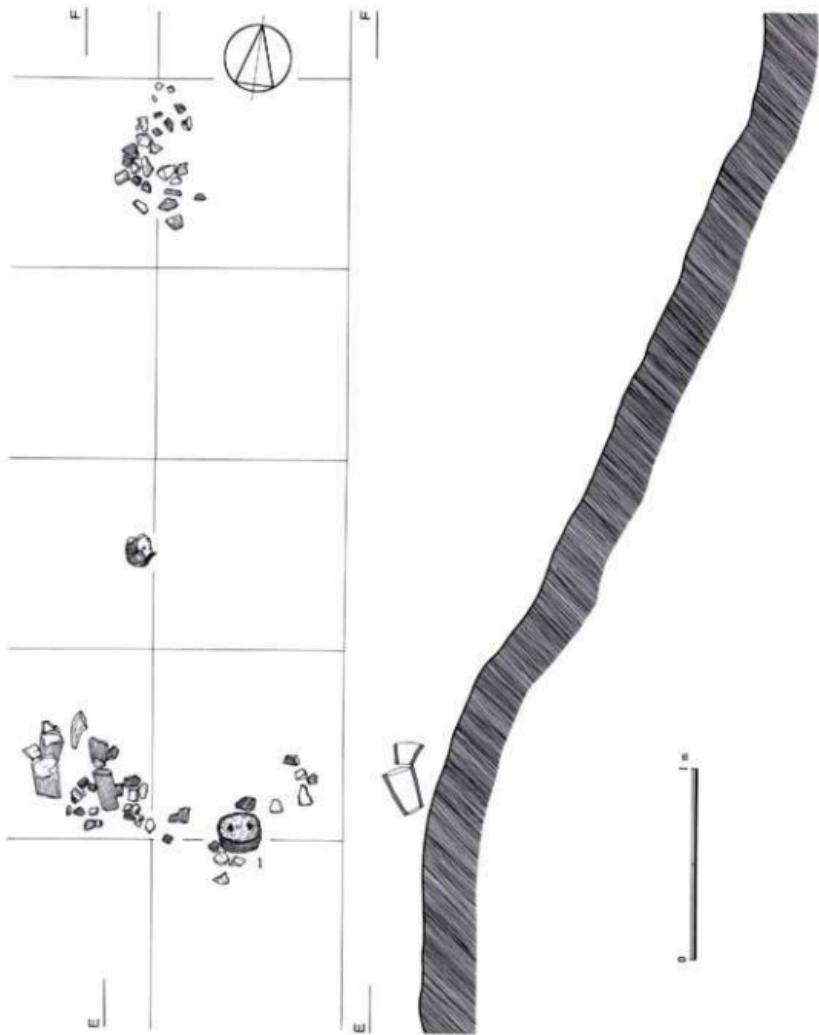
第一六図 墳輪および溝状遺構図



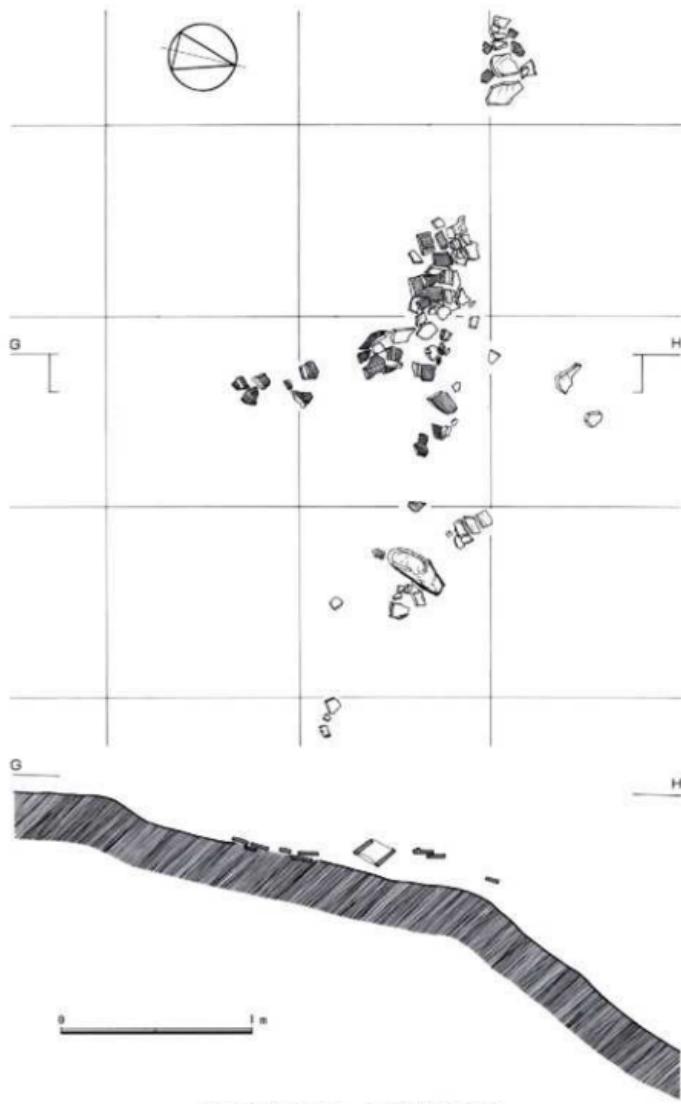
第一七図 A ブロック埴輪出土状態図



第一八図 B ブロック埴輪出土状態図



第一九図 C ブロック埴輪出土状態図



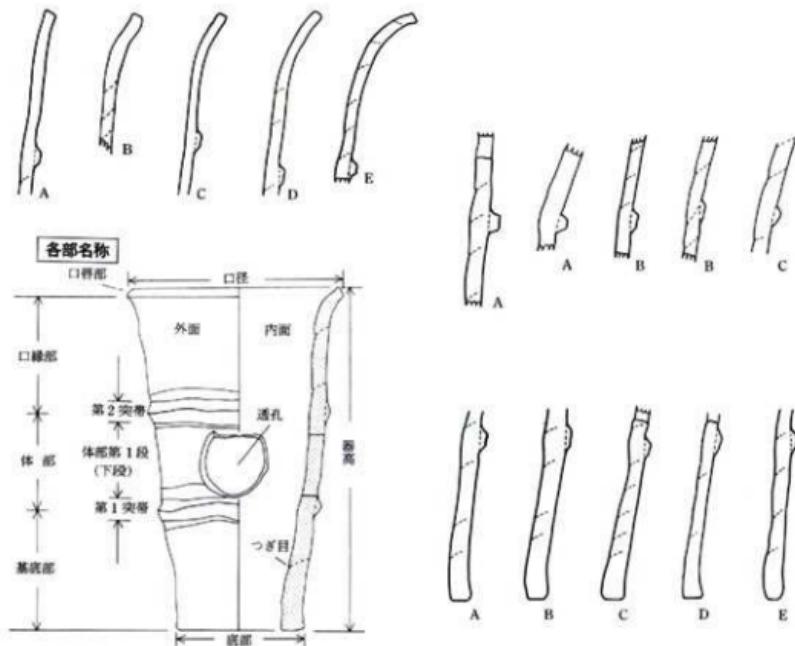
第二〇図 D ブロック 墓出土状態図

第七章 出土埴輪の概要

調査区内の墳丘と墳丘外部から出土した埴輪は、円筒埴輪と形像埴輪（人物・動物）に分類される。本書に収録した埴輪は、その主要なものである。

円筒埴輪の分類、記述にあたっては、「塚廻り古墳群」群馬県教育委員会（昭和55年3月）、筆者らが発掘調査に関係した「小幡北山埴輪制作遺跡」茨城町教育委員会（平成元年2月）の方式に準拠して記述をすすめたいと思う。しかしながら、円筒埴輪の形態分類に関しては、従来の一般的分類法によると、普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪という二大別方式が行われてきた。前者の普通円筒埴輪のなかには、いくつかの形態が含まれておらず、その型式を容易に理解（類別把握）しえない部分があり、かならずしも適切な分類用語とはいがたいくらいに思われる。

管見によると、県内をはじめ隣県出土の円筒埴輪を例にとってみただけでも、基本的には、A直立して円筒状を呈するもの〈直立形〉、B直線状に外傾するもの〈外傾形〉、C体部から漸次外



円筒埴輪分類模式図

反して開くもの〈外反形〉とに類別でき、さらに各類は若干の細別（たとえばA₁・A₂…のように）を行うことにより形状を具体的に説明しうると思う。

本古墳から出土した円筒埴輪を観察すると、実測図に示すように、朝顔形を呈するものは存在せず、主体となるものはBの外傾形とCの外反形に含まれる円筒埴輪であるといえよう。若干の資料については、器形と口縁部、凸帯、底部および透孔の関係を明らかにできる事例がある。また主要な破片類は、各部位（口縁部、体部、底部）ごとに分類を行ってみた。

口縁部（口唇部を含む）について

口縁部（第4段）の資料は、外傾または外反する度合の特徴によって、次のように大別される。

- A ほぼ直線状に外傾して開くもの
- B 口唇部付近でやや角度を変えて外傾するもの
- C 上半部付近からゆるやかに外反しながら開くもの
- D 上半部から強く外反して開くもの

資料的に分類可能な破片はそれほど多くないが、それらを観察すると、Cの形態に含まれられるものが多くみられ、A・B・DとくにAとDに近似する仲間は少ないようである。

口唇部については、図示した資料がすべてである。端部を方形に近く整えるものが多く、ついで端部を外側に僅かに突出または肥厚させるもの、端部が上方にやや突出するものなど、若干の種類が認められる。

外面の調整は、刷毛状工具によって縱方向に施し、口唇部に近い内外面を指頭や布片などで横なでしている。とくに4の口縁部内側には、横なでの他に横刷毛も使用されている。前者の横なで調整手法は、ほとんど大部分のものにみられ、後者の横なで・横刷毛使用例は非常に少ない。

体部について

体部は凸帯と透孔により構成される。凸帯は、粘土紐を器面に貼付した後、指頭による横なで手法を行い調整する。その形状は次のように類別できるかと思う。

- A 断面が台形に近いもの

- B 断面の中央が僅かにくぼむもの

完形品を観察すると、凸帯の本数は3本（第1～3凸帯）が基本である。また、透孔の位置は、第2段と第3段の中央付近で、各段とも相対して2個ずつ十字になるように穿孔される。形状はすべて略円形を呈し、大きさは直径5～7cmを測る。

器面の調整は、外面が縱刷毛、内面が縱・斜位のなでを部分的に施している。

底部について

底部は断面の形状によって、おおむね次のような分類が可能かと思う。

- A 端部が方形に近いもの

- B 端部が両側にやや肥厚するもの
- C 端部が内側にやや肥厚するもの
- D 端部が外側にやや肥厚突出するもの
- E 端部が先細り気味のもの

同一個体の一周する端部（完形底部）を検討すると、部分的に、たとえばAとB、BとCというように両者の形態が共存しているところがあり、A～Eに分類することで同一の個体を律することには、いさか無理がともなうように見受けられる。形状的には、B・C類を中心とした形態のものが多いかも知れない。

器面の調整は、外面が縦方向の刷毛目を施し、内面が輪積成形痕の上に、縦位、横位、斜位のなでを加えている。

1 円筒埴輪

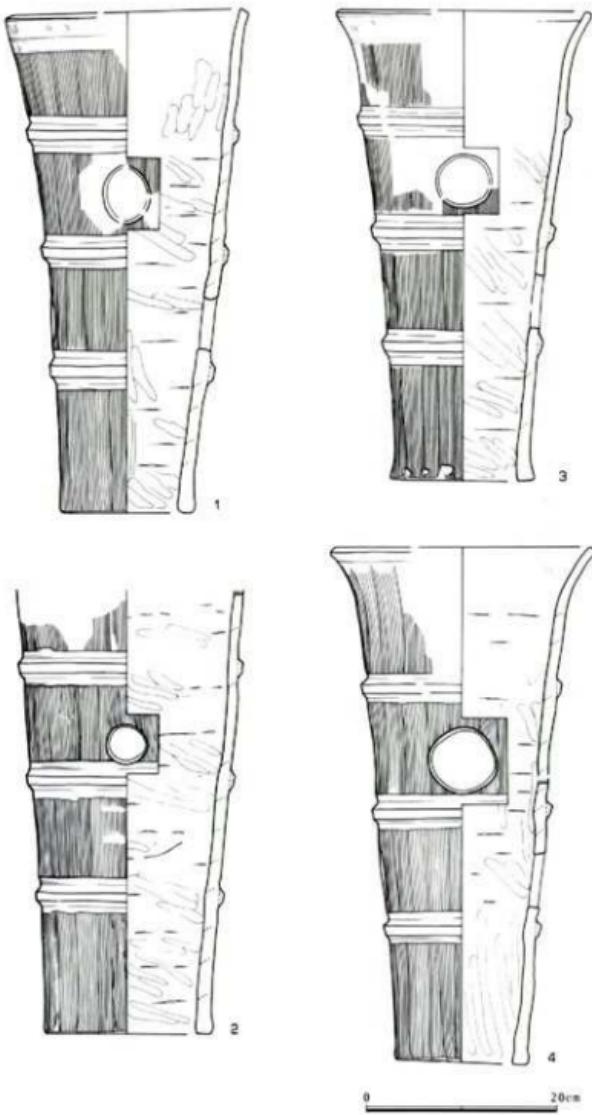
A 外傾形円筒埴輪（第二一図1・2、図版第二二）

底部から口縁部に移行する形状は、ほとんど直線状に外傾しながら開くものである。Aブロック出土の1が標式となる。この埴輪は、底部1段、体部2段、口縁部1段の4段構成で、凸帯3本を貼付し、透孔は体部の2段と3段に各2個ずつ、いずれも十字になる位置に穿孔される。各部の外面は、縦位の刷毛目（工具幅約2.5cm、刷毛目数8本/cm）で調整するが、口唇部付近は横なで手法を施す。内面の調整は、口唇部の横なでを除くと、体部と底部間に指頭による縦・斜め方向のなでを行っているが、部分的に粘土紐の積み上げ痕を残す。器高52cm、口径25cm、底径14cm、器厚1.5cm前後を測る。焼色は赤褐色を呈し良好である。

口唇部付近を欠失した2は、1と同様の形状を呈するものと思われる。各部位の構成は、ほぼ前者に類似するが、本例では透孔が体部の第2段ではなく、第3段の下方に小さく（径約4cm）穿孔される。成形および整形の技法はほとんど変わらない。現存器高約45cm、底径約17cm、器厚1.0～1.5cm、焼成は全体に良く赤褐色を呈する。

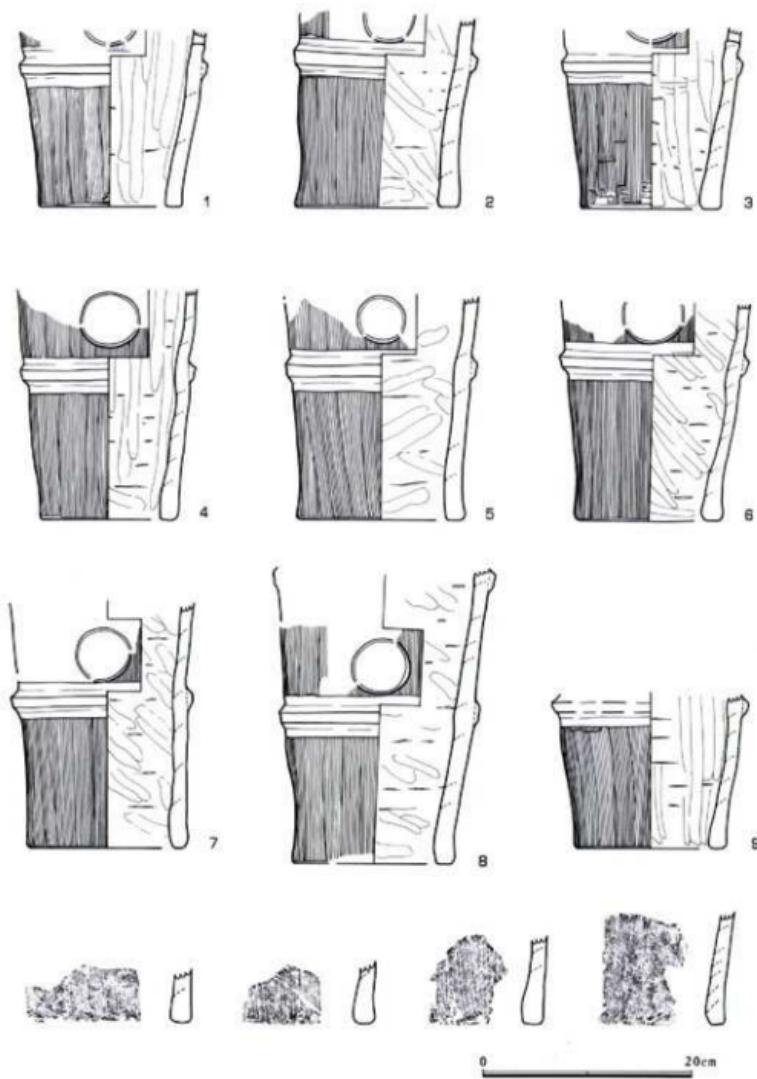
B 外反形円筒埴輪（第二一図3・4、図版第二二）

底部から体部が斜上方にほとんど直線状を呈して立ち上がり、口縁部に至って外反しながら開く器形である。図示した3と4（Aブロック出土）が該当する。各部位は、底部1段、体部2段、口縁部1段の4段に構成され、凸帯は3本貼付、透孔は2と3段に存在し、各2個ずつ十字になるように配置穿孔している。外面は、口唇部と3本の凸帯に横なで、口縁部・体部・底部に縦位の刷毛目調整を施す。内面は、口縁部上半に丁寧な横なでを行い、体部と底部に指なでを施すが、全面ではないので所々に接合痕を残している。概して体部の調整は粗雑である。口唇部・口縁部や凸帯などの形状と技法に極めて類似性が強い。色調は黄褐色ないし赤味を帯び、焼成は良好である。3は器高49cm、口径約26cm、底径16cm、器厚1.0～1.5cm、4は器高54cm、口径28cm、底径

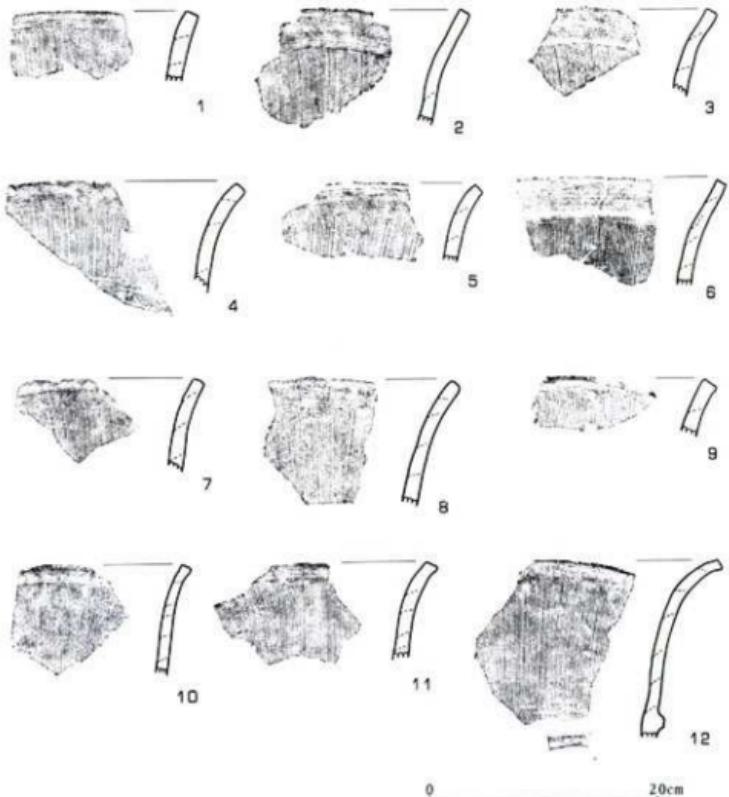


第二一図 円筒埴輪実測図(1)

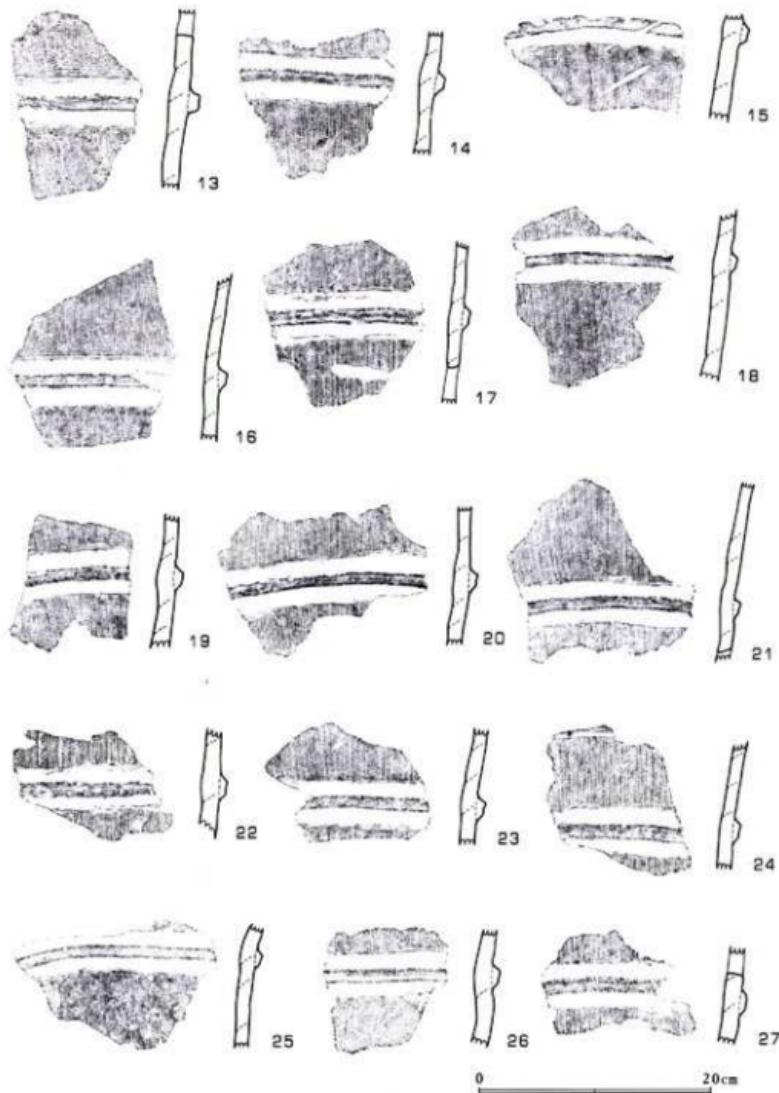
14cm, 器厚1.0~1.5cmを測る。



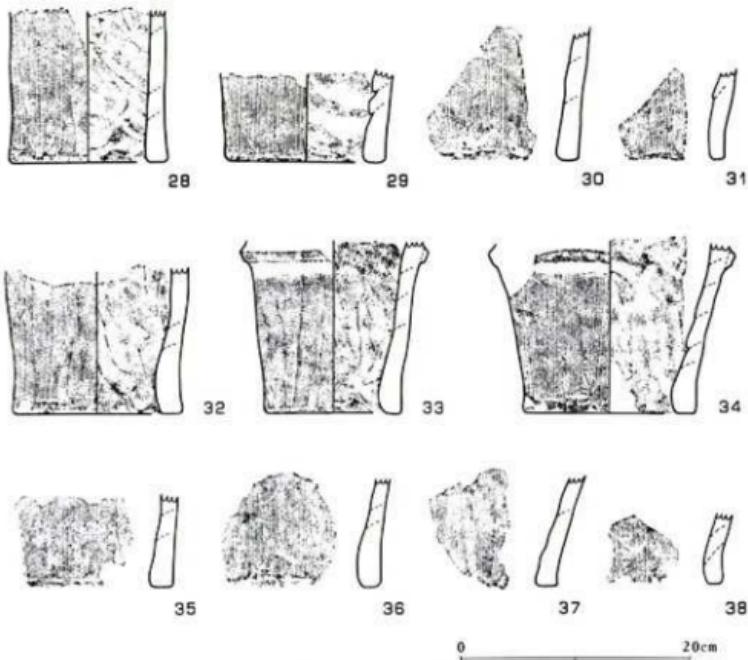
第二二図 円筒埴輪実測図(2)



第二三図 円筒埴輪実測図（口縁部）



第二四図 円筒埴輪実測図（体部）



第二五図 円筒埴輪実測図（底部）

2 形象埴輪

A 人物埴輪（第二六～三〇、原色図版第二・三）

人物埴輪は、男子と女子の他に武人、台部など数個体分を検出しているが、破損したものが多く完形に復元しうるものは存在しない。

1 男子埴輪（第二六図1、原色図版第三）

上半身は部分的に欠損し、腰部以下の下半身は存在しない。頭部上半の結髪は、中央から左右に分けてはね上がるよう外反させ、下半の髪は両耳元に束ねて美豆良とし、後方には垂髪していない。髪筋は刷毛目によって描かれる。眉・目・鼻・口などを含む顔面の表現は、2の男子像の作風と酷似しており、同一工人の手になったものと考えてよからう。美豆良は長さ約10cm、幅約3cmの粘土棒で表現し、4本の細い斜線は飾り紐になる。彩色は、頭髪・美豆良・頸部などにうすく残っているが、顔面には認められない。両腕は胸部前方に持ち上げている。腕に籠手がは

められる。手の甲から肘にかけて描く四印の沈線は縫目を表現する。指の先端部折損、この腕部にも僅かに彩色の痕跡が残る。上衣はとくに型式を表現しないが、全面に紺色といふより鈍色の彩色が施される。腰部には連続山形文を細い寛で抽出した広帯がめぐり、左腰部に大刀を佩用していた剝離痕をとどめる。赤褐色を呈し焼成は良好である。

2 男子埴輪（第二七図2、原色図版第三）

男子埴輪の頭部である。顔面はほとんど無傷の状態で残り、後頭部の一部と美豆良は基部を残して欠損する。髪は頭頂部で左右に二分して外反させ、後頭部は耳もとに束ねて美豆良とする。髪筋は丁寧に刷毛目で描かれる。鼻、目、口などを含めた顔面は、極めて写実的な表現となり入念につくられている。なお、頭部上半の二分した結髪、右目の下（実測図の左側）、頸の正面などに、紺色または鈍色の顔料を塗布した痕跡が僅かに残る。焼成は良好で堅緻、色調は赤褐色を呈する。現存高18.5cm。

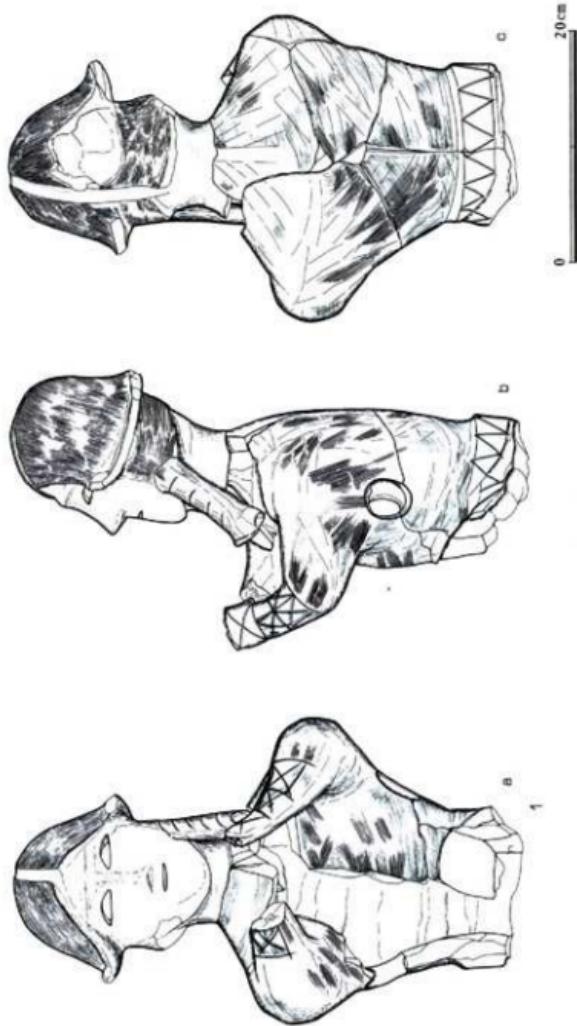
3 女子埴輪（第二七図3、原色図版第三）

髪の周縁部を僅かに欠失する。男子埴輪と同様に顔面は無傷で、極めて写実的に表現している。髪は頭頂部で分髪形の髪（長さ14.5cm、前端幅推定12.0cm、後端幅12.5cm、厚さ1.3cm）を板状につくり、中央で結髪する。髪の上面は平滑にならず、刷毛目による髪筋はみられない。顔面の鼻筋はよく通り、先端が尖り氣味となる。眉は男子よりやや低く、目は長く大きめに穿ち、口は短く一文字で、女性らしさがうかがわれる。両耳の中央に小さい盲孔があり、耳朶の下に環状の剝離痕もみられるので、耳飾りをつけていたことがわかる。頭髪と顔面には彩色は施されない。胎土・焼成は良好で黄褐色を呈する。現存高15.0cm。

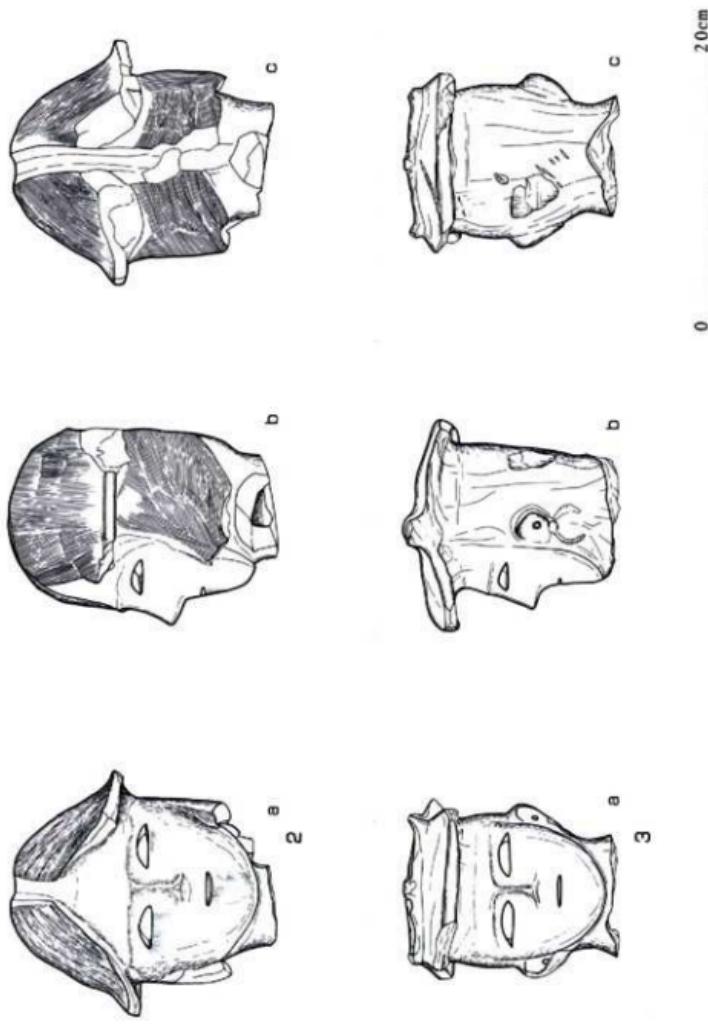
4 武人埴輪（第二八図4、原色図版第二）

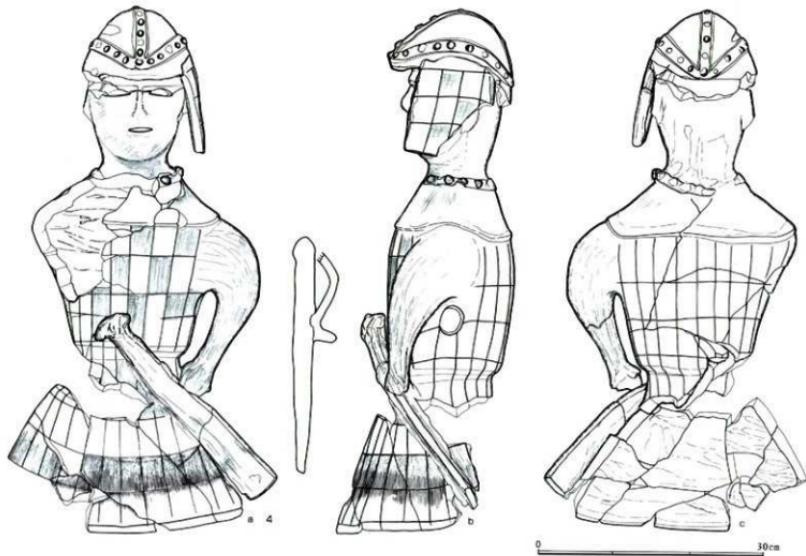
甲冑をつけた武人の埴輪である。上半身は右腕をはじめ部分的な欠失が多く、下半身は同一個体らしい足部や台部があるけれども、破片が不足し接合しない。顔面は右の目尻付近に損傷がみられ、美豆良は基部を残して欠失する。頭部は丸餅でとめた衝角式冑を被り、顔の側面に長方形の小札を線刻した鎧を着けているが、後部は剝離する。頸部には丸玉を連ねて飾る。鎧と同じように長方形小札を線彫した挂甲を着用し、左腰に長さ約32cmの大刀を佩用する。この大刀の柄頭と柄口には、弓形に湾曲した付属具が固定される。その外面に玉類の装着はないが勾金を表現したものである。彩色は鈍色をもって下顎の正面、鎧と挂甲の小札に市松模様で塗りわける。胎土と焼成は全体に良好であり、部分的に赤味を帯びるが黄褐色を呈する。

第二六图 形象蜡模(人物)实测图1



第二七圖 彩象埴輪(人物)実測図(2)





第二八图 形象埴輪(武人)実測図(3)

人物埴輪破片一括（第二九・三〇図、図版第二七～二九）

封土および裾部斜面を発掘中に、多くの円筒埴輪片に混在し、若干の人物埴輪片（頭部、首部、腕部、胸部、腰部、足部など）が発見された。それらのものは下記のような内容である。

女子頭部の髪（1・2）

1は分銅形に近い板状の島田蟹で、頭頂部に結び目が残存する。2は結び目が残るので頭頂部の破片である。いずれも裏面に頭部から剝離した痕が認められる。黄褐色に近い別個体である。

男子埴輪の美豆良（3）

現存長約8.5cmの棒状を呈し、先端は丸めて突起状をなしている。黄褐色。

武人埴輪の鐵（11・12）

顔の側面を覆う鋸で長方形の小札を線刻する。11は左側面部の破片で赤褐色を呈する。12は小札の大きさが相違し黄褐色の別個体である。

首・胸部（4）

首に丸玉を連ねた頸飾をつけているが、中央の大きい玉は先端を欠失する。おそらくこの玉は勾玉であろう。胸部は平滑につくられている。

腕・手部（5～10）

中央より先端部は棒状の粘土を芯とし、後半部は粘土紐を巻き上げ中空に成形する。指は基部を残し欠失するものが多い。左手の中指を残した9には手甲の一部が認められる。10の腕首には丸玉を連ねた腕飾が残る。8は赤褐色、5～7・9・10は黄褐色である。

胸・胸部（13～15）

挂甲を着用した破片で、小札を方形・長方形に線刻する。13の胸部には鈍色の彩色が僅かに残存する。

挂甲と大刀（16・20）

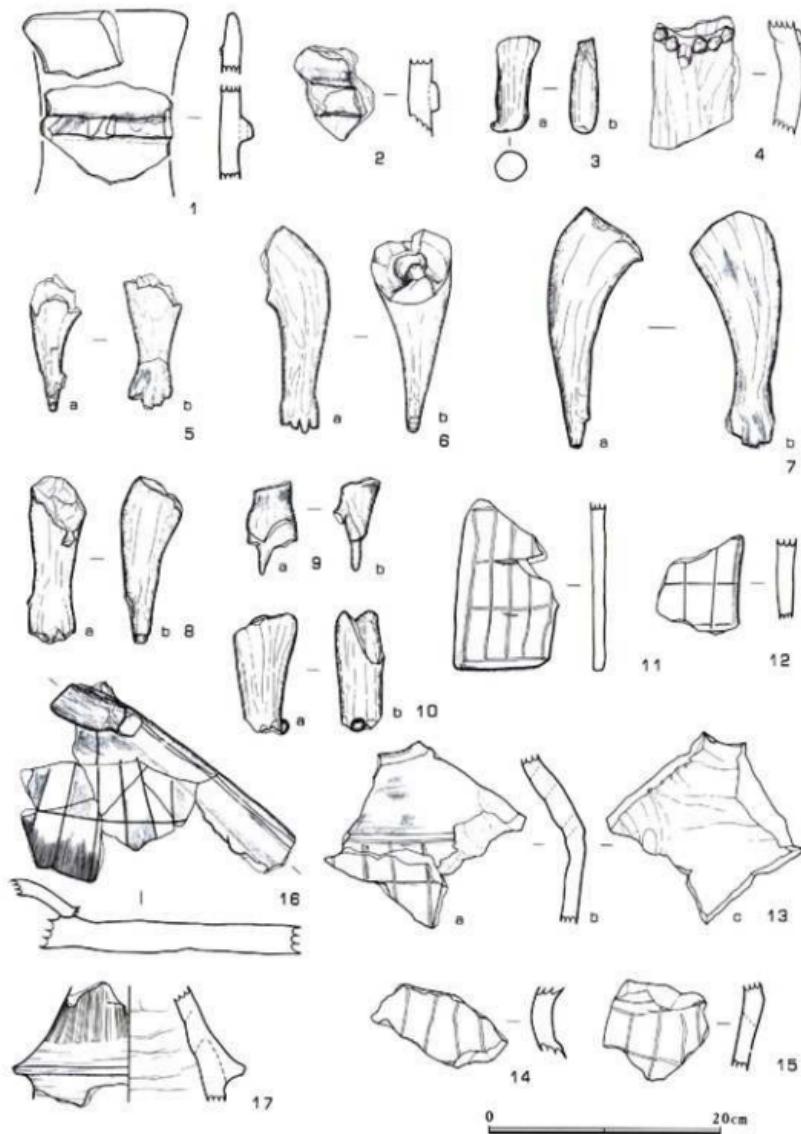
長方形の小札を線刻した挂甲をつけ、左腰に大刀（柄頭欠失）を佩く武人の破片である。大刀の柄部には、勾金がとりつけられているが、上半部を欠失する。挂甲の小札には鈍色を彩色した痕がみられる。黄褐色。20も大刀であるが、柄頭の形状は頭椎のように思われる。赤褐色。

腰部（17・18）

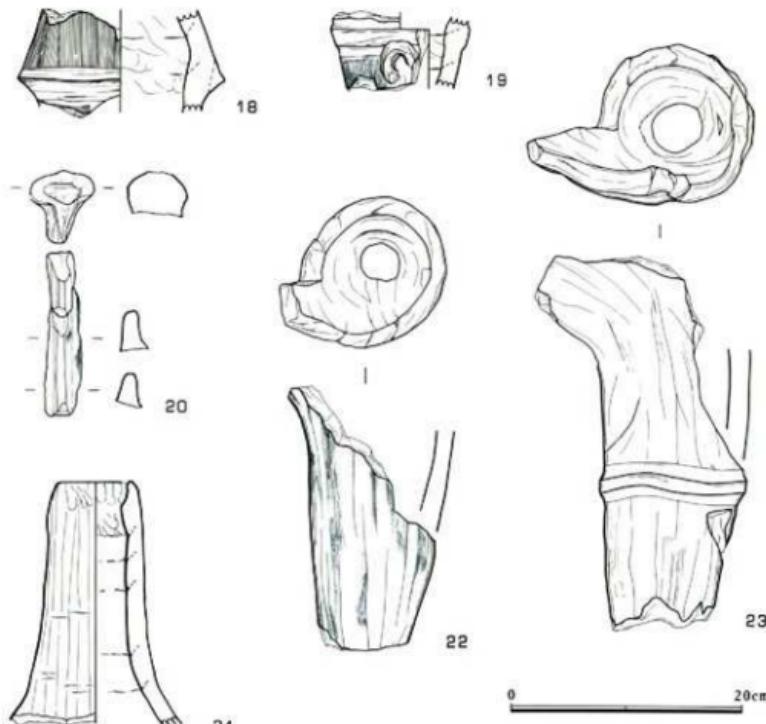
下半身の腰部から円筒形の基部に移行する破片である。縦刷毛目は下衣の裳（腰から下にまとった衣）を表現したものであろう。焼色はやや赤褐色に近い。

脚・足部（19・21～23）

19は脚の膝下で足もとを結んだ結び紐を表現し、その両側に鈍色が塗られる。22と23も別個体であるが脚部に相当する。後者には凸帯が貼付されているけれども、結び紐は存在しない。いずれも外面の調整は範囲でによる。



第二九図 形象埴輪(人物)実測図(4)



第三〇図 形像埴輪(人物)実測図(5)

基部 (第三一図、図版第三〇)

形像(人物)埴輪の全身像を乗せる台で3体分が出土している。1の円筒部は、平面形が隅丸長方形に作られ、第2凸帯の上部に至って丸味を有する。凸帯は2本貼付される。基底部の外面は縦刷毛目、胸部の外面上半は斜めの指なで、下半部は縦刷毛目で調整し、短径部の側面に一对の透孔を施す。内面の調整は指なで痕を残す。上部の中央に小円孔を穿ち、その両側に足の剥離痕が並列する。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。長径25.0cm、短径20.0cm、器厚1.5~2.0cm、現存高約28.0cmを測る。

2の円筒部も隅丸長方形を呈し、上部は丸味をもち、その上に両足が乗る。両指先と足首の部分がいすれも剥離している。凸帯は2段に作出され、胸部側面に一对の透孔を施す。つくりは1の基部とほぼ同様で、上部中央に小円孔を穿つ。外面は基底部、胸部ともに縦の刷毛目で調整す

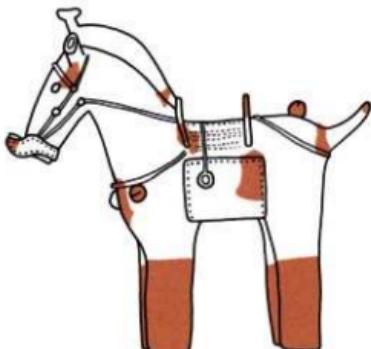
る。長径推定23.0cm、短径20.0cm、器厚1.5～2.0cm、現存高約27.0cmである。

3の円筒形も平面形は隅丸長方形である。側面の一部と上部を欠損しているが、第2凸帯上のカーブを描く具合をみると、上部は前二者と同様の丸味をもつ形状になると思われる。凸帯間の外面には、縦方向の刷毛目調整、内面には斜めの指なで調整を施す。胸部側面に透孔一対が穿たれる。色調は黄褐色、焼成は良好である。長径推定約24.0cm、短径約21.0cm、器厚2.0cm、現存高約20.0cmを測る。出土位置から考えて、武人埴輪（第二八図）の基部と思われる。

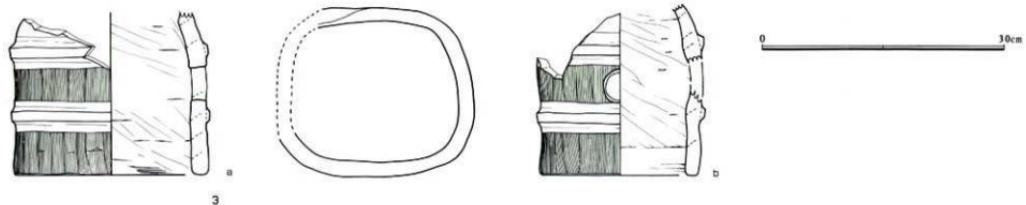
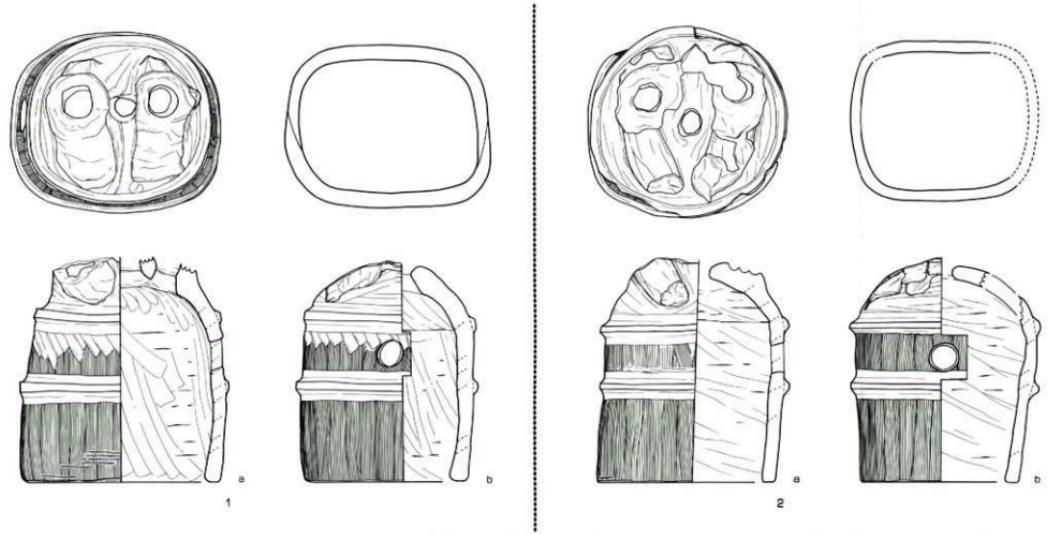
B 動物埴輪（第三二図、図版第三一）

すべて馬の破片に属するけれども欠落部位が多い。胎土・焼成などの違いから少なくとも2頭分の破片が含まれている。

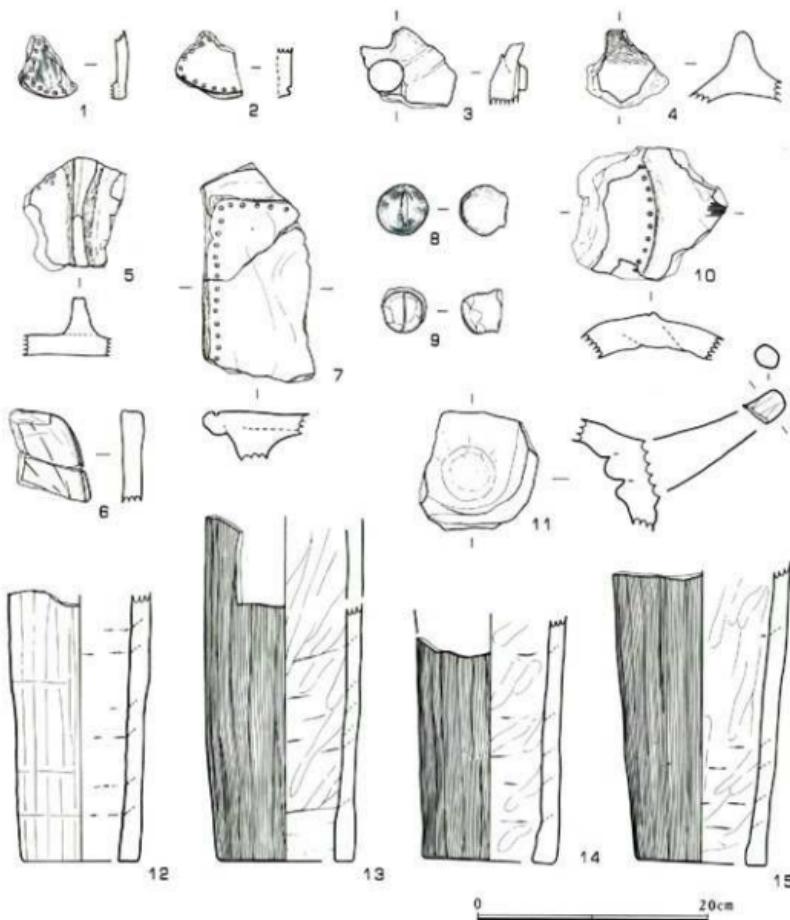
1と2は、嚙を固定する鏡板の破片で、刺突による列点文が舐止めを表現する。前者は赤褐色で鈍色の塗布があり、後者は黄褐色を呈し、全く別の個体である。3は目から耳にかけての部分である。面繫の革帶を粘土紐で表現し、さらに円形の金具を粘土粒で貼りつけている。黄褐色。4は立髪の一部と思われる。5は鞍の前輪に相当するけれども、6の破片は前輪・後輪の区別が判然としない。両者は胎土と焼成が明らかに相違する。7は泥よけの障泥の破片である。周縁は刺突による列点文で装飾する。足をのせる鑑がみられないで、おそらく後半の破片になるだろう。表面は風化を受け荒れている。8と9は球状の土製品で、中央に範の線刻を施した馬鎧である。前者には鈍色が塗彩される。直径は3.5～4.5cmの大きさを有する。10は後輪から尻にかけての部位で刺突列がめぐり、11には粘土紐で尻繫が表現される。尻尾は基部から欠損するが、先端部らしき部分は残っている。12～15は脚部の円筒である。現存長約25.0～30.0cm、直径12.5cm前後の大きさを有する。12は外面を範により調整、13～15は縦刷毛目で調整している。前者は黄褐色、後者は赤褐色を呈し、明らかに個体を別にする。



左図の復元した馬に茶色の着色を施した部分は、今回検出された破片の部位を示す。



第三圖 形象埴輪基部実測図



第三二図 形象埴輪(馬)実測図

第八章 溝状遺構の調査

今回の調査において墳丘外のローム面から発見した溝状遺構は3本である。それぞれの溝は形状と規模が相違する。

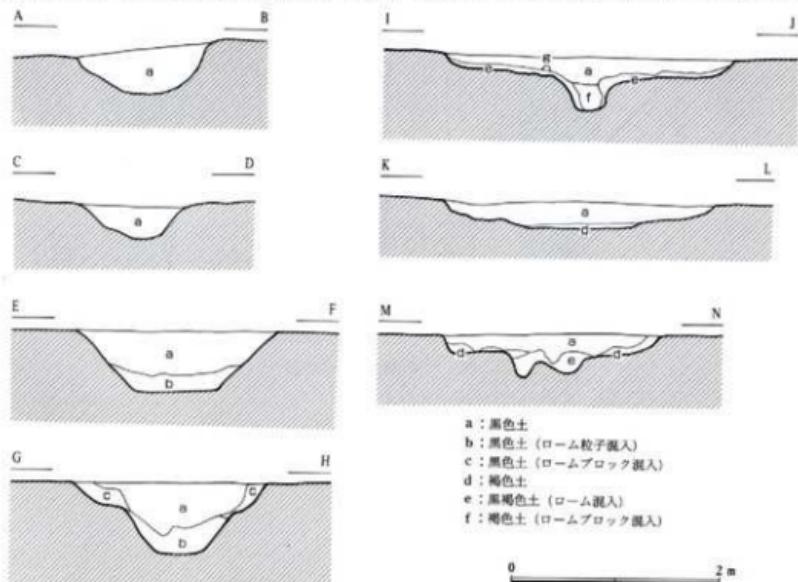
1 第一号溝状遺構 (第一六・三三図、図版第一六)

墳丘の裾部付近をあたかも円弧を描くように囲繞し、北側の台地縁近くで西南に向きを変えてのびる細い溝である。本来ならば、ここに発見される溝は、墳丘の大きさから考えて幅3.5m前後、深さ1.0m前後の規模を有し、裾部を囲繞する筈である。しかしに、今回出土した溝は、墳丘の南西側を7.0mほど弧状にめぐるが、溝幅上縁で僅かに1.1~1.3m、深さ30~50cmの規模である。そして形状的には西南に向きを変えてのびてしまい、墳丘を囲繞するものではない。溝の形状と規模を総合して考えると、古墳の築造に伴う周溝とするには問題が多すぎるとと思う。

なお、この溝は第二号住居址（古墳時代前期）の東壁を切断して掘り込み、大きくカーブするあたりの溝内部には、円筒埴輪の破片が墳丘から転落したような状態で出土している。

2 第二号溝状遺構 (第一六・三三図、図版第一七)

墳丘南側の防空壕あたりから、ほとんど直線状に西方にのびる浅いもので、第三号溝状遺構の手前で消滅してしまう。大きさは幅1.5~2.5m、最も深いところで23cmを測る。この溝は第三号



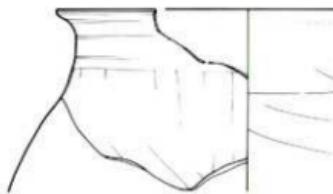
第三三図 溝状遺構断面図



第一号溝状遺構



2



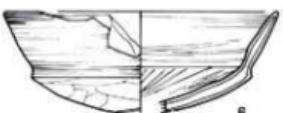
3



4



5



6



7



8



9

第二号溝状遺構



10



11



12



0 10cm

第三号溝状遺構

第三四図 溝状遺物実測図

住居址（古墳時代前期）のZコーナーから南壁の一部を切断して掘り込んでいる。溝の内部からは若干の土師器破片（前・中期）が発見された。

3 第三号溝状遺構（第一六・三三図、図版第一七）

調査区の西端に位置し、僅かに弧を描いて西方にのびる溝で、長さ10.8mまで発掘した。幅と深さは、前二者の溝に比較すると、かなり整然と掘り込んでいる。溝の幅は、南端部上縁1.7m、同底面40cm、中間部上縁1.8m、同底面50cm、北端部上縁1.6m、同底面70cm、深さは60cm前後を測り、底面はほぼ平坦で、水が流れたような形跡はみられない。遺物は出土しなかった。

この溝の構築時期は明確にしえないが、掘削方法や規模から考えて、前二者の溝とは性格の相違するものであろう。

4 出土遺物（第三四図）

第一～三号溝状遺構から出土した主要な遺物は下記のような種類である。

異型器台形土器の1は、上部中央と側面に円孔を有し、器面に刷毛目調整痕を残す。住居址出土品と同類である。2は有段口縁の壺形土器に属し、有段部と頸部の凸带上に繩文が押捺される。古墳時代前期。第一号溝状遺構出土。

3は壺形土器の上半部で頸部から口縁部が外反する。器面は寛なでにより調整される。4は体部から口縁部が外傾して開き、内面に稜を有する。5は外湾して開く体部から、稜を形成して口縁部が短かく外反して立ち上がる。体部は寛削りを施している。6は体部と口縁部の境に段を有し、口縁部が外傾して開く。体部に寛削り、口縁部になでを施す。7は口縁部が外反する。5～7はいずれも成形手法が同一の壺形土器である。古墳時代後期。8の壺形土器は口縁部が外反ぎみに開いて立ち上がる。9は後期弥生土器の底部で、付加条繩文第一種を押捺し、底面に布目痕が存在する。第二号溝状遺構出土。

10の底部は付加条繩文第一種を施し、底面に布目痕をもつ後期弥生土器である。11は壺底部と脚部が残る高壺形土器で、寛による調整が認められる。12は壺形土器の胴部破片と思われる。12は壺または壺形土器の破片で底部が突出する。器面は寛による縦位の調整痕を顕著に残している。古墳時代中期。第三号溝状遺構出土。

第九章 墳丘および墳丘外出土の遺物

墳丘の発掘中、墳丘外の遺構確認の際に縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などの破片約480個が出土した。また、住居址内の埋没土にも若干の縄文土器の破片が混入していた。これらの資料は図示したようなものである。

1 縄文時代の遺物（第三五図、図版第三二）

採集できた遺物はすべて土器の破片である。時期別には早期および前期後半から中期前半に比定できる。

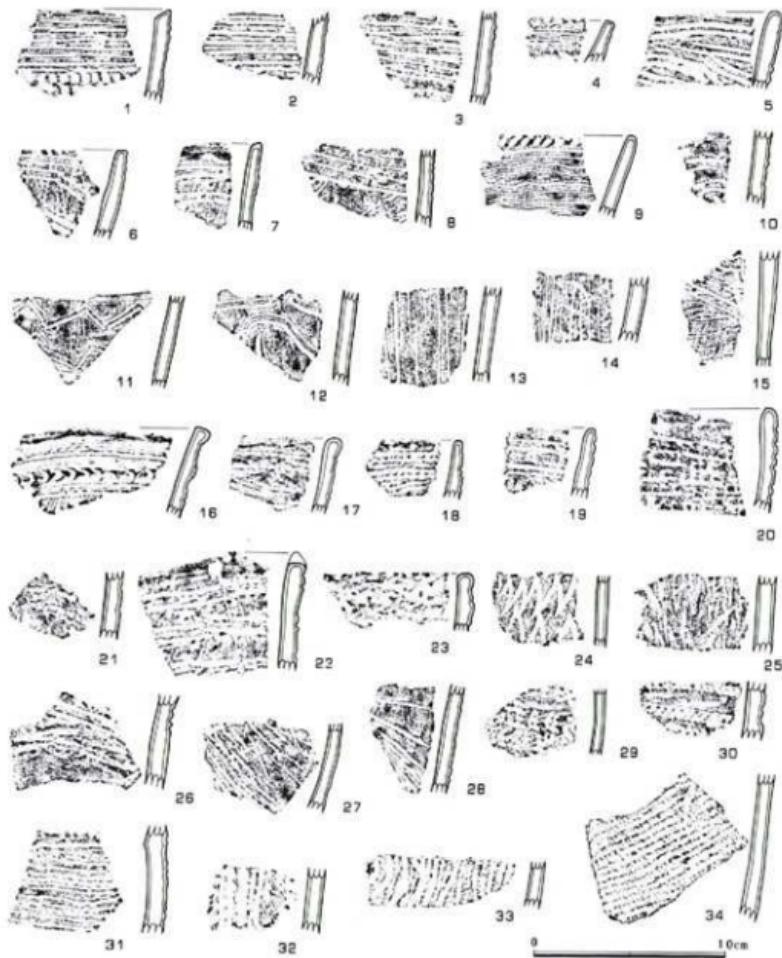
早期縄文土器 口縁に平行して籠状工具で沈線文を施し、その下に角押文的刺突列を押しつけた1は、口唇断面が内側にそがれ刃形を呈する。他の前期後半の土器に比して胎土、焼成は堅緻である。口唇部の形態は三戸式に対比させて考えられる。2と3も同一型式であろう。この種の土器は、北関東および東北地方の沈線文系の土器である。

前期縄文土器 半截竹管工具を使用して、二本の沈線を同時に施文し、横位、斜位、縦位、山形状、波状または曲線状に描くグループには、横位に平行沈線を施す4・7、横位と斜位の沈線を組み合わせた5・6、縦位沈線の13・14、山形文を重ねる11、波状または曲線を描く9・12などが認められる。こうした仲間に、地文としてアナグラ属貝殻の腹縁を施文した6、燃糸文をまばらに押捺した7・8・11・27など浮島I式の要素を備えた土器が存在する。16は有節平行線文や爪形文列を表出し、その下に燃糸文が押される。17は爪形文と平行沈線文、18~21は有節平行沈線文、22は幅広い平行沈線文を施文するが、一部に有節沈線化がみられ、波状口縁の頂部から短い沈線で連続的に縦に区画する。器外面に凹凸のある粗雑な土器の口縁部23には、半截竹管工具を斜めに刺突した跡を残す。波状貝殻文を施文した土器には、ハマグリのような二枚貝の腹縁を使った連続波状文24・25と、アナグラ属貝殻の腹縁をずらしながら表出した連続波状文29がある。前者は浮島II式、後者は同III式に対比して考えられる。30は幅広の変形爪形文列の間に、刺突文を配した土器で、浮島II式の文様構成を示している。

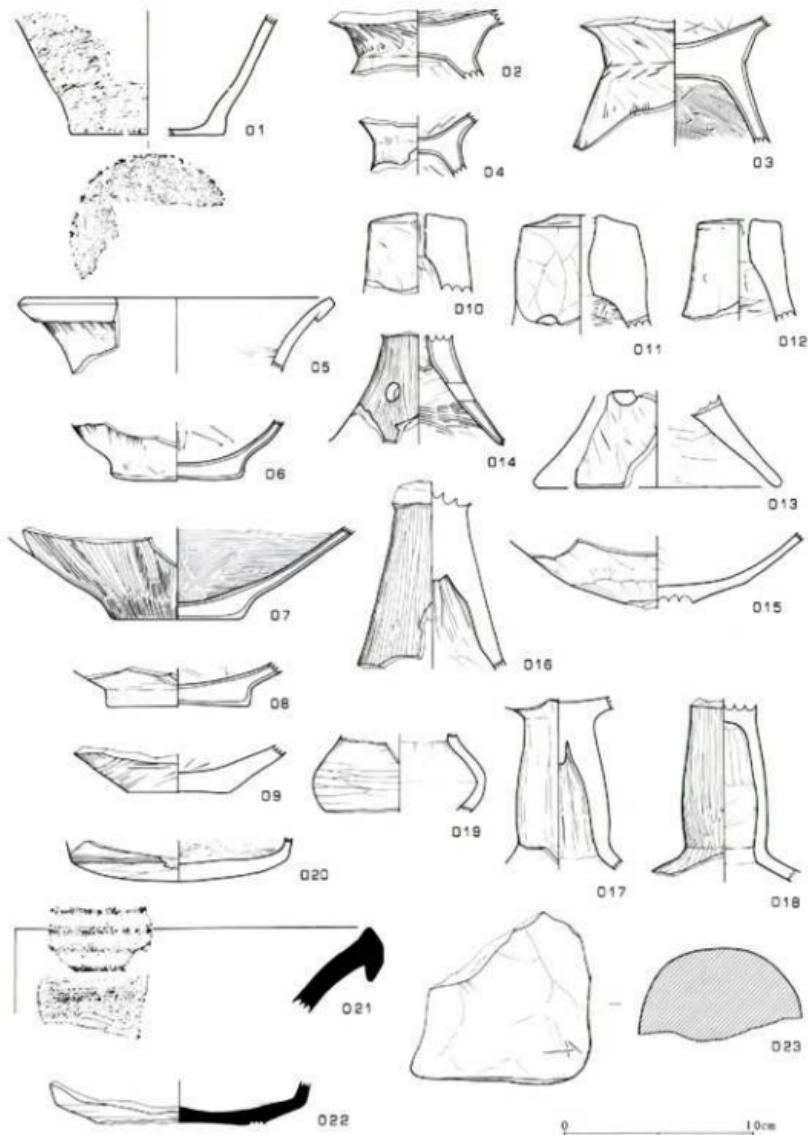
中期縄文土器 口縁端部を欠失する31は、半截竹管工具による沈線を横走させ、直線、波状あるいは有節線状に施文している。口辺部の形態は、内側が内湾曲するように開いて肥厚し稜を形成し、中期初頭的な特徴を有する。32~34は胸部の破片である。前二者には、縄文地の上から方形、渦巻または曲線状の沈線で施文した文様構成を示す。市内の高天原遺跡（「高天原」水戸市高天原古墳発掘調査会 昭和60年5月）その他にも類例があり、大木的性格の強い在地の土器と考えられる。

2 弥生時代の遺物（第三六図）

採集した遺物は、後期に比定できる土器の小破片が主体となる。良好な資料（十王台式）は、



第三五図 墳丘・墳丘外出土遺物実測図(1)



第三六圖 墳丘・墳丘外出土遺物実測図(2)

墳丘下の堅穴状遺構から出土し、大部分の破片はこれに類似した特徴なので割愛した。図示した01は唯一の大型破片である。壺形土器の胸下半部で、器面に付加条縄文を押し、底面に布目痕を有する。

3 古墳時代の遺物（第三六図）

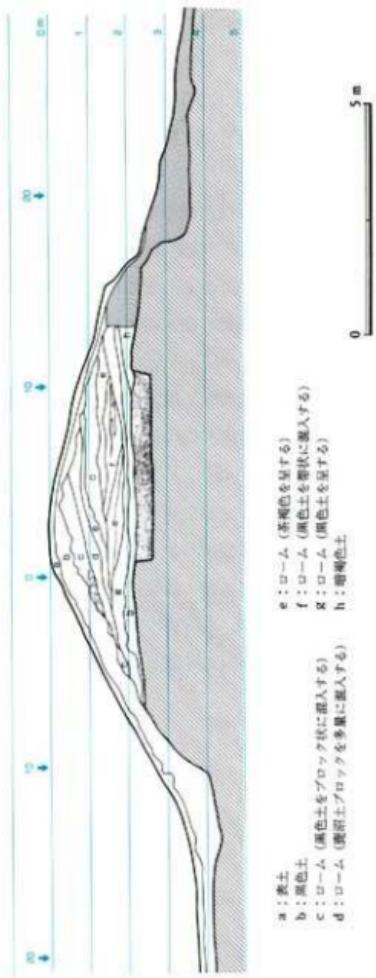
前期から中期の資料が比較的多く採集できた。これは3軒の住居址が検出された事例からみて当然のことである。

02～04は、台付壺形土器の破片で、器の内外面に刷毛目による調整痕がみられる。05は複合口縁の壺形を呈し刷毛目を有する。底部破片06～09は刷毛目を有し底部が突出する。010～013は粗製の異型器台形土器に該当する。成形技法は住居址出土の資料と同一であり、前期五領式の仲間になる。014は器受部を欠損した通常の器台形土器、窓と刷毛目で器面が調整される。015は高环形土器の环部、016は外反しながら聞く脚部、017と018は柱状の下部に脹らみをもつ脚部破片、019は口縁部と底部を欠失した小型の壺で、いずれも中期和泉式の要素をそなえている。

4 歴史時代の遺物（第三六図）

先般県教育財団が発掘した北屋敷遺跡（古墳を含む）が隣接しており、奈良・平安時代の住居址5軒、溝状遺構2条を調査している。この遺跡の周縁に含まれることを考えれば、本期の遺物が出土しても当然である（『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』平成5年3月）。

021は須恵器の大型壺の口縁部で、縁帯部が下方に大きく張りだし、口縁部に波状の沈線が描かれる。022は口縁部と高台部を欠く盤であり、8世紀の後半から9世紀に比定できるものと思われる。023は略円形の棒状土製品（半欠）でカマドの支脚に使われたものである。



第三七図 塗丘断面実測図

あとがき

北屋敷第二号古墳は、市道の改良工事に伴って発見されたものである。調査の経緯と出土遺物、墳丘下に検出した遺構については、すでに述べてきたとおりである。あらためて説明するまでもなく、弥生時代後期の竪穴状遺構、古墳時代前期の竪穴住居址の資料、さらに円筒埴輪と形象埴輪などのすばらしい学術資料を多数獲得して、ひとまず道路関連の調査を終了できた。

古墳を含めた遺跡の重要性に、遅く着目した市教育委員会の対応、常澄支所建設課の理解と協力があって、ここに記録保存のための報告書が上梓されることになった。あらためて関係各位のご尽力に対し深い敬意を表したいと思う。

ここに本古墳の調査をかえりみれば、墳丘南西側の道路建設予定地を全面発掘したにもかかわらず、古墳に伴う周溝が未検出に終り、最後まで墳形を明確にできなかった。このような事例は、通常の古墳発掘において、極めて珍しいことである。この墳形確認については、調査の性格上からして、次の機会に委ねられた。また埋葬施設の探査についても同様であり、いくつかの興味ある学問的課題が今後に残されたといえよう。

今回の調査の成果を踏まえて、市教育委員会は、残存部の墳丘を保護しようという観点から、さらに未確認の墳形と埴輪の配列状況を把握し、同時に学術資料として記録保存すべく検討が進められることになった。

那珂川下流域右岸の常澄台地の大串を中心とした地域には、すでに消滅した古墳を加えると、10数基の円墳および前方後円墳（副葬品の種類がわかる古墳もある）が存在していた。そうした古墳のなかにおいて、本古墳は優れた埴輪（人物・動物）を出土した点で特筆されるべきものである。今回は発掘の事実を中心に記述したが、本古墳の被葬者は、一体どんな階層に属する人物であったのであろうか。それは今後の第二次調査を踏まえながら、解明してゆかなければならぬ。

写 真 図 版



1 遺跡の遠景〈東から〉



2 遺跡の遠景〈東南から〉



1 古墳の現状〈西から〉



2 古墳の現状〈西南から〉



1 墓丘裾部北側の状態〈西から〉

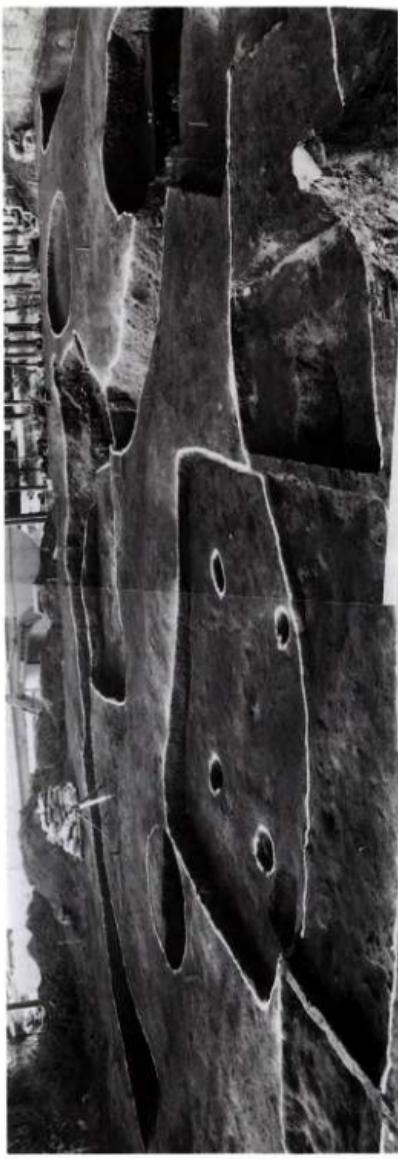


2 墓丘裾部南側の状態〈西から〉



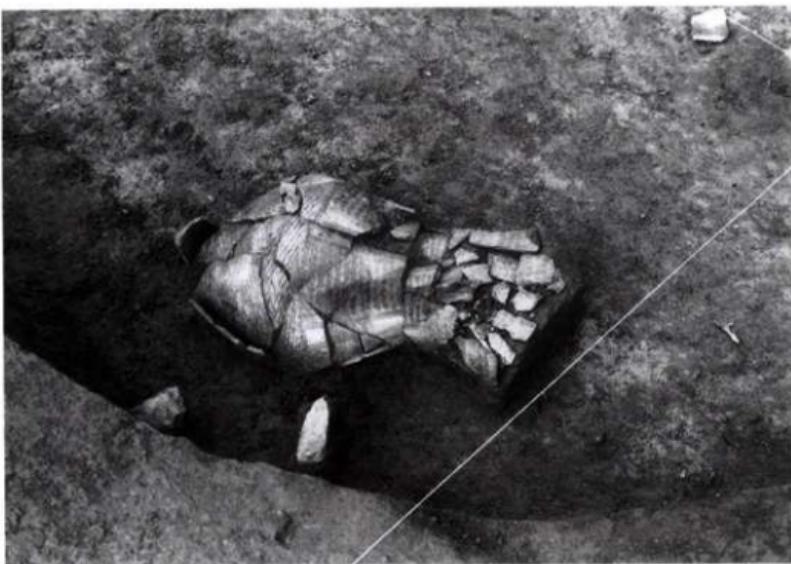
填丘の養成状態（西から）

墳丘下・墳丘外の遺構分布状態（南から）





1 第一号円形竪穴状遺構の全景〈南から〉



2 第一号円形竪穴状遺構の遺物出土状態〈西から〉



1 第一号住居址の全景〈北から〉



2 第一号住居址の遺物出土状態〈西から〉



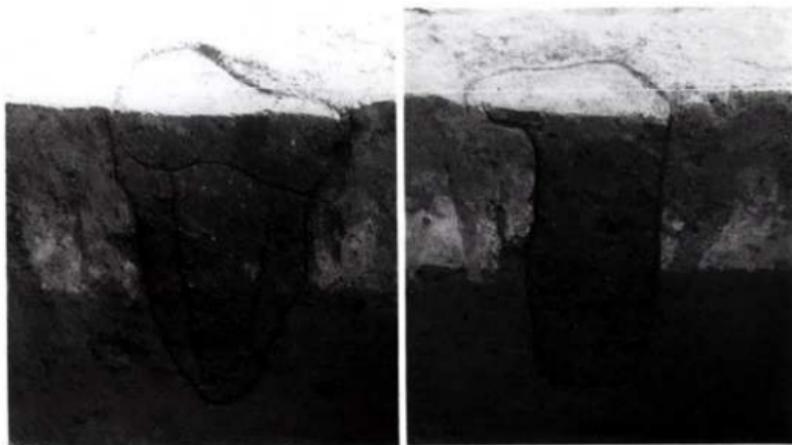
1 第二号住居址の全景〈南から〉



2 第二号住居址の遺物出土状態〈南西から〉



1 第二号住居址の炉址全景〈南から〉



2 第二号住居址柱穴P₂（左）P₃（右）の土層断面



1 第三号住居址の全景〈南から〉



2 第三号住居址の遺物出土状態〈北東から〉



1 第三号住居址の遺物出土状態〈東から〉



2 第三号住居址柱穴内の遺物出土状態



1 墳丘北側の埴輪出土状態（東から）



2 墳丘北側の埴輪出土状態（西から）



1 Aブロックの埴輪出土状態〈北東から〉



2 Aブロックの埴輪出土状態〈東から〉



1 人物埴輪（男子・腕）の出土状態



2 人物埴輪（腕・腰）の出土状態



1 人物埴輪（武人）の出土状態



2 人物埴輪（女子・武人他）の出土状態



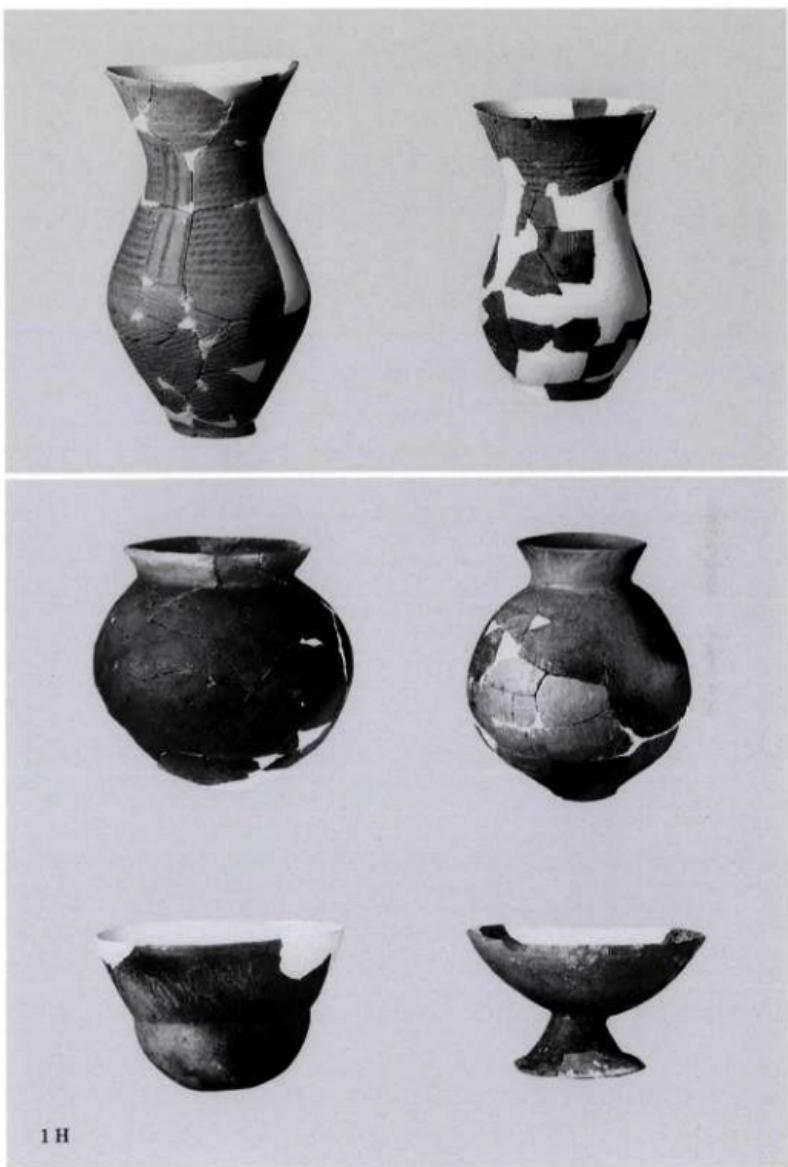
1 第一号溝状遺構の状態〈西・南から〉



1 第二号溝状遺構の状態〈東から〉

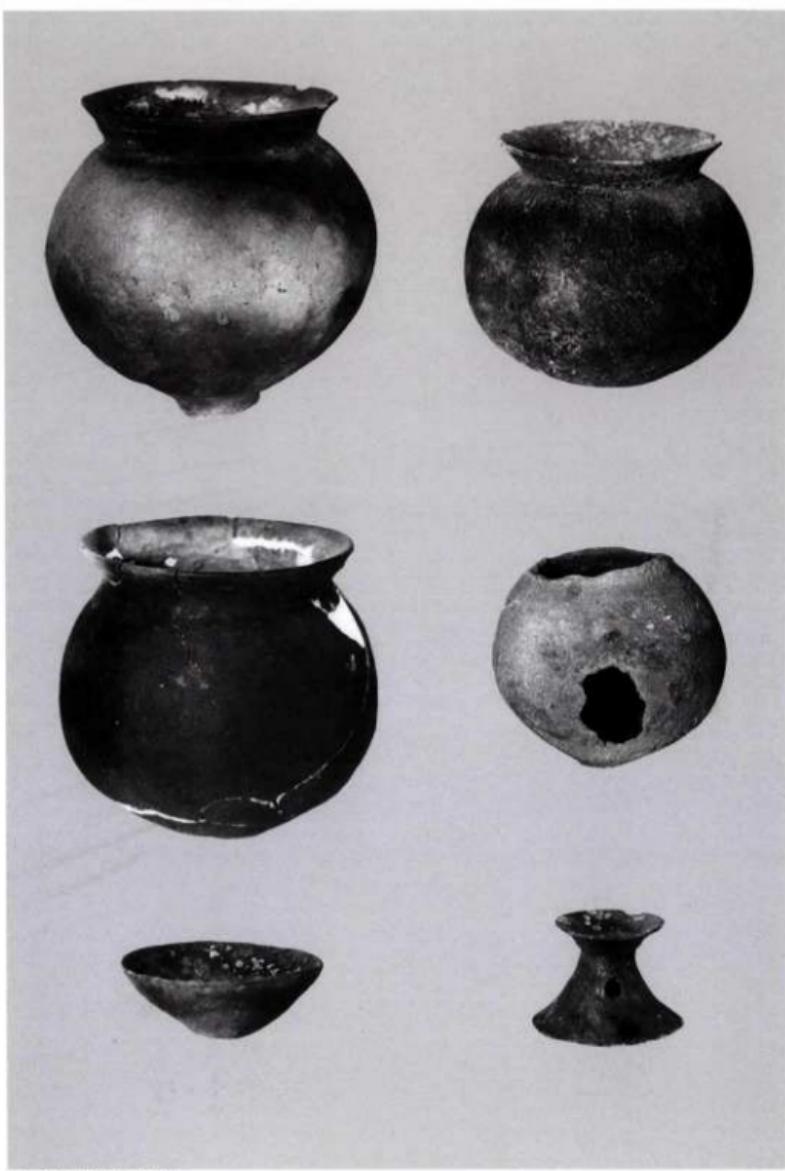


2 第三号溝状遺構の状態〈南から〉



1H

第一号円形竪穴状遺構（上）第一号住居址（下）出土遺物



第一号住居址出土遺物



1 H



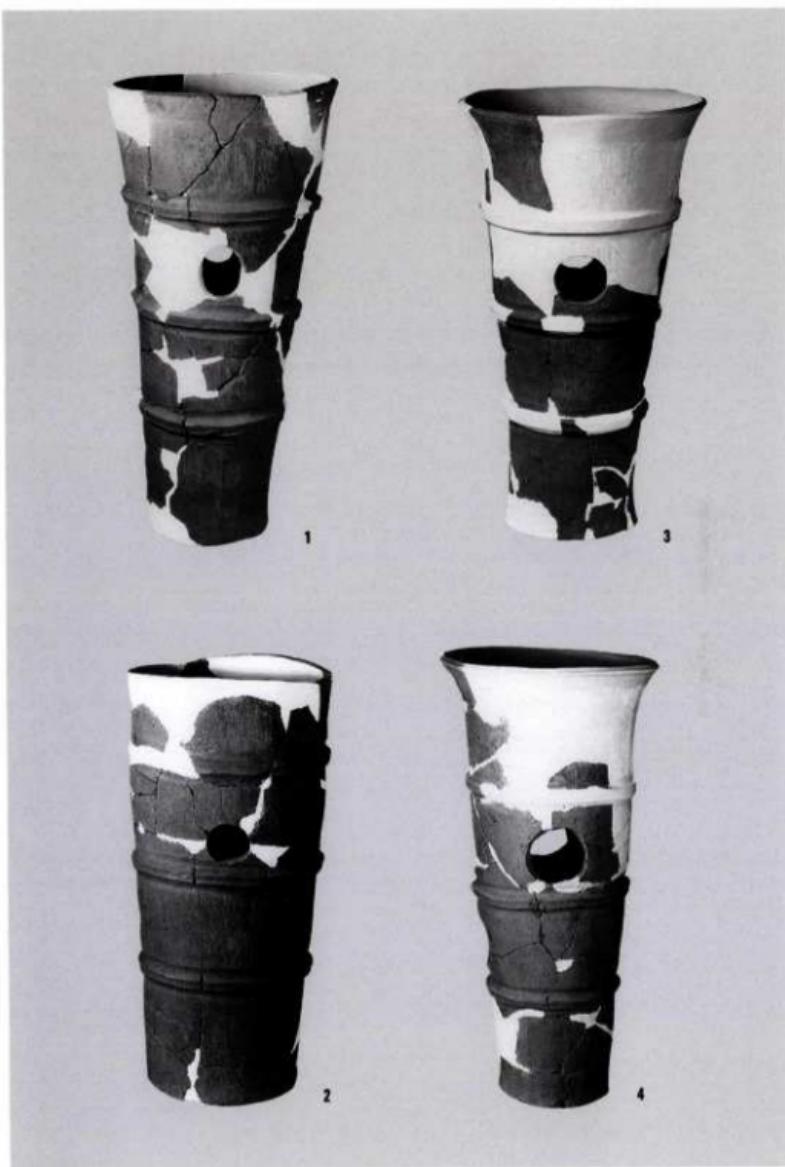
3 H



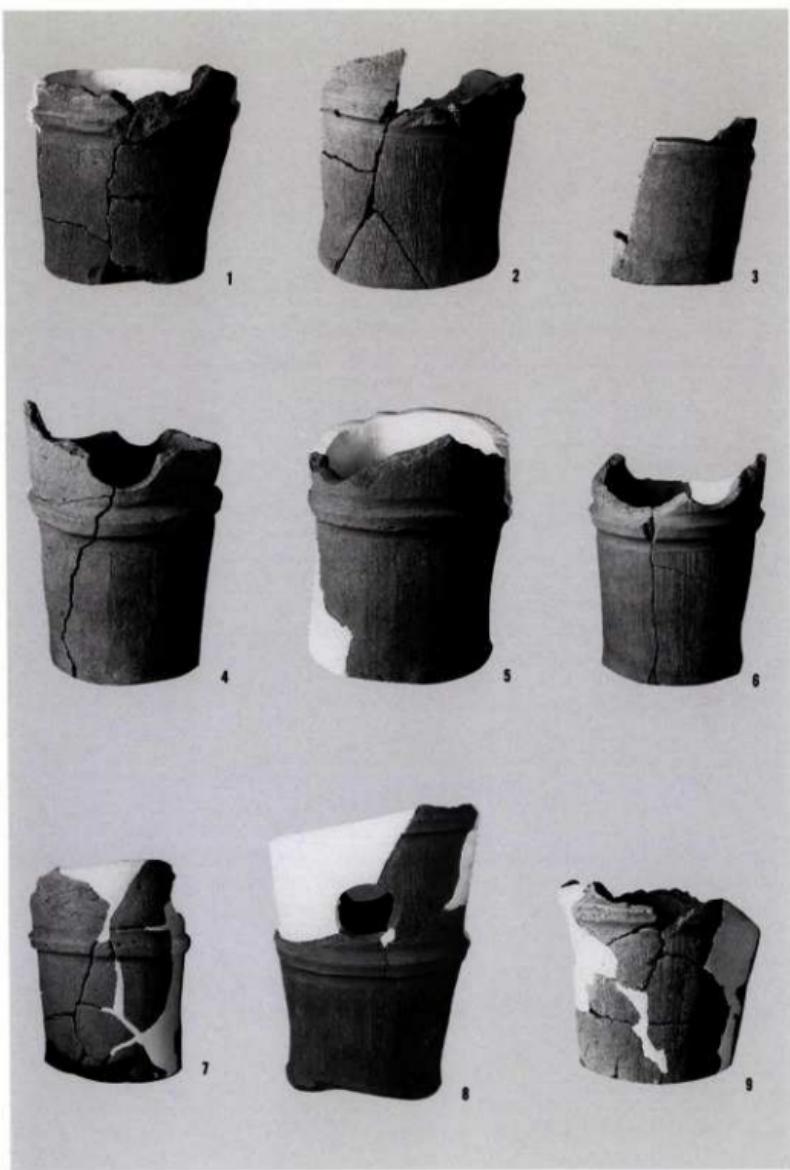
第一・三号住居址出土遺物



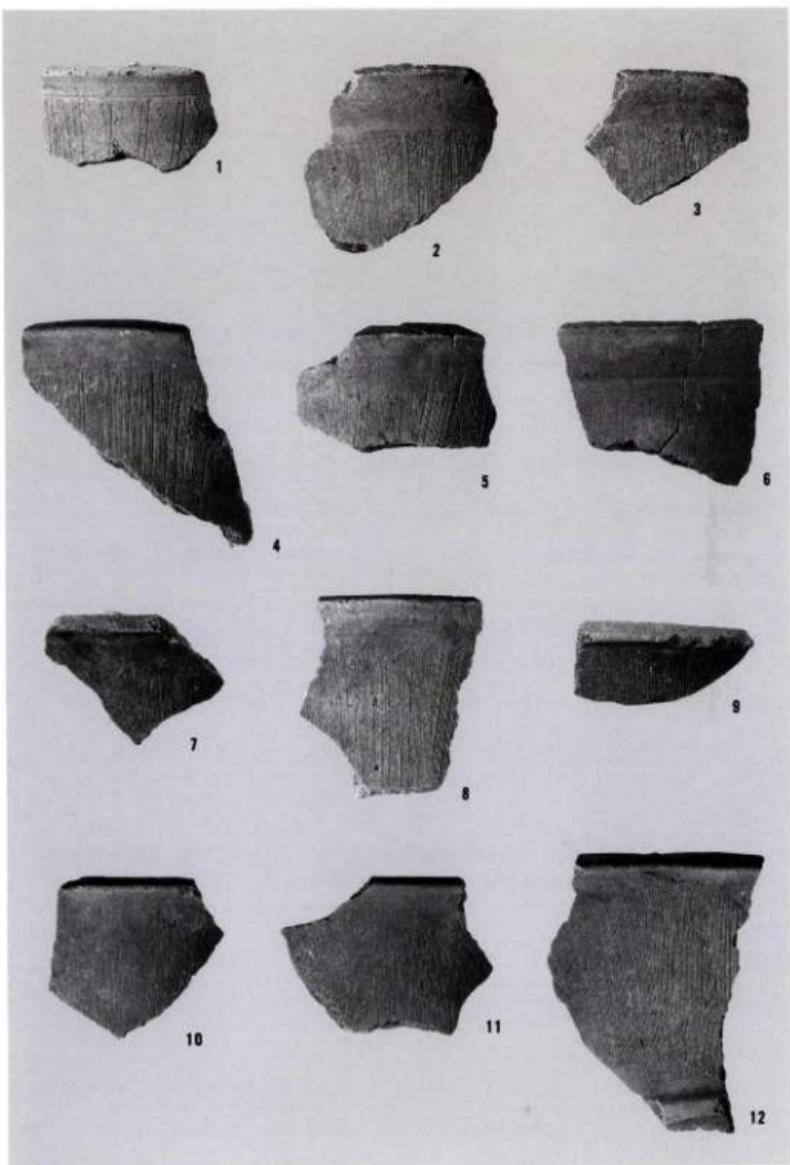
第三号住居址出土遺物



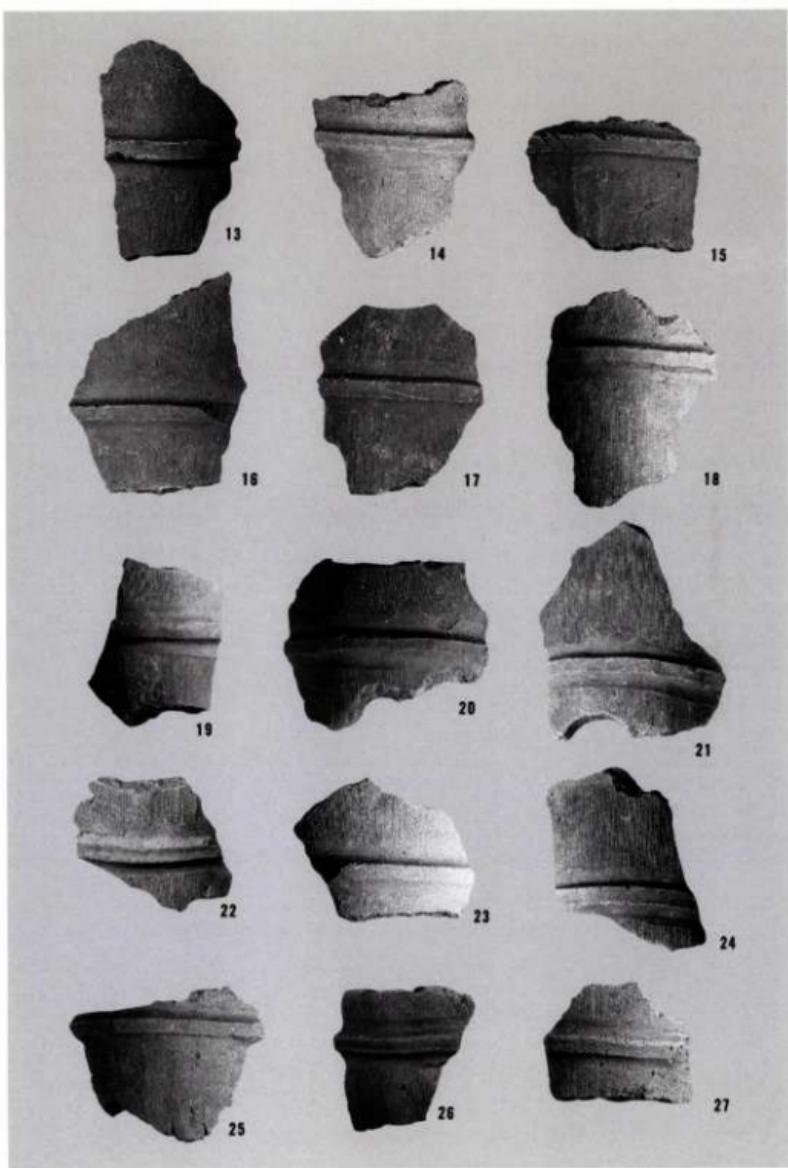
円筒埴輪



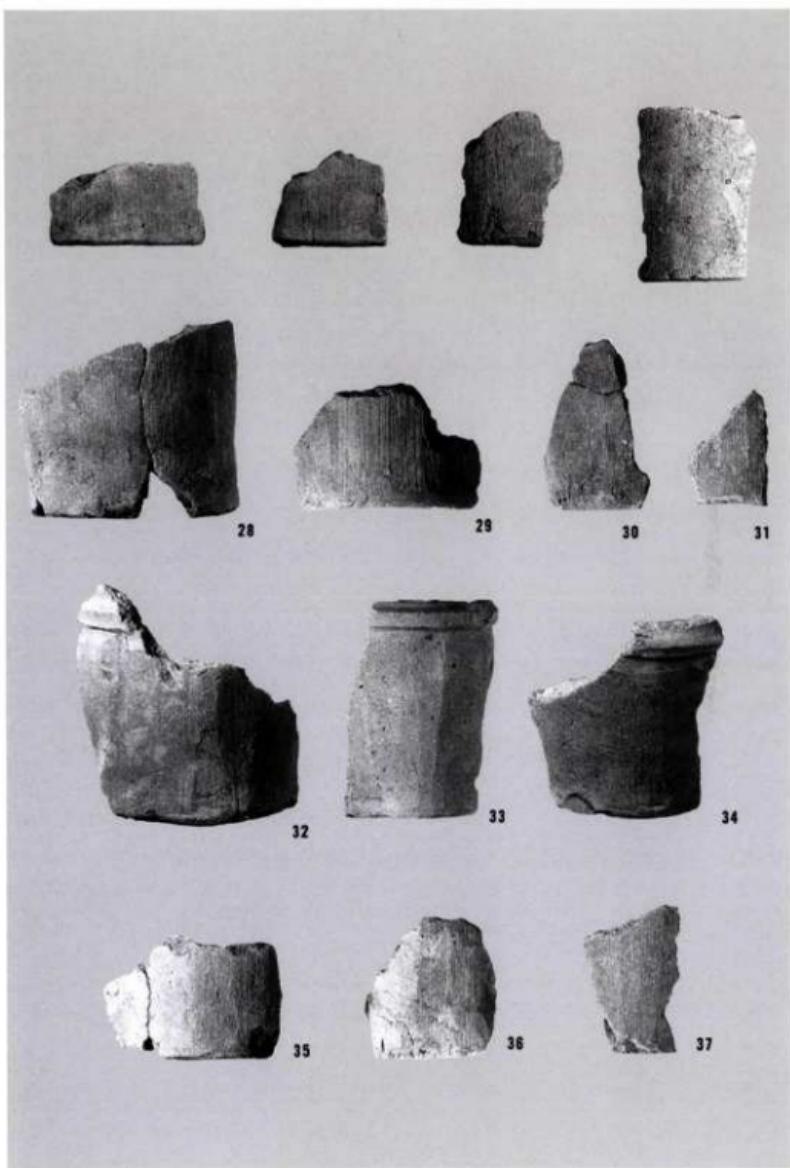
円筒埴輪（底部）



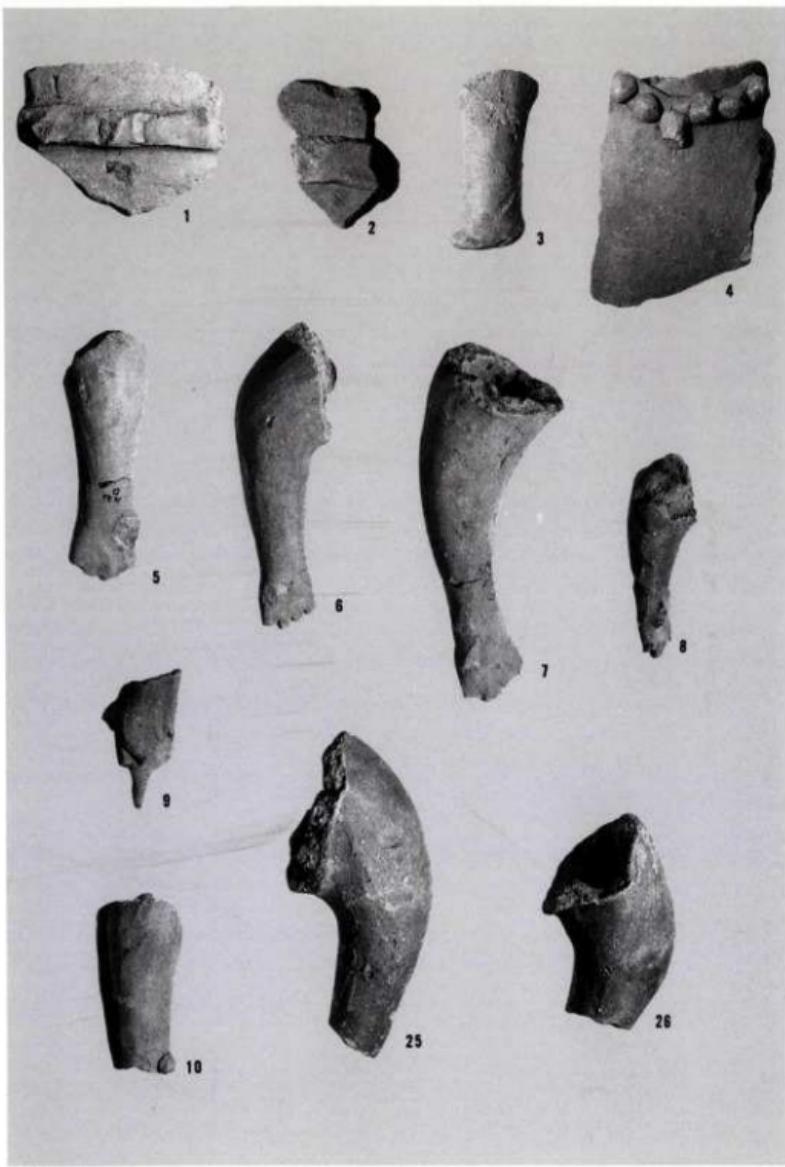
円筒埴輪（口辺部）



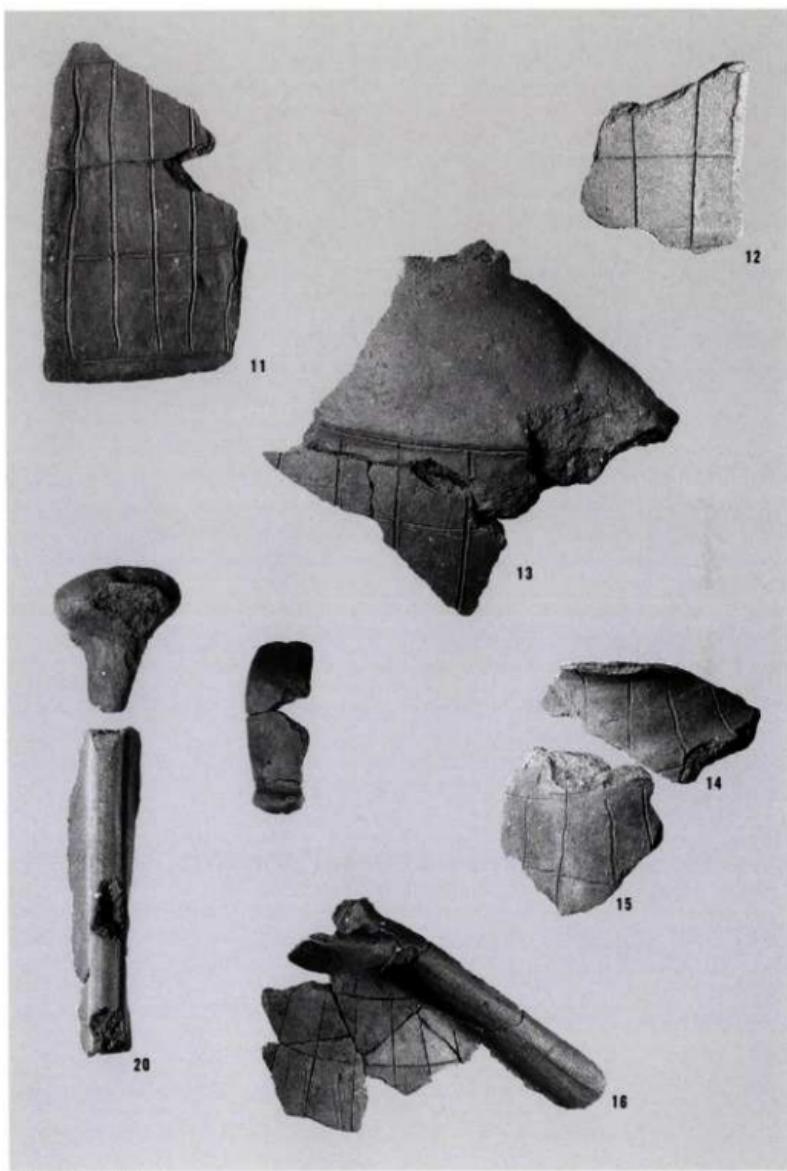
円筒埴輪（体部）



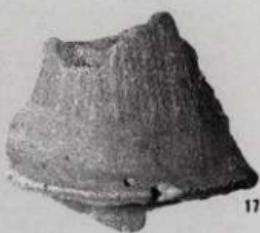
円筒埴輪（底部）



人物埴輪（破片一括）



人物埴輪（武人）



17



18



21



24



19



22

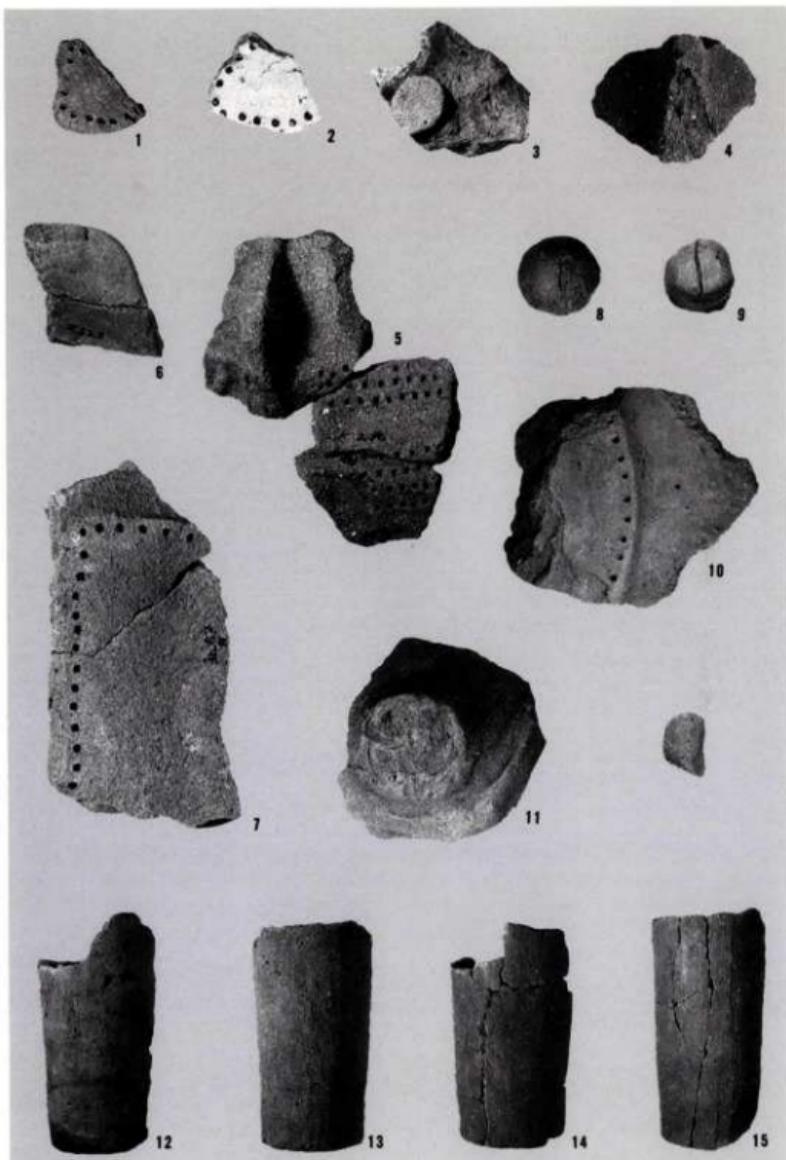


23

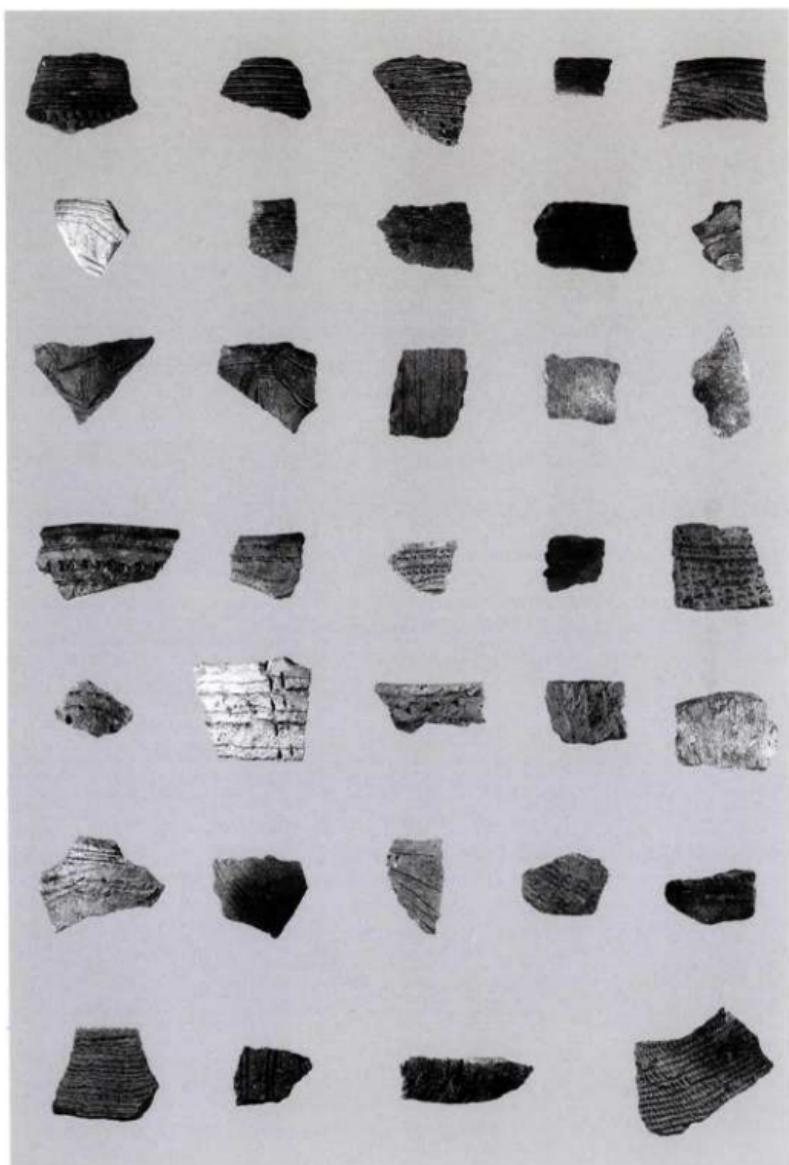
人物埴輪（人物）



人物埴輪（基部）



動物埴輪（馬）



墳丘・墳丘外出土遺物

確認調査関係者

発掘調査従事者

担当者 井 上 義 安 (日本考古学協会員・ひたちなか市文化財保護審議委員)

補佐員 大 芦 あ さ

作業員 石 崎 洋 子 江 輛 孝 雄 川 又 とも枝 栗 原 芳 子

郡 司 な か 五 上 せ つ 郡 よし子 田 締 安 文

飛 田 信 雄 安 真奈美 山 本 雅 代

整理報告書作成従事者

井 上 義 安 (整理作業指導・本文執筆・レイアウト)

大 芦 あ さ (土器・埴輪接合復元)

鈴 木 浩 子 (図面作成指導・土器・埴輪実測図・拓影図作成・レイアウト)

飛 田 信 雄 (土器・埴輪接合復元)

江 橋 和 子 (遺構図・土器実測図作成)

安 真奈美 (遺構図・土器・埴輪実測図・拓影図作成)

千 葉 隆 司 (住居址遺物執筆)

石 崎 洋 子 (水洗注記・土器・埴輪接合)

栗 原 芳 子 (水洗注記・土器・埴輪接合)

内 藤 彰 (遺物写真撮影)

水戸市北屋敷古墳

発 行 平成 7 年 2 月

編 集 井 上 義 安

印 刷 株式会社 あけぼの印刷社

水戸市北屋敷古墳

茨城県水戸市

平成七年二月

例　　言

- 1 本書は、北屋敷古墳（第二号墳）の墳形確認を目的とした発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、水戸市（岡田 広市長）の委託により井上義安（日本考古学協会会員）が行ったものである。
- 3 発掘調査は、平成6年6月23日から7月30日まで実施した。
- 4 各調査区の発掘面積は、第一調査区10.0m²、第二調査区10.0m²、第三調査区22.0m²、第四調査区7.1m²、第五調査区22.4m²の合計71.5m²である。
- 5 出土遺物の整理と報告書の作成は、水戸市大車貝塚ふれあい公園内において、担当者および補佐員が分担して從事した。
- 6 遺構と遺物の写真は、井上義安と内藤 彰が撮影したものである。
- 7 本報告書の執筆は、井上義安が担当した。
- 8 出土遺物は、水戸市教育委員会（水戸市中央1丁目4番1号）が一括保管している。

本文目次

例　　言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第一章 確認調査に至る経緯	1
第二章 確認調査の概要	2
第一調査区	2
第二調査区	2
第三調査区	2
第四調査区	8
第五調査区	8
第三章 調査区内出土の遺構	9
第四章 出土埴輪の概要	10
第五章 出土土器の概要	13
第六章 調査の成果と問題点についての覚書	17
確認調査関係者	

挿 図 目 次

第一図 調査区配置図	3
第二図 第一・二調査区遺物出土状態図	4
第三図 第三・四調査区遺物出土状態・断面図	5
第四図 第一～四調査区遺物出土状態・断面図	6
第五図 第五調査区遺構出土状態・断面図	7
第六図 円筒埴輪実測図(1)	10
第七図 円筒埴輪実測図(2)	11
第八図 円筒埴輪実測図(3)	12
第九図 調査区出土遺物拓影図	14
第一〇図 調査区出土遺物実測図	15・16

図版目次

- 図版第一 1 発掘調査の状況
2 第一調査区の遺物出土状態（南から）
- 図版第二 第二調査区の遺物出土状態（南・北から）
- 図版第三 第二調査区の東壁断面（西から）
- 図版第四 1 第三調査区の遺物出土状態
2 第三調査区の周溝断面
- 図版第五 1 第三・四調査区の周溝（西から）
2 第三・四調査区の溝状遺構断面（西から）
- 図版第六 第三調査区の遺物出土状態（上）溝状遺構（下）
- 図版第七 1 第三・四調査区の周溝とピット群（北西から）
2 第三調査区内縁のピット群（西南から）
- 図版第八 1 第三・四調査区の周溝とピット群（北西から）
2 第四調査区内縁のピット群（南西から）
- 図版第九 1 第四調査区の遺物出土状態（西南から）
2 第四調査区の遺物出土状態
- 図版第一〇 1 第五調査区の土壤状遺構（東南から）
2 第五調査区の土壤状遺構（東から）
- 図版第一一 1 土壤状遺構の調査状況（東南から）
2 土壤状遺構の調査状況（東から）
- 図版第一二 1 土壤状遺構の切断（東から）
2 北屋敷第二号古墳の現状（南から）
- 図版第一三 円筒埴輪(1)
- 図版第一四 円筒埴輪(2)
- 図版第一五 調査区内出土遺物(1)
- 図版第一六 調査区内出土遺物(2)

第一章 確認調査に至る経緯

北屋敷古墳（第二号古墳）については、平成6年3月15日から4月27日にかけて、市道常澄6-0008号線の改良工事に伴い、墳丘の西半部とその周囲の道路建設部分を調査した。

発掘調査の概要と出土遺物は、本書に所収した報告書『水戸市北屋敷古墳』に記述したとおりである。

この発掘調査においては、墳丘の北側、支谷に面した裾部付近から円筒埴輪列をはじめ、形象埴輪としての男子、女子、武人像や馬などが出土した。ここの人形埴輪は、顔面の表情の表現もすばらしく、純色の彩色を施す点にも多くの興味がもたれる。また、墳丘下のローム面では弥生時代後期（十王台式）に属する略円形の竪穴状遺構1基、墳丘下と外部のローム面からは、古墳時代前期（五領式）の竪穴住居址3軒、溝状遺構などが検出され、多くの有意義な学術資料を獲得し、発掘前の予想をはるかに上回る成果を挙げ、同時にこれらの資料が常澄地方の先史・古代史の究明に大きく寄与できることになった。

以上のような第一次調査の成果を踏まえて、市教育委員会は、未発掘の埴輪を含めて残存部の古墳を保護しようという観点から、この機会に未確認の墳形と埴輪の配列状況を把握し、学術資料として記録保存する方向で検討を行った結果、墳形確認のための第二次調査を実施することになった。

このたびの確認調査は、第一次の発掘に引き続き、市教育委員会の指導と助言を仰ぎながら、私たちの調査関係者が従事することになり、そのための諸般の準備が整えられた。調査は平成6年6月23日に、関係者出席のもと慰靈祭を厳修し発掘を開始した。

なお、確認調査を実施するにあたり、地主の宮部久夫氏をはじめ、調査地の交渉にあたられた市建設課、調査の指導と助言を賜った市教育委員会生涯学習課の各位に対し、ここに深い感謝の意を表すものである。

第二章 確認調査の概要

前章において記述したように、第二次調査の主要な目的は、まず墳丘の形状を確認することであり、あわせて埴輪の配列状況を記録し、本古墳に関する基礎資料を整備しようとしたことであった。したがって、確認調査は、埋葬施設の探査を主眼としたものではなく、古墳の形状を把握するためのトレンチ調査に限定した。

トレンチによる調査区は、第一次調査時の測量図と地主からの要望（伐木の禁止）などを勘案して、北側の支谷面に3か所、残存墳丘の南裾に2か所設定し、遺構の出現状況に応じては若干拡張することにしたが、確認作業の過程で調査区の配置は第一図に示すように変更された。

第一調査区 長さ5.0m×幅2.0m（第二・四図、図版第一）

支谷に面する墳丘北側の周溝確認のため設定したものである。墳丘下のローム面は、調査区のほぼ中間付近から35°前後の傾斜をもって落ち込み、土層断面を観察すると、その部分（溝の上縁幅約1.0m、深さ20cm前後）が、あきらかに掘り込まれた状態を示し、地形的に西側斜面にのびて消滅するよう考えられる。

調査区内においては、図示したように多数の円筒埴輪片、前期繩文土器片（少量）などが散乱状態で出土している。その分布状況は、周溝上方の斜面と下方の周溝外に多く散在し、底面上から約40cmのレベル内に包含されていた。

第二調査区 長さ5.0m×幅2.0m（第二・四図、図版第二・三）

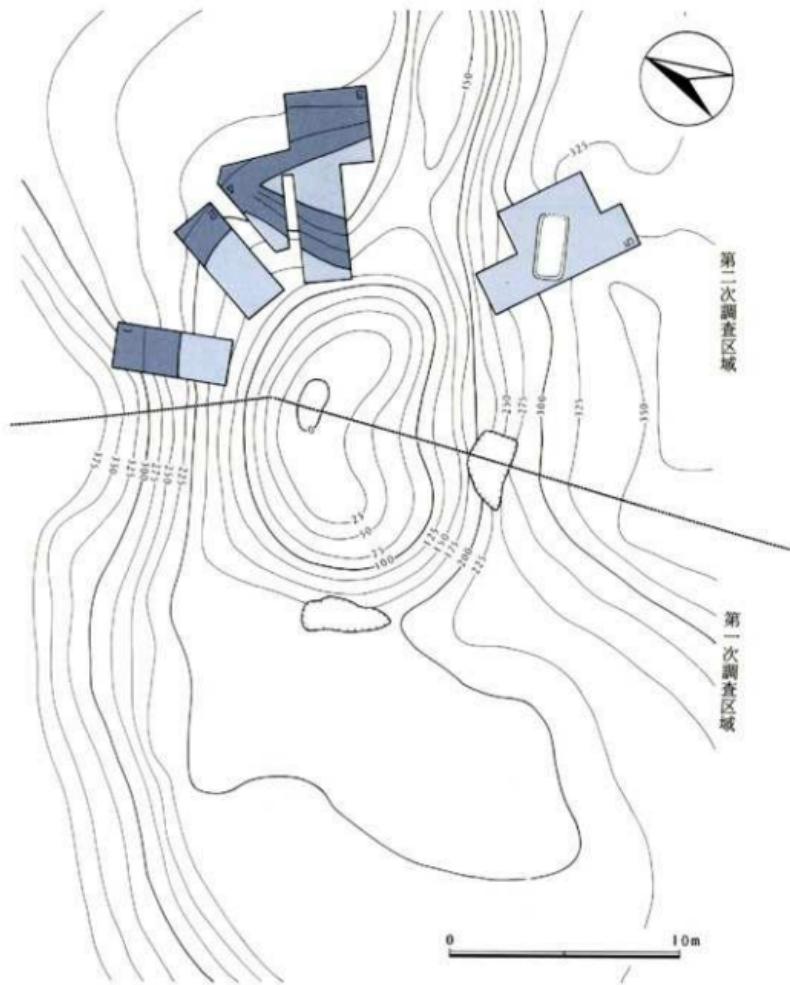
本調査区は第一調査区の東側に設定した。この調査区では、北端近くにロームを掘り込んだ周溝（底面の幅約1.0m）が検出された。周溝の底面はほとんど平坦である。外縁側の掘り込み状態は、立木があり拡張困難なために確認できなかった。

円筒埴輪の破片類は、本調査区内からも出土し、ここでは主として内縁から外縁に散在する傾向がみられた。このなかに混在して五領式期の甕形土器、高環形土器、異型器台形土器の破片、前期繩文土器や後期弥生土器などの破片が少量発見された。その出土状態は平面・垂直分布図に示すとおりである。

第三調査区 長さ8.3m×幅2.0m、拡張部長さ3.3m×幅1.5m（第三・四図、図版第四～七）

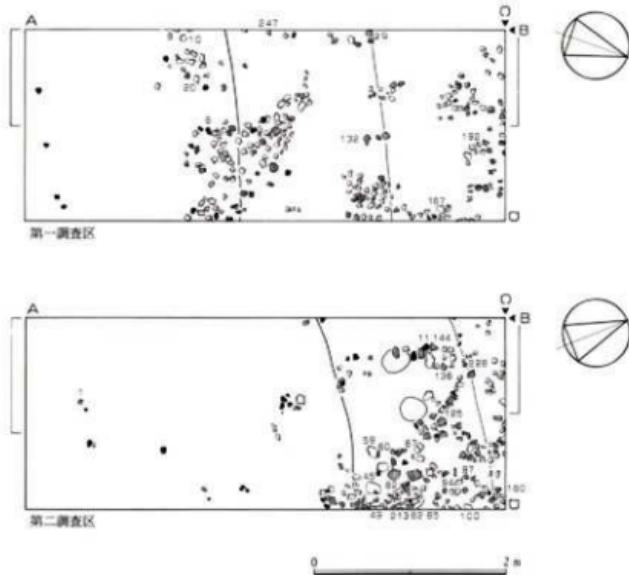
当初の大きさは5.0×2.0mであったものを、周溝が出現しないために3.3m延長し、さらに周溝のかーブする形状を把握すべく東側に1.5m拡張した。上半部には、墳丘築成前の溝状遺構が検出され、下半部の拡張部からは、幅約1.3m、中央部の深さ約70cmの周溝が円弧を描くように出土した。周溝は東側の拡張部に移行するにしたがい浅くなる。

墳丘の測量図をみると、この部分がとくにくびれているが、発掘した周溝の位置と形状からは、前方後円墳のくびれ部に該当しないことがわかった。周溝上部の土層関係は、ローム面のレベル



第一図 調査区配置図

に黒色土が介在し、さらにその上部に黄褐色土が堆積していて、墳丘側の土砂が削平により移動し、黒色土を被覆した結果であることが理解できる。

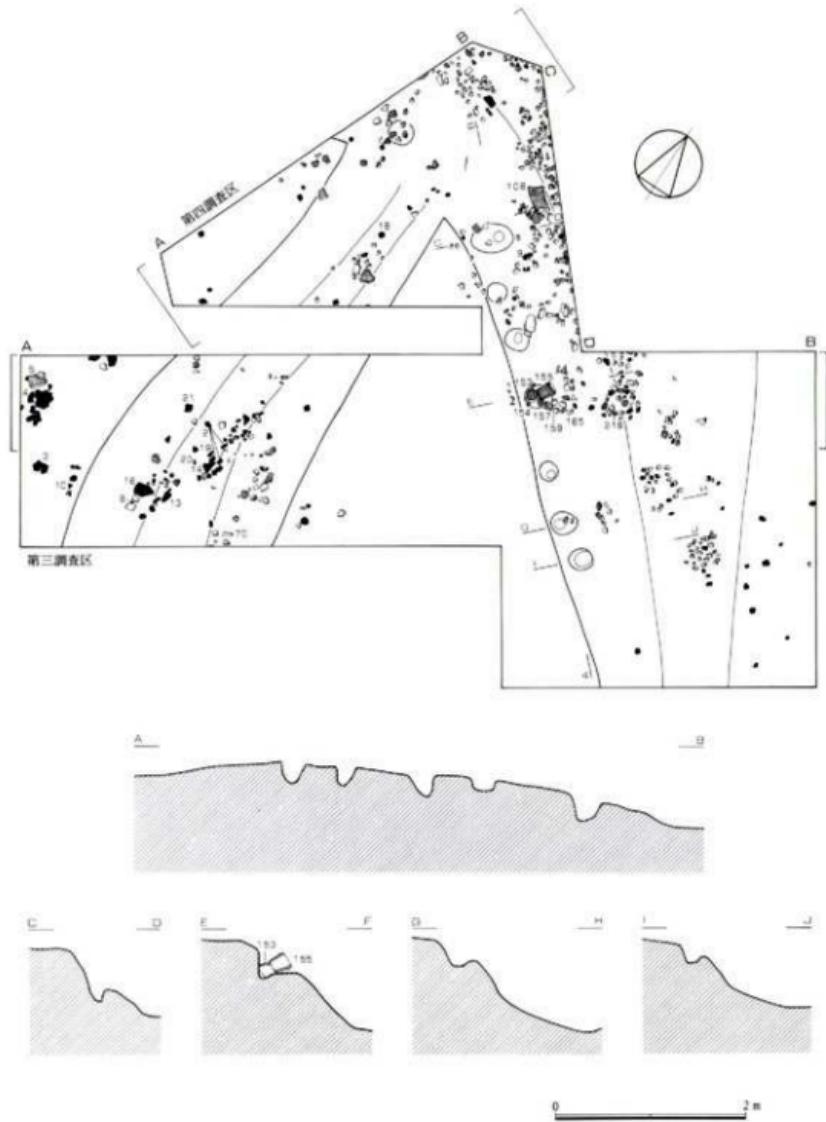


第二図 第一・二調査区遺物出土状態図

遺物は調査区の上半部と下半部にまとまって出土している。上半部はローム面に溝状遺構（上縁幅約2.2m・深さ約90cm）が掘られているところである。ここには埴輪片（約50個）より五領～和泉式期の土師器破片（壺形土器・小型台付壺形土器・壺形土器・器台形土器）が多く散在し、遺物の分布図は埴輪片や繩文土器片を除くと、すべてが古式土師器の破片ということになり、時代的に本古墳と直接の関係をもっていない。おそらく溝構築時か墳丘築造時に住居址を破壊した結果によるものと思われる。

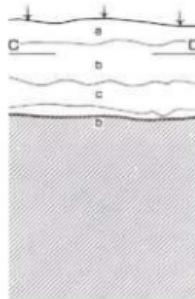
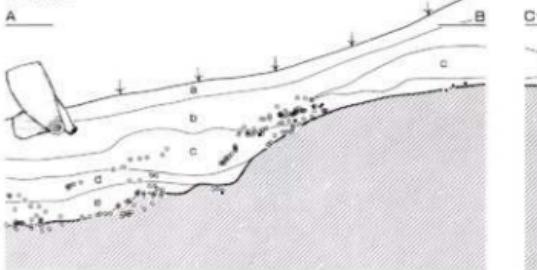
下半部は周溝に相当する部分である。ここで出土した遺物は、円筒埴輪の破片が主体となり、繩文土器と土師器片（約50数個）はあきらかに混入遺物である。埴輪片は數か所にブロック状をなして集中する傾向がみられ、ドットで投影したように、周溝の底面上に少なく、内側上縁付近から中央の上半部に存在する。

本調査区から第四調査区に移行する周溝内側の上縁付近には、略円形（20～30cm、深さ12～20cm）を呈するビットが6か所に並列する。円筒埴輪155が溝内部に傾く状態、すなわち倒れかたや破片の散乱状態を観察すると、こうしたビットには円筒を樹てた可能性が指摘できる。

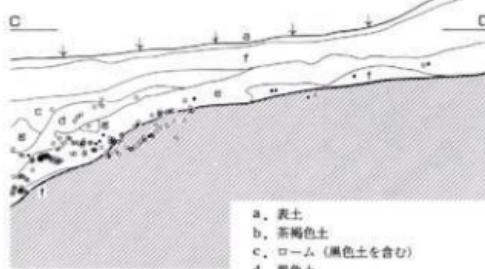
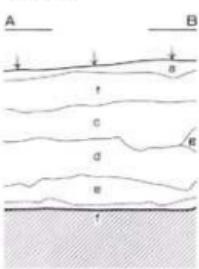


第三図 第三・四調査区遺物出土状態・断面図

第一調査区

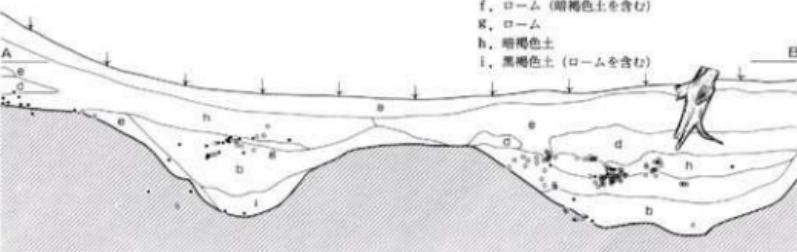


第二調査区

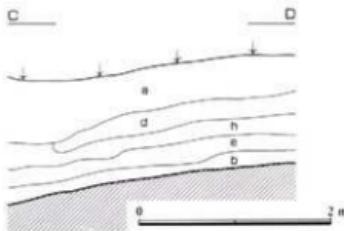
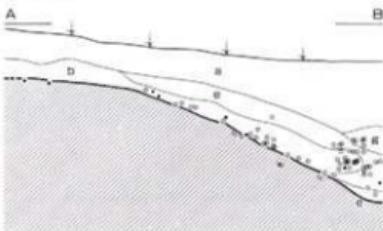


- a. 表土
- b. 茶褐色土
- c. ローム(黒色土を含む)
- d. 黒色土
- e. 黒褐色土
- f. ローム(暗褐色土を含む)
- g. ローム
- h. 暗褐色土
- i. 黒褐色土(ロームを含む)

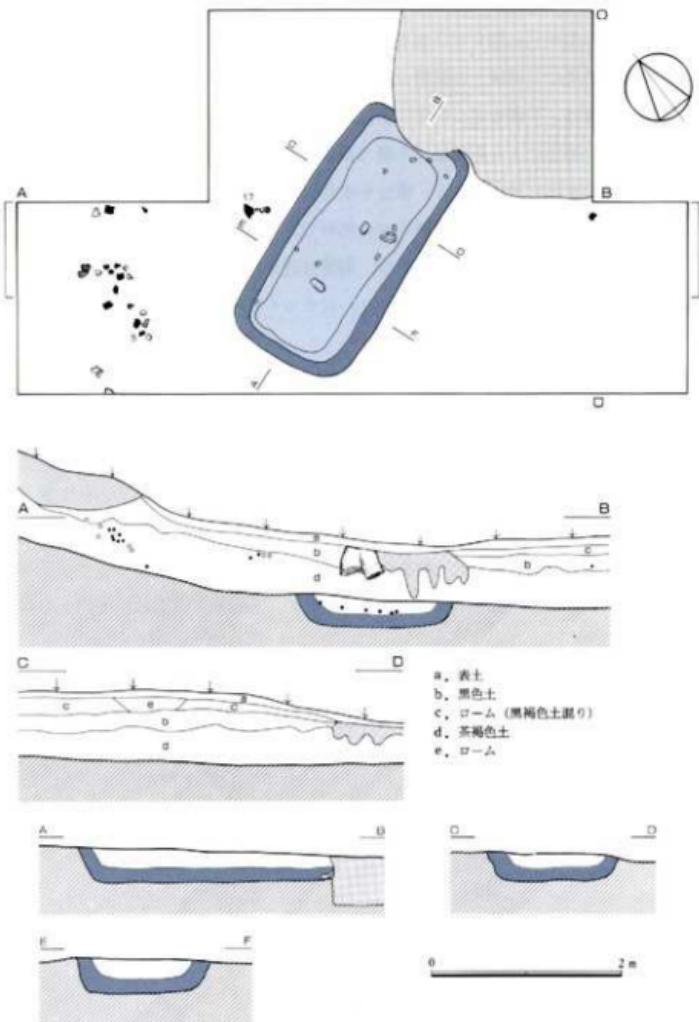
第三調査区



第四調査区



第四図 第一～四調査区遺物出土状態・断面図



第五図 第五調査区遺構出土状態・断面図

第四調査区 長さ4.5m×幅2.5m（第三・四図、図版第八・九）

本来は墳丘の東南側に設定する調査区であったが、第三調査区において、墳丘側から北にのびる溝状遺構が出現し、周溝との関係を確認する目的で第二・三調査区の間に設定したものである。溝状遺構と周溝は、本調査区の北端において交差し、前者が僅かに深いことも確かめられた。しかし、切り合い関係による新旧は、土層（黒褐色土）の断面にあらわれなかった。周溝については、第一～四調査区を連結すると、墳丘を中心に弧状にめぐる事実がいっそう明確になった。

本調査区の遺物は、円筒埴輪の破片が大部分で、この中に前期縄文土器や土師器片が若干混在している。平面・垂直分布のありかたは、周溝付近から下方に集中して散在する。こうした破片の出土状態は、故意に破碎したというより、おそらく昔時の開墾などによる破碎散乱と考えるべきであろう。

第五調査区 長さ8.0m×幅2.0m、拡張部長さ4.0m×幅2.0m（第五図、図版第一〇～一二）

墳丘の東側に周溝の有無を確認する目的で設定した調査区である。現地表面から50～70cm下のローム面において、調査区のほぼ中間に長方形の土壤状遺構が、略東西方向に検出された。さらに全容を確認するため北東側に拡張した。この時点においても周溝と思われる掘り込みは認められなかった。第一～四調査区内周溝の曲線を東側に延長してみると、本調査区の外側約2.0m付近の地点に相当することになるが、樹木の関係もあり拡張作業は断念せざるをえなかった。

本調査区の遺物は、埴輪片がほとんど出土せず、土師器や須恵器の破片なども極めて少量である。

なお、この調査区の周辺は、墳丘断面図（右端部）からもうかがわれるよう、大部分の堆積土砂が搅乱層であり、軟らかく一度掘り返したような性状を呈する。防空壕も近くにあり、この搅乱がひろい範囲に及んでいるように思われる。

第三章 調査区内出土の遺構

墳丘の東側周溝を確認するために設定した第五調査区は、地表面下約50～70cmでローム面に達する。こここのローム確認面で、略東西方向にのびる土壤状遺構（東壁一部攪乱）が発見された。

形状は、平面形が隅丸長方形を呈し、掘り込んだ周壁と底面に、厚さ約15cmの褐色・青白色粘土を一樣に貼付したものである。全長約2.8m（内法約2.6m）、幅約1.3m（内法約1.1m）、確認面からの深さ西端部付近で35cm（内法20cm）、東端部付近で25cm（内法15cm）を測る規模で残存する。短軸の断面形は、U字状を呈して底部から立ち上がる形状をみせるが、明らかに中程で切断されたような状態である。遺体を埋納するための施設であれば、おそらく構築当初の周壁は、すくなくとも50cm前後の高さが必要と思われる。

内部には、黒褐色のロームを含んだ土砂が充満し、その中に図示したような状態で大小15個の自然石（砂岩・安山岩など）が検出され、これ以外には全くなんらの遺物も出土しなかった。良好な各種埴輪を出土した本古墳に伴う埋葬施設というには、規模的にいさか貧弱にすぎる。

これと似た事例では、平成3年11～12月、ゴルフ場造成に伴う東茨城郡茨城町所在の神谷古墳群の墳形確認に際し、第6号古墳（帆立貝式前方後円墳）で調査したことがある（井上義安・青山俊明『茨城町神谷古墳群』茨城町神谷古墳群発掘調査会 平成5年4月）。このときの記録によると、ローム面に掘り込んだ墓壙の形状は、①隅丸長方形に近く、②周壁に10～15cmの厚さで粘土を貼付する。大きさは、③全長約2.5m、幅約1.3m前後、深さ推定55～67cmである。未発掘のためにこれ以上のことは判明しないが、①～③の内容は本遺構と極めて類似しており、いずれにしても埋葬施設であることには變りないと思う。

ちなみに、この古墳の規模は、全長約15m、後円部径約11m、前方部長さ約4m、同幅推定8.5m、くびれ部幅約7m、後円部の高さは地山のローム面から約1mを測る小型のもので、規模の点からは北屋敷第二号古墳と比較にならない。

第四章 出土埴輪の概要

第五調査区を除く各調査区内においては、遺物出土状態図に示したように、多くの埴輪片が発見された。しかし、全形を復元できる資料は認められない。埴輪の破片は、すべて円筒埴輪の部類に属し、形象埴輪類は混在していない。

円筒埴輪は、先の報告書のなかで分類した、いわゆる体部から漸次外反して開く外反形の円筒埴輪が大部分である。この他に第一次調査では未発見の朝顔形と思われる円筒が1例出土した。

口縁部（口唇部を含む）について（第七図）

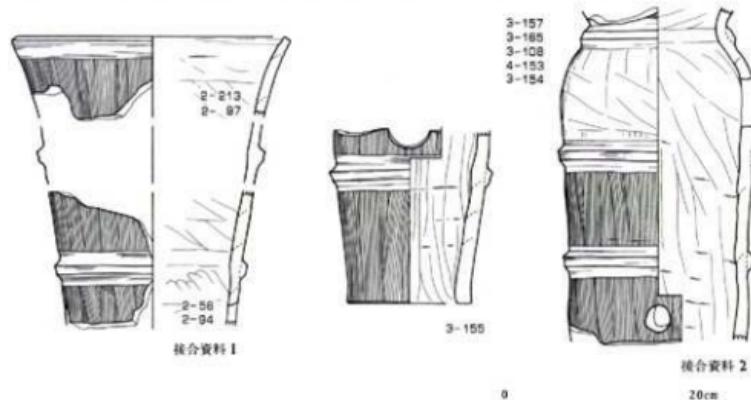
口縁部の資料は、上半部付近からゆるやかに外反して開くC類の仲間、上半部から強く外反するD類などが一般的にみられる。また、上端部付近でやや角度を変えて外傾するB類に近いものも若干存在するが、小破片のために明確な分類は困難である。

口唇部は図示した資料がほとんどすべてである。端部を方形に近く整えるものが多く、端部を外側に突出または肥厚させるものなどもある。外面の調整手法も、総じて第一次調査の出土埴輪に類似している。

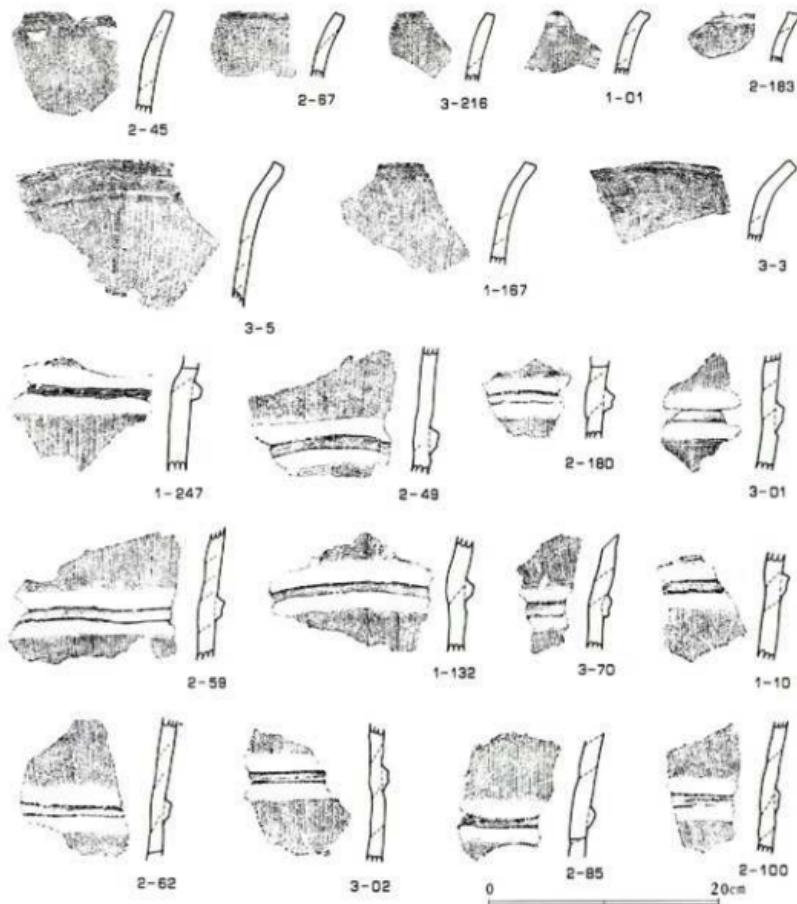
体部について（第七図）

凸帯と透孔により構成される体部は、良好な大型破片が少ない。凸帯の形状は、断面が台形に近いもの、断面の中央が僅かにくぼむものなどにわけられる。完形品がないために凸帯の本数と透孔の位置は不明である。

器面の調整は、外面が継刷毛、内面が縦位、斜位または横位のなでを施している。



第六図 円筒埴輪実測図(1)

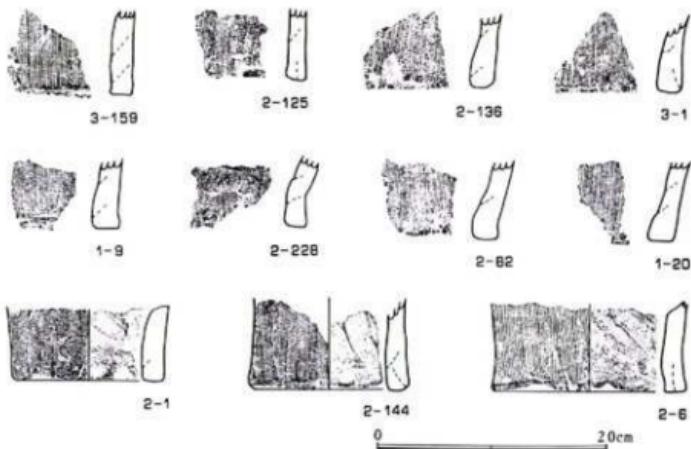


第七図 円筒埴輪実測図(2)

底部について (第八図)

底部は断面の形状によって、おおむね端部が方形に近いもの、端部が両側にやや肥厚するもの、端部が内側に肥厚するもの、端部が外側にやや突出するもの、端部が丸味を有するものなどにわけられる。

器面の調整を観察すると、外面は縦方向の刷毛目、内面には斜めのなでを施したものが多い。



第八図 円筒埴輪実測図(3)

円筒埴輪

A 外反形円筒埴輪（第六・七図、図版第一三）

接合資料1は、基底部から体部第1段下半と第3凸帯の上下付近を欠失している。体部はほとんど直線状に外傾して立ち上がり、口縁部に至って弱く外反する。この埴輪は、基底部1段、体部2段、口縁部1段の4段構成、凸帯は3本を貼付し、透孔は体部の2段と3段（一部残存）に各2個ずつ穿孔される。各部の外面は、縦位の刷毛目（工具幅約2.0cm、刷毛目数8本/cm）で調整する。口縫部は横なでを施す。内面の調整は、口縫部の横なでを除くと、体部と底部に斜めの指なでを施しているが、部分的に積み上げ痕を残す。焼成良好、黄褐色。第二調査区出土。

3-155は、基底部と第1凸帯、体部第1段の下部を残す円筒で、口縁部は多分外反するものと考えられる。凸帯は断面の中央が僅かにくぼむB類に該当する。体部の第1段には、2個の相対する透孔（径約4.5cm）が配置穿孔されている。外面は縦位の刷毛目（工具幅約2.0cm、刷毛目数8本/cm）を施す。内面の調整は、ほぼ全面に指頭による縦方向のなでを行っている。現存高約19.0cm、底径13.0cm、器厚1.2~1.5cmを測る。焼成良好、赤褐色。第三調査区出土。

B 朝顔形円筒埴輪（第六図、図版第一三）

接合資料2は、基底部と口縁部を欠損している。口縁部は大きく外反して開くものと思われる。凸帯は頸部と体部に3本残存し、透孔は肩部に一对（径約6.0cm）と体部に1個（径2.5cm）存在する。外面の調製は、肩部が横なで、体部が縦刷毛（工具幅約2.0cm、刷毛目数8本/cm）を施す。内面は斜位の指なでを行い、所々に接合痕を残す。焼成普通、暗灰色。第三・四調査区出土。

第五章 出土遺物の概要

第一～五調査区内においては、多くの円筒埴輪破片に混在し、封土中から縄文土器、土師器、須恵器、内耳土器やかわらけなどが発見された。それらの遺物は下記のような内容である。

1 縄文土器（第九図、図版第一五）

縄文土器は破片数約80個をかぞえ、早期と前期に大別される。早期の破片は、第三調査区内の01が該当し、太い沈線を縦位に並列、その下に細い沈線を横走させたもので、この特徴は田戸下層式に対比できる。前期の土器のうち第一調査区の4は、器面が多少磨滅しているが、繊維を混入した土器で前半の花積下層式期、第三調査区の145も繊維を含有し、瘤状突起と円形竹管文を配した波状口縁土器で黒浜式期に比定される。その他の破片類はすべて後半の浮島系に該当する。燃系文地に各種文様を複合させたI式から、平行沈線文や変形爪形文を主体としたII式、連続貝殻文を施した319などがあり、条線文と平行沈線文・有節平行沈線文の320は、新しい要素を備えた土器になる。結じて前回の道路部分から出土した土器に比較すると、前期後半の浮島式の内容はほとんど大差ないといえよう。

2 土師器（第一〇図1～12、図版第一六）

約270個の破片は前期から中期に比定されるものである。1と2は口縁部がくの字状に外反する壺形土器で、器面に刷毛目が斜行する。3は小型の台付壺形土器であり、口縁部と台部の一部を欠失する。器面は箒なでを施す。4は口縁部が直立ぎみに立ち上がって外反し、胴部は球状に大きく膨らむ壺形土器である。5は有段口縁の壺形土器で箒により調整される。6と7は底部の破片で、前者に刷毛目、後者に箒削りが残る。8は口縁部がくの字状に開き、底部を欠失する鉢形土器で器面は箒で調整する。9の壺形土器にも箒による調整痕がみられる。10は器受部を欠損した器台形土器である。器受部の底部中央と外反する脚部に小円孔が穿たれる。11は粗製の異型器台形土器の破片である。12は高壺形土器の脚部に相当し、外面に箒なで、内面に輪積痕を残す。

3 須恵器（第一〇図13～17）

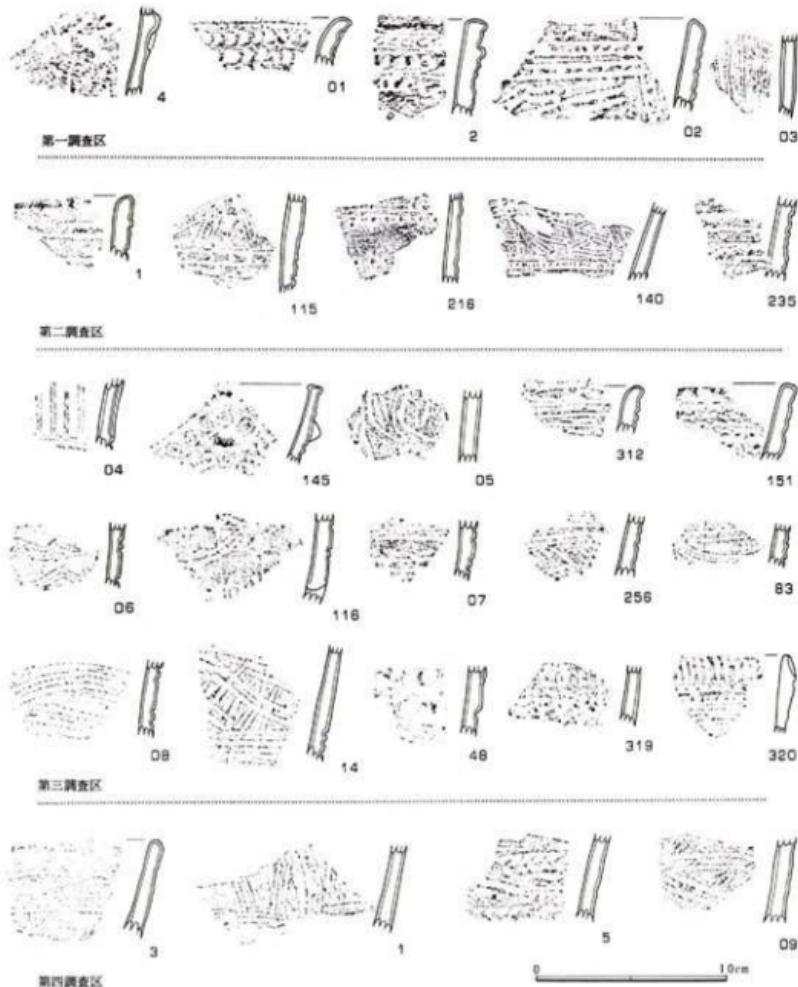
13は口唇部中央が若干くぼみ、ほとんど直線状に開くので多分コシキの破片であろう。14～17は全て大型壺の底部破片で、さまざまな形状を呈している。

4 内耳土器（第一〇図18・19）

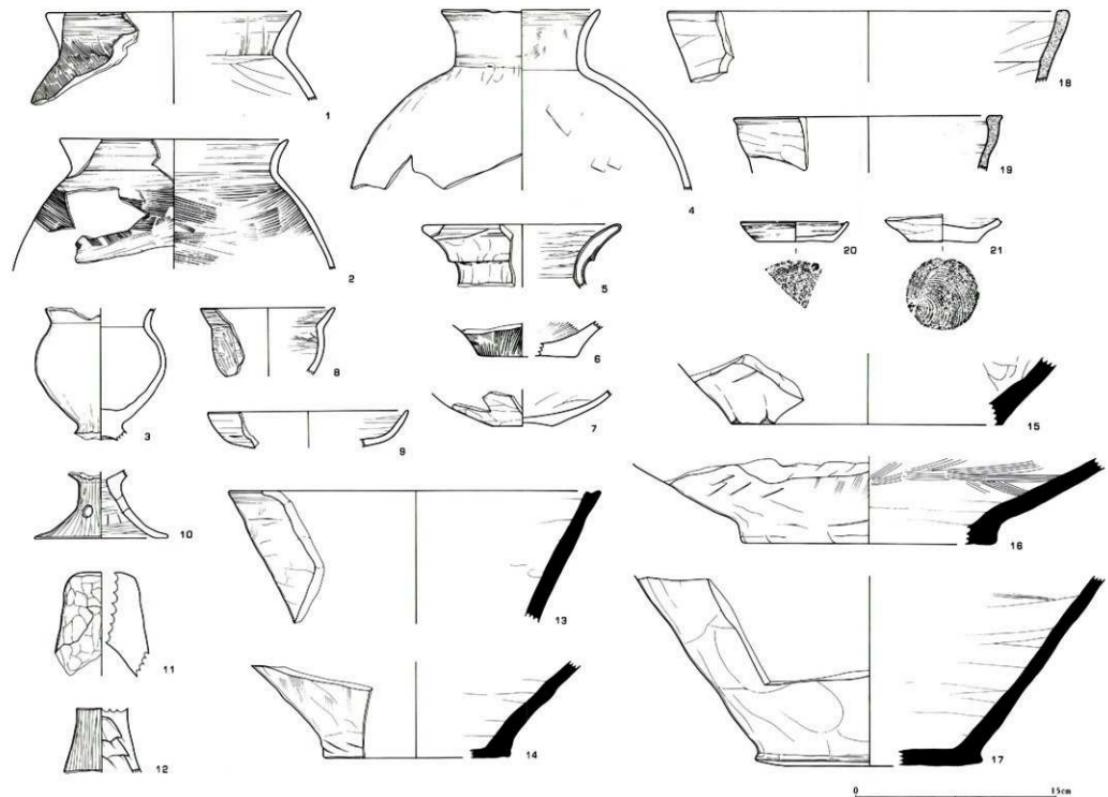
口縁部と胴部の破片が若干存在する。18は僅かに内湾して開き内面に稜を有する。19の口縁部も丸味をもち、口唇部の内外面を肥厚突出させている。器面はなでを施し、外面に媒が付着する。

5 かわらけ（第一〇図20・21）

土師質のかわらけは、埴頂部の祠から転落埋没したものらしい。2例とも皿形を呈し、体部は弱く内湾しながら立ち上がる。水挽き成形で底部に回転糸切り痕が残る。赤褐色。良好。



第九図 調査区出土遺物拓影図



第一〇图 调查区出土遗物实测图

第六章 調査の成果と問題点についての覚書

このたびの市道常澄6-0008号線の改良工事に伴って発見された北屋敷第二号古墳は、昨年の第一次調査に続いて、第二次の墳形確認調査が終了した。この間における調査の内容については、本書に収録した第一次と第二次調査報告の中で記述してきたとおりである。

本古墳の考古学的解明は、この調査の成果をもって終った訳ではなく、いくつかの問題点が指摘でき、今後の研究課題として残されたといえる。

まず、第一に注目しなければならないことは、古墳の研究にとり最も基本的な墳形が、円形なのか前方後円形を呈するのか、周溝調査からは明確にできず、未確認のまま次回の調査に委ねられた。はからずも短時日で第二次調査の機会が到来したので、この問題が解明できるという期待を抱いて発掘に臨んだ。しかし、地権者は森林愛護の念が固く、立木の伐採を一切禁じられ、思うところに調査区が設定できず、残念ながらこの解明は今後に残された課題となってしまった。

埋葬施設と副葬品は、被葬者の生前における社会的地位を推察する資料の一つである。現時点においては、第五調査区内にローム面を若干掘りくぼめ、側壁と底面に粘土を貼付した遺構（上半部は存在しない）が発見された。埋葬に関係ある施設と思われるけれども、副葬品は全く検出されていない。はたしてこの遺構が本古墳に伴う埋葬施設と考えるべきか、あるいは古墳築成以前の施設であるのか、連断できない面も残っている。

平成3年5月には、本古墳の西方約100mの北屋敷地内で、道路の改良工事が行われ、このとき墳丘が削平された古墳（第1号墳）の発掘調査を実施した。

調査の記録によると、形状は円形を呈し、規模は東西13.5m、南北14.0mを測り、幅1.5~2.9m、深さ37~69cmの周溝が全周する。埋葬施設は、中央寄りの南側地山を掘り込んで構築した横穴式石室（長さ約3.9m、幅約1.8m、高さ約70cm）が存在し、内部底面から副葬品（直刀3、刀子3、鐵鏃約30）が出土している。

両古墳を比較すると、墳丘の規模の点では、ほぼ同程度であったようにうかがわれるけれども、第1号古墳には凝灰岩の切石で構築した横穴式石室があり、本古墳の現墳丘の西南半部地山面には、弥生時代後期の遺構、古墳時代前期の住居址や防空壕などが発見されただけで、いわゆる主体部（石室）は存在しなかった。前述した良好な円筒、形象埴輪を多出した古墳としては、第五調査区発見の土壤状遺構を主体部とした場合、両古墳間における埋葬施設の格差があまりに大きすぎることも事実である。

発掘開始前の墳頂部付近には、三枚の扁平な砂岩があり、そのうちの大型のもの（長径約1.3m×短径約0.8m）の上に祠が祀られていた。この板石は、石室の蓋石または側石にすこぶる近似していたので、地主宮部久男氏にその出所を尋ねたところ、祖父の代から受け継いだものであり、搬

入石材であったかは全くわからないという。しかし、これ以外には、石室を構築したと思われるような石材は見当たらなかった。かりにこの石材が石室の一部であったとしても、石室床面に敷いた玉石ともども別のところに、一括搬出利用しているかも知れないということは到底考えられない。第一・二次の調査を通じて石室に結びつくような玉石類の集積址は確認できなかった。

ちなみに一例を挙げると、田谷町七ツ洞池の台地上に所在する富士山古墳（全長18.1mの前方後円墳）も埴輪（円筒、人物？、家など）を伴っていたが、主体部は後円部の墳頂下1.5mの付近に存在し、長さ2.0m、幅80cm、深さ30cmの規模をもつ粘土櫛であり、副葬品が皆無という事例も報告されている。³¹⁾こうしたことから考慮するならば、古墳の主体部は、かならずしも規模の大きい石室でなくともよい訳になる。

さて、市内には埴輪を出土する古墳として、愛宕町の愛宕山古墳（前方後円墳）をはじめ前記の富士山古墳（前方後円墳）その他が知られているが、墳丘に樹立した埴輪の配列状態から葬送儀礼をうかがえる例は僅少である。本古墳の場合、東南側一帯が封土の削平と擾乱。それに加えて第五調査区内にほとんど埴輪片がみられないことから、埴輪の配列は墳丘をめぐらせずに、主として北西の片側墳麓に樹立した可能性が強いように思われる。

個々の埴輪、とくに人物埴輪については、顔面の表情から同一工人の作と考えてよいと思うが、そうした埴輪の供給先をどこかの窯跡（茨城町小幡北山・旧勝田市馬渡・常陸太田市元太田山窯など）に求めるのか、今後の胎土分析を含めて解明しなければならない。また彩色した形象埴輪をみると、赤彩を施したもののは皆無であり、すべて鈍色の顔料が塗布されている。この種の埴輪は、那珂川北岸の旧勝田市から東海村、日立市にかけての久慈川下流域を中心に分布することが知られていた。³²⁾今回は那珂川を越えた大串の地に出土した点で注目される。

本古墳においては、直接被葬者の政治・経済・軍事上の地位を推察しうる副葬品の発見はないが、那珂川下流域右岸に発達した広大にして肥沃な土地の生産力（経済的背景）を考慮すると、大串の地を統治した有力な首長層の奥津城と考えてよいであろう。出土埴輪から想定される古墳の築造年代は、おおむね6世紀の後半に比定できると思われる。

本報告は、発掘調査の性質上、出土品の整理から執筆までに、あまり時間的余裕がなく、問題点を深く検討できなかった。他日を期したいと思う。

1) 茨城県教育財団『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1』

平成5年3月

2) 水戸市史編さん委員会『水戸市史』上巻 昭和38年10月

茨城県史編さん原始古代史部会『茨城県史料』考古資料編古墳時代 昭和49年2月

3) 稲村繁「紺」色考『風土記の考古学』1常陸国風土記の巻 平成6年5月

写 真 図 版



1 発掘調査の状況



2 第一調査区の遺物出土状態〈南から〉



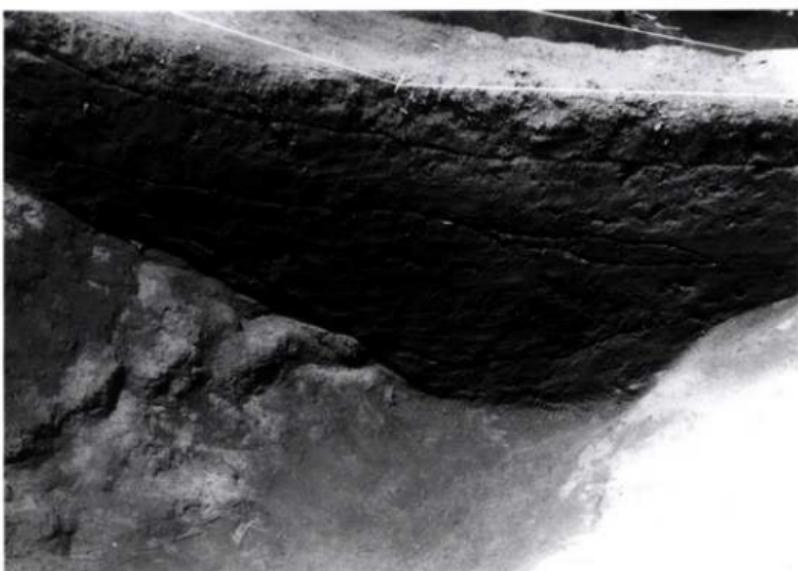
第二調査区の遺物出土状態〈南・北から〉



第二調査区の東壁断面（西から）



1 第三調査区の遺物出土状態



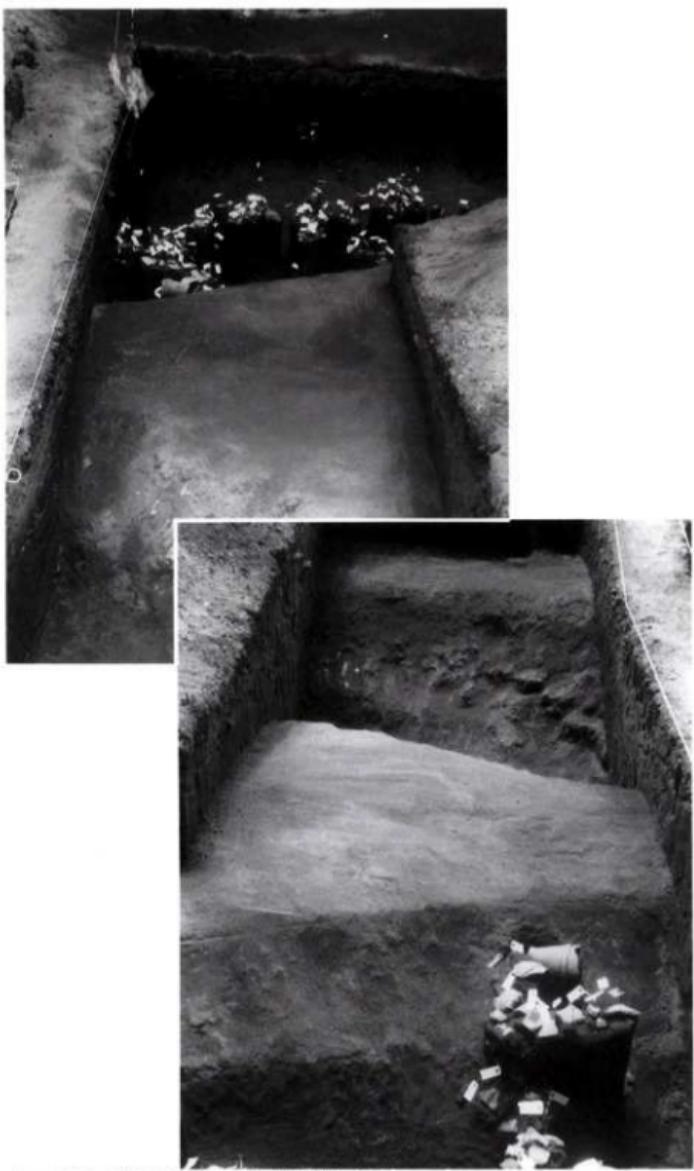
2 第三調査区の周溝断面



1 第三・四調査区の周溝〈西から〉



2 第三・四調査区の溝状遺構断面〈西から〉



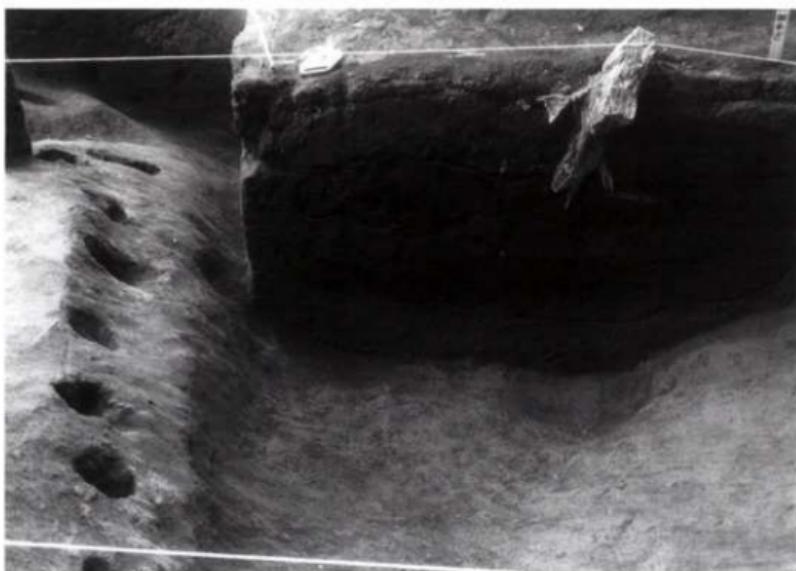
第三調査区の遺物出土状態（上）溝状遺構（下）



1 第三・四調査区の周溝とピット群〈北西から〉



2 第三調査区内縁のピット群〈南西から〉



1 第三・四調査区の周溝とピット群（北西から）



2 第四調査区内縁のピット群（南西から）



1 第四調査区の遺物出土状態〈西南から〉



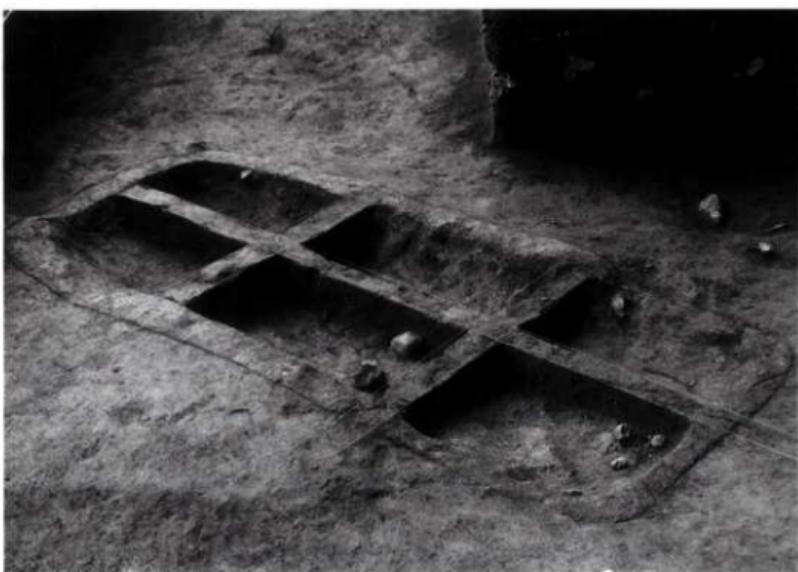
2 第四調査区の遺物出土状態



1 第五調査区の土壤状遺構 <東南から>



2 第五調査区の土壤状遺構 <東から>



1 土壌状遺構の調査状況（東南から）



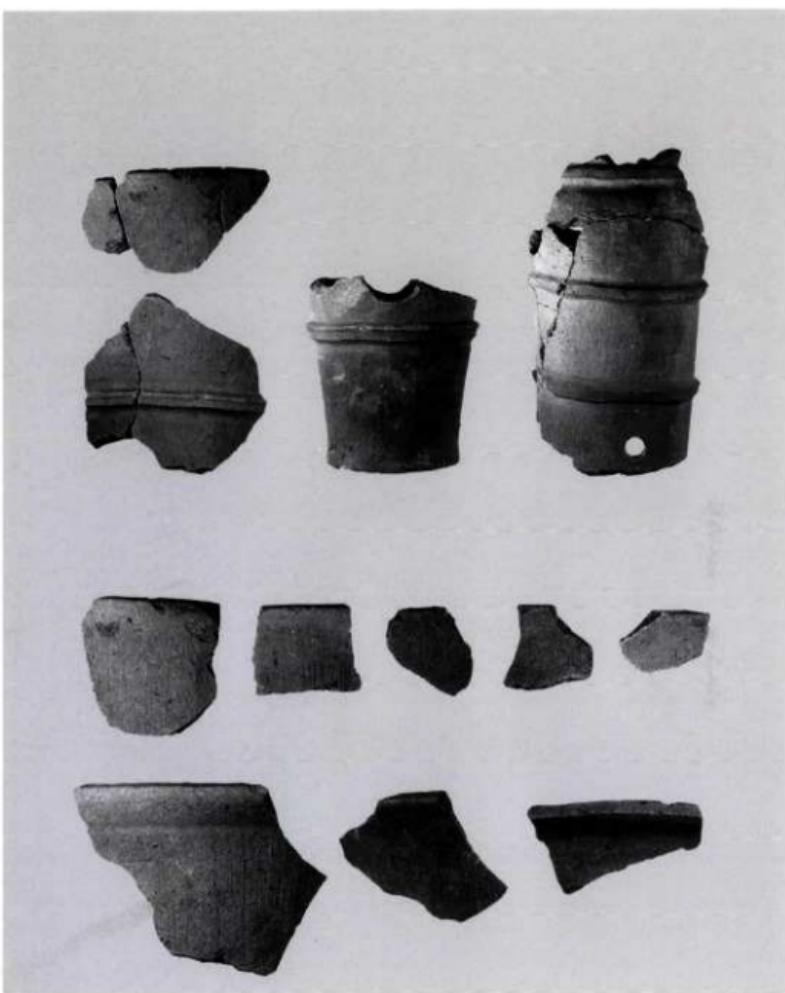
2 土壌状遺構の調査状況（東から）



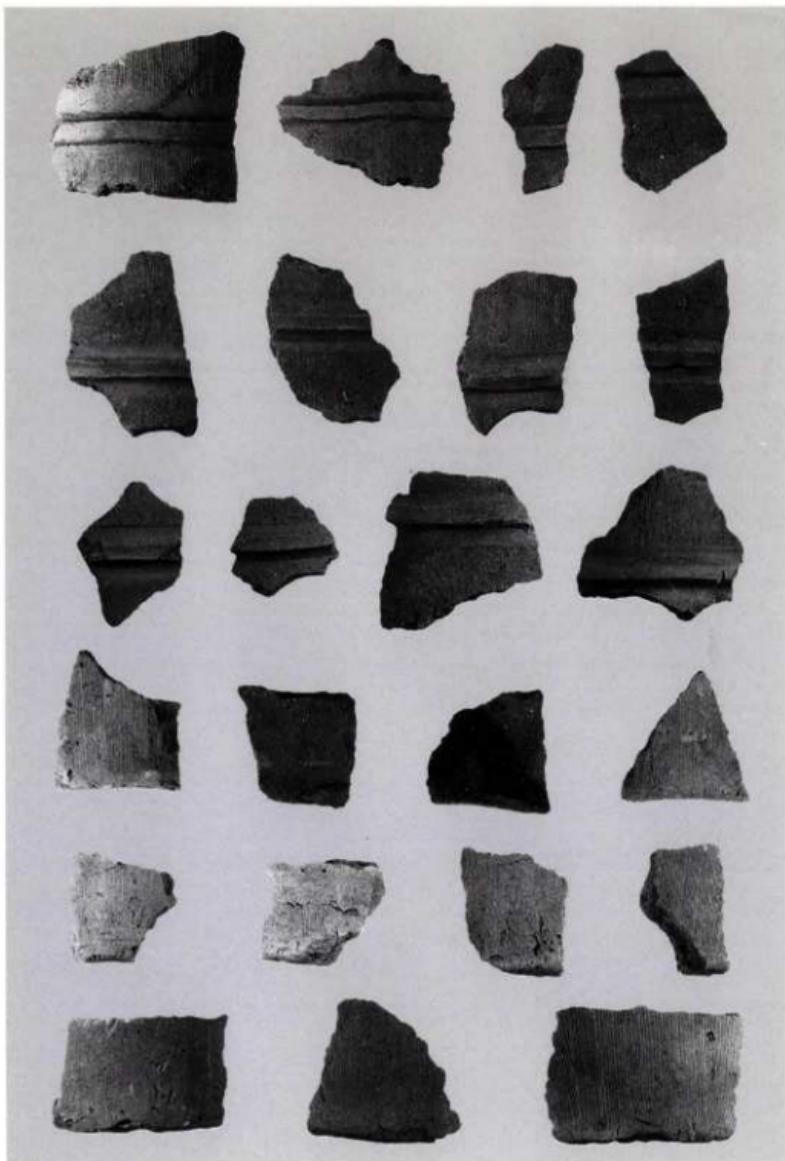
1 土壌状遺構の切断（東から）



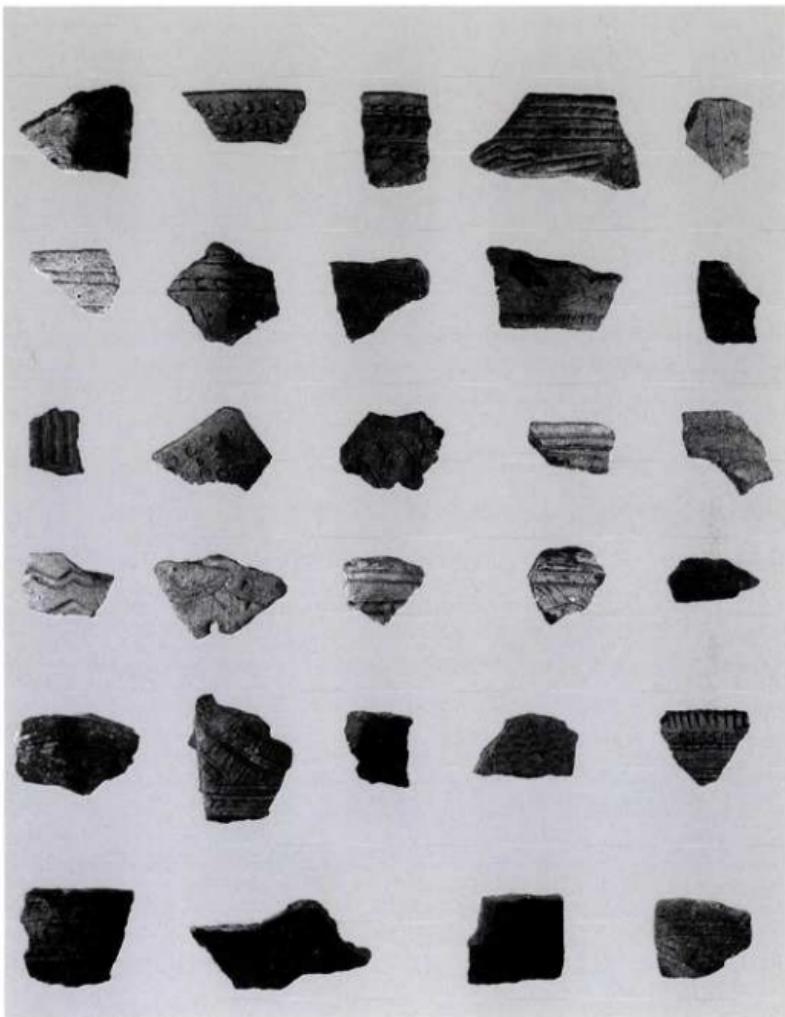
2 北星敷第二号古墳の現状（南から）



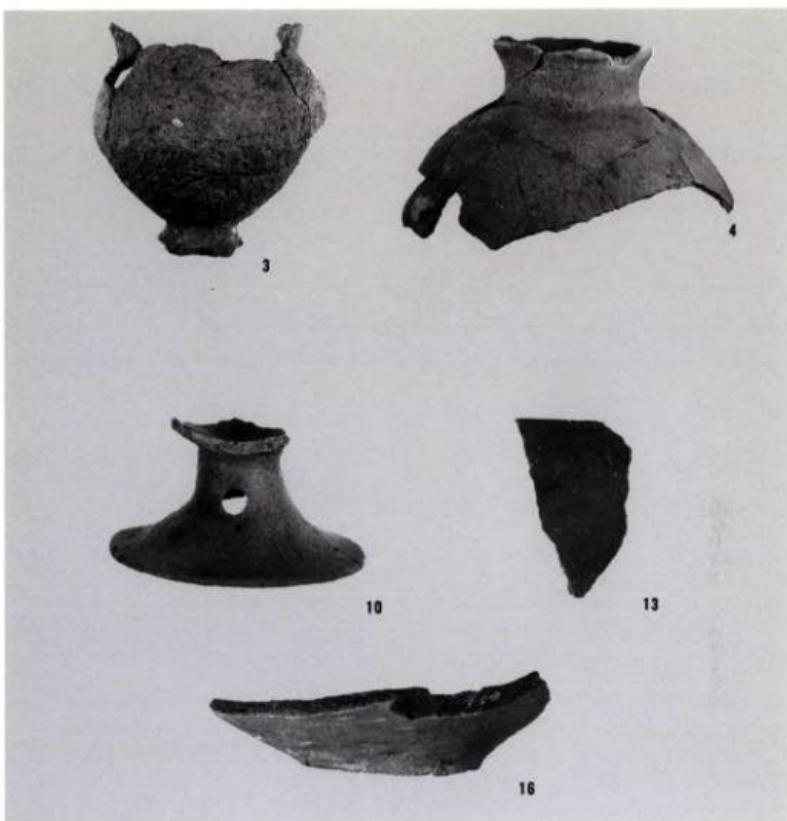
円筒埴輪（1）



円筒埴輪（2）



調査区内出土遺物（1）



調査区内出土遺物（2）

確認調査関係者

発掘調査從事者

担当者 井 上 義 安 (日本考古学協会員・ひたちなか市文化財保護審議委員)

補佐員 大 芦 あ さ

作業員 石 崎 洋 子 江 橋 孝 雄 萩 沼 秀 樹 川 又 とも枝

栗 原 芳 子 郡 司 な か 桜 井 忍 郡 よし子

田 綿 安 文 飛 田 信 雄 算 輪 信 吉 安 真奈美

柳 瀬 芳

整理報告書作成從事者

井 上 義 安 (整理作業指導・本文執筆・レイアウト)

大 芦 あ さ (埴輪接合復元)

鈴 木 浩 子 (図面作成指導・埴輪実測図・拓影図作成)

江 橋 和 子 (遺構図作成)

安 真奈美 (遺構図・埴輪実測図)

内 藤 彰 (遺物写真撮影)

水戸市北屋敷古墳

発 行 平成 7 年 2 月

編 集 井 上 義 安

印 刷 株式会社 あけぼの印刷社
